

# 翻訳「革命」期における翻訳者養成 ー公開シンポジウムの報告と今後の取り組みー

# 翻訳「革命」期における翻訳者養成

—公開シンポジウムの報告と今後の取り組み—



## 【目次】

はじめに	5
公開シンポジウム「翻訳『革命』期における翻訳者養成」(2013年1月12日)の報告	9
第1部 翻訳者を取りまく環境	
基調発言：山田優 「翻訳者を取りまく環境の現状と今後」	11
ディスカッション	20
第2部 翻訳者コンピタンスと翻訳者養成	
基調発言：武田珂代子「『革命』期に求められる翻訳者コンピタンスと 翻訳者養成」	34
事例報告：ラッセル秀子「モントレール国際大学大学院翻訳課程」	41
事例報告：影浦峽「みんなの翻訳」	47
ディスカッション	53
これまでの研究の総括と今後の課題	65
参考文献	74
各種情報リンク	77
研究者紹介	81
謝辞	



## はじめに

本書は、立教大学学術推進特別重点資金（立教 SFR）によるプロジェクト研究「翻訳『革命』期における翻訳者養成の新たなコンテンツと方法に関する学際的研究」の一環として、2013年1月12日に立教大学で開催した公開シンポジウム「翻訳『革命』期における翻訳者養成」（立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科主催、立教 SFR 翻訳研究プロジェクト共催）の記録と本プロジェクトのこれまでの総括を報告するものである。

### 研究の背景と目的

グローバル化、多言語多文化共生社会、インターネット情報の爆発的増加を背景に、異言語・異文化間コミュニケーションの仲介者としての翻訳者の役割はますます重要になってきた。その中で、機械翻訳、翻訳支援ツールの進展、ボランティアによるオンライン翻訳の普及、翻訳産業構造のグローバル化などを背景にして、翻訳者をとりまく状況に「革命」が起こっているという指摘がある（Pym 2012a, 2012b）。機械翻訳や翻訳メモリーの使用による翻訳作業プロセスの変化、従来の「起点テキスト→目標テキスト」という静的概念に代わる「修正され続けるテキスト」という動的概念の浸透、プロ翻訳者ではないファンやユーザーがウェブ上でコラボラティブに生成する翻訳の拡散（「翻訳の民主化」（Pym 2012a））、オンライン上で世界中から翻訳者を募るクラウドソース型翻訳ビジネスの起業など、「パラダイムシフト」「新世界」（Fenstermacher 2012）とも呼ばれる状況が急速に進行しているのだ。

翻訳環境に大きな変化が生じている現在、そして今後、どのような翻訳者が求められるのか。翻訳者に求められる新たなコンピタンス（能力、スキルセット）とは何か。翻訳者養成機関はどのような翻訳者の養成を目指すべきか。新たに求められる翻訳者コンピタンスをどのように涵養していくのか。これらの問題意識が出発点となり、2012年6月「翻訳『革命』期における翻訳者養成の新たなコンテンツと方法に関する学際的研究」が立ち上がった。本研究の目的は、まず、現在進行中の翻訳「革命」の実態を包括的に把握し、そこで必要とされる新たな翻訳者コンピタンスを見極め、そして、そのコンピタンス達成を目標とした翻訳者養成の新たなコンテンツと方法をデリバリー手段（媒体）も含めて検討し、提案することにある。学際性、翻訳の実務者・業界の視点、国際性に立脚する本プロジェクトは、開放的で遂行性をともなう研究を通して、翻訳者に有益な情報を提供し、翻訳教育の新しい方向性に貢献することを目指している。

### 研究チーム

翻訳環境の急激な変化を包括的に分析するためには、翻訳研究一般のみならず、自然言語処理、情報工学、メディア研究などの知見に依拠する必要がある。また、翻訳者コンピタンスの見直しには、翻訳実務者および翻訳業界の視点が不可欠だ。さらに、今後の翻訳者養成のコンテンツと方法の考察では、国内外の翻訳教育実践者の知見に加え、翻訳支援ツール、プロジェクト管理、ユーザー参加型ウェブ上プラットフォームなどに関する専門知識が有用となる。これらの要件に対応するために、学際性、産学協同、国際性をスロー

ガンとして以下のような研究チームを編成した。

#### 研究代表者

武田珂代子（立教大学）

#### 研究分担者（アルファベット順）

井口耕二（立教大学、翻訳者）

影浦 峯（東京大学）

オヘイガン統子（ダブリンシティ大学）

ラッセル秀子（モントレール国際大学）

関根康弘（立教大学院生、クレストック）

山田 優（麗沢大学他、翻訳ラボ）

各研究者の履歴は81-82頁を参照していただきたいが、これまで武田は主に本プロジェクト全体を管理しながら、ラッセル、山田とともに翻訳者養成の構成要素について教育者・研究者として知見を共有してきた。また、井口、ラッセルは翻訳実務家として、山田、関根は翻訳メモリーの開発者とユーザーおよび翻訳会社という視点から、翻訳業界の動向についてそれぞれ情報を提供してきた。影浦は、本研究の方向性に関する示唆や、自ら共同開発したボランティア翻訳用プラットフォームの実績および翻訳者養成への応用の可能性に関する知見の共有で貢献してきた。また、オヘイガンは翻訳テクノロジー研究者・教育者として、テクノロジーと翻訳者養成の関係についての包括的視点と、翻訳教育の世界的動向に関する情報を提供してきた。

#### 公開シンポジウムの概要

本研究におけるこれまでの成果を発表するとともに問題提起を行い、それについて一般参加者にも開かれたパネルディスカッションを展開し、今後の研究課題を見極める目的で、2013年1月12日に立教大学で「翻訳『革命』期における翻訳者養成」と題して公開シンポジウムを開催した。パネルは本プロジェクトのメンバーである武田珂代子、井口耕二、影浦峯、ラッセル秀子、関根康弘、山田優で構成し、オヘイガン統子はコメントペーパーを通して参加した。一般の参加者数は100名を超え、首都圏だけでなく東北や関西から翻訳者、学生、研究者、教員の方々が出席された。

午前の部（10：00～11：40）は「翻訳者を取りまく環境」と題し、山田優の基調発言をもとに、パネルメンバーが自由にディスカッションをするとともに、会場から活発に寄せられた質問やコメントに答えるという形で進行した。午後の部（13：00～14：40）は「翻訳者コンピタンスと翻訳者養成」というテーマで、午前の内容を参照しながら武田珂代子が基調発言、ラッセル秀子と影浦峯がそれぞれ事例報告を行い、パネル全員が会場からの質問やコメントに答えながらディスカッションを展開した。

## 本書の構成

本書の構成は以下の通りである。まず、上記シンポジウムの内容を報告する。当日の発表、ディスカッション部分のテープ起こしおよび使用したパワーポイントに訂正や新情報を加え、報告書として読みやすい形式に編集している。

次に、シンポジウム後、プロジェクトメンバーで行なったこれまでの研究の総括と今後の課題の見極めをまとめたものを報告する。シンポジウム当日また後日、一般参加者からいただいたフィードバックを取り入れた内容となっている。

さらに、シンポジウムでの発表やディスカッションに直接関係する参考文献のリスト、および翻訳、翻訳研究、翻訳教育に関する各種情報リンクのリスト、そして最後にメンバーの簡単な紹介を掲載している。

立教 SFR 翻訳研究プロジェクト

代表 武田珂代子



公開シンポジウム

「翻訳『革命』期における翻訳者養成」

(2013年1月12日) の報告



# 第1部 翻訳者を取りまく環境

## 基調発言

### 翻訳者を取りまく環境の現状と今後

山田 優

それでは、まず、最初の基調発言といえますか、問題提起ということで、発表させていただきます。タイトルは、「翻訳者を取りまく環境の現状と今後」です。情報量が多過ぎますので、少し駆け足になるかもしれません。この発表は、この後のディスカッションのきっかけになるような、問題提起的なものと位置付けて進めさせていただきます。(資料1)

#### 資料1

#### 翻訳「革命」期における翻訳者養成 ～翻訳者を取りまく環境の現状と今後～

2013年1月12日  
@立教大学 山田優

発表全体の構成としましては、簡単に、なぜ今、翻訳の革命期なのかということを説明し、次に、テクノロジーの変化に伴う翻訳業界の変化、翻訳者、翻訳環境の変化、手法、方法の変化を概観し、そして最後に、このような状況を踏まえて「誰が何を翻訳するのか」ということを考えていきたいと

思います。(資料2)

#### 資料2

#### アジェンダ

- 導入(なぜ『翻訳革命期』なのか?)
- 翻訳業界/環境/方法の変化
- 誰が何を翻訳するのか?

最初に、この「革命期」という言葉を使うことは、さまざまな批判も受けたわけですが、改めて Pym, A. (2012b) の “Translation skill-sets in a machine-translation age” を読むと、革命という言葉が二つの意味で使われていることがわかります。(資料3) 今、なぜ革命期なのかということ語るに当たっては、機械翻訳、または翻訳支援ツールといったテクノロジーの存在が欠かせないわけですが、まずそれが前提にあるということです。そして最近ではその機械翻訳を取りまく環境そのものが「レボリューション」であるのだ、ということをおっしゃいます。どういうことかということ、今、使われている機械翻訳という

### 資料 3

#### なぜ『翻訳革命期』なのか？

- Pym, A. (2012b). Translation skill-sets in a machine-translation age.
  1. The more you use them (well), the better they get. This would be the “learning” dimension of TM/MT.
  2. The more they are online (“in the cloud” or on data bases external to the user), the more they become accessible to a wide range of public users, and the more they will be used.

...These features should create a virtuous circle. This could constitute something like a revolution, not just in the translation technologies themselves but also in the social use and function of translation.

のは統計的機械翻訳と呼ばれるもので、それは従来型のルールベースではなく、原文と訳文のデータベースを蓄積すればするほど、生成される翻訳の質が高まるという原理に基づいています。そしてもう一つ、それがインターネットにさらされることによって、データベースがインターネットで共有され、今度はその訳文がインターネットで人目に触れることによって、ほかの人がその訳文を直す。訳されていない文章は、また誰かが訳す、というようにデータベースが増えていきます。こういった一連のサイクルが、今、起きているわけです。このサイクルが回転している「レボリューション」であり、そして、そのこと自体が、この環境に大きな影響を与えている「レボリューション」であるという、二つの意味で使っているのです。

あえてここで「革命」という言葉を使わないとしても、翻訳研究ないし翻訳と実践における「技術的転回 (Technological Turn)」ということをやうやう研究者はたくさんいます。マイケル・クローニンもその一人です。(資料 4) これらの IT 技術の発展が、過去の産業革命に似た革命を起こしているのですが、一つの特徴として、先ほどの回転 (レボリューション) の中で、単純に機械翻訳ができたから私たちの環境が変わったんだ、というような一方通行的

### 資料 4

#### 翻訳実践と研究における技術的転回 (Technological Turn)

Technological developments do not happen in isolation; they cannot be separated from other social developments

- Cronin, 2010  
Medium-driven change  
(Bidirectionality of Web 2.0 such as mediumProject Lingua, Worldwide Lexicon, Wiki Project Echo, TED Open Translation Project, Cucumis)
  - Translation Prosumption
  - Post-print translation literacy

な考え方よりは、技術がネット上であってそれが社会の中で使われて、それがまた新たな使われ方をする。そしてまた新たな進展の方向を示唆するという点において、技術と社会的な関係が密接であるというのが、今の革命期における特徴であります。

では、そのテクノロジーがどのように変化してきて、どのように業界に変化を与えたのかを簡単に話したいと思います。(資料 5) そもそも技術的転回が起きるきっかけとなったのは、「翻訳メモリー」と呼ばれるものですが、これについては、Garcia, I. (2009) の論文に基づいた形で説明します。

そもそも「革命」がなぜ起きたのかということですが、「翻訳メモリー」が大きなきっかけでした。(資料 6) 1990年代ぐらいから翻訳メモリーは使われ出しましたが、

### 資料 5

#### テクノロジーと翻訳実践の変化

- Garcia, I. (2009). Beyond translation memory: Computers and the professional translator. *The Journal of specialised translation*, 12, 199-214.

## 資料 6

### TM(翻訳メモリ)以前

- 1990年代より前は、「翻訳支援ツール」という概念はまだ一般的ではなかった。
  - 紙と鉛筆、部分的な「ワープロ」の使用
  - 電子辞書

その後…

- パソコン、インターネットの普及  
翻訳支援ツールの活用

翻訳メモリ以前は恐らく皆さんは、紙と鉛筆で作業をされていたと思います。僕自身も詳しくはないのですが、ワープロとか辞書を使っていたかもしれません。そのような技術も翻訳作業を変えたかもしれませんが、これらは間接的なものでしかありませんでした。それに対して、翻訳メモリというのは、翻訳を直接的に支援するためのツールという位置付けで開発されました。直接的に翻訳を変えたのです。つまり、この出現により、プレ翻訳メモリ時代とポスト翻訳メモリ時代とに分けることができます。これが1990年代頃です。Garciaの論文もここから始まります。(資料7)

## 資料 7

### 1. TM Beginnings

1990年中旬頃～

- TM(翻訳メモリ)
  - 過去の翻訳の「リサイクル」
- L10n(ローカリゼーション(主にソフトウェア翻訳))
  - L10nで使用され一般分野に普及
- LSP(翻訳会社)とフリーランス翻訳者
  - TMがインターフェースになる
  - Trados discounts
- 90年代にTMは翻訳支援ツールとして成熟
  - 用語ベース、アラインメント、QC管理機能の追加

翻訳メモリというのは、翻訳をしながらその訳文をどんどん蓄積していくシステムの中で、翻訳者は過去の翻訳を参照し

ながら翻訳できます。これが出てきたのは、ローカリゼーションと呼ばれる分野が普及したこととも密接に関係しています。Windows 3.1の時代に、世界展開、多言語展開をスピーディに行わなければいけないという要求を満たすために、翻訳メモリが多く使われるようになったという背景があります。翻訳会社も翻訳メモリなしには仕事ができなくなり、またフリーランス翻訳者も使うようになりました。

翻訳メモリは、翻訳だけをするのではなく、翻訳者と翻訳会社のコミュニケーションのインターフェースになったという側面も Garcia の論文では述べられていますが、そこは割愛させていただきます。また、翻訳メモリを使われている方はご存知かと思いますが、データベースに翻訳を溜めながら作業をするために、セグメント、つまり一文一文に縛られながら翻訳をしなければいけないので、これは翻訳者にとって悪影響があるという議論もあり、さまざまな研究も行われています。(資料8)ただ、賛否はあるものの、翻訳メモリが業界の標準ツールとなったのは否定できない事実で、またスピードや効率化の要求に対して、翻訳メモリが手助けとなったということも事実です。これはまだ改革の始まりで、この後、インターネットやそのほかの技術によって変革は進行していきます。

## 資料 8

### Focus on segments

- 翻訳者の役割(翻訳手法)の変化
    - Fuzzy match (データベースが類似訳を提示)
    - No match(従来の翻訳方法)
    - セグメント(文章以下レベルの翻訳単位)に集中する作業
      - always within the narrow context of the TM editor, rather than a 'whole-text' approach (Hennessy 2008)
      - (cf. Peephole translation)
      - (cf.) Sentence salad effect
  - Editing rather than translating from scratch
  - 翻訳資産の蓄積(LSPおよび翻訳者)
  - 効率性の向上
- TMの賛否はあるが、事実上の標準ツールとなる  
➢ 効率性UP、品質UP手助けとなる

(資料9) まず一つは、2000年頃から、今までコンピューター環境、自分のローカルの環境で行っていたものが、どんどんサーバーのほうに移行していきます。例えば、翻訳メモリーも自分のパソコン上において作業をしていたのが、インターネット上で共有されるようになり、ネット上でデータベースを一元管理し、多くの翻訳者がそれにアクセスして、多数の翻訳者が同時に作業できる環境が整っていくという状況も起きてきています。(資料10) アプリケーションがサーバーに移行する例としては、ご存知のとおり2000年ごろからSaaSやCloud型のアプリが出てきます。これによって、先ほどの「ローカリゼーション」というもの自体にも変化が起きてきます。Windows 95は、CD-ROMやDVDなどでパッケージ型のソフトとして販売され

ていましたが、それがCloud型アプリになり、開発そのものも、とりあえずウェブ上で使える最低限の機能だけをリリースして、その後少しずつ機能を付加していくアジャイル開発というものに変化すると、パッケージ型のソフトウェアをローカライズするという手法がしだいに古くなってきます。すると、ローカリや翻訳をより早くという要求は、2000年ごろからさらに加速します。その結果、翻訳メモリーだけでは、もはやこのスピードについていけなくなったのです。

(資料11) そこで注目を集めたのが、機械翻訳です。ちょうど2000年頃、より早く翻訳するには翻訳メモリーだけでは不十分だということで、機械翻訳が見直され始めました。また、このころになると、Google翻訳などに代表される統計的機械翻訳、statistical machine translation、SMTと呼ばれるものが出てきます。これは今までの翻訳機よりも品質の良い翻訳を出力できる技術で、それによって、機械翻訳が見直され、注目を浴びるようになります。これを実務翻訳のワークフローに取り込めないかということで、研究や実際の応用が進んでいきます。これが2000年以降の動きです。

SMTの出現によってスピードが圧倒的に上がるという側面はあるのですが、それ

#### 資料9

### 2. From hard drive to server

2000年頃～

- インターネット経由での翻訳データベース共有
  - TM Server
- Web-interactive mode
  - Webベースのツールに移行
    - 翻訳者のローカルに環境の変化
  - 作業時間、作業速度、パターンのモニタリング

➢ フリーランス翻訳者の作業環境への(悪)影響

➢ 納期短縮、翻訳単価の低下に拍車を

➢ LSP側にとっては、効率性、コストにおいて優位に働いているようだが、IT発展の速度に対しては、依然としてマーケット要求を満たせない

#### 資料10

### 3. Translating for the web

- SaaSやCloud型アプリの出現
  - パッケージ型ソフトウェアの減少・消滅
  - 従来型のL10N手法の終焉
- Web関連技術の発展
  - L10Nのさらなる効率化、スピード要求

➢ TMだけでは不十分？

#### 資料11

### 4. Unassisted MT

- MT(機械翻訳)の再来、実践への活用
  - RBMT(ルールベース機械翻訳)
  - SMT(統計的機械翻訳)
- スピードは圧倒的に高い
- Raw MT outputでは品質は不十分
- 'publishable'レベルの品質にならない
- しかし・・・ with the speed we now desire, assessment is tempered by fit for use; if users are satisfied with results, anything more is a waste of resources.
- SMTでは、バイリンガルデータが増えれば、品質向上
  - TMのデータベースが、SMTエンジンで役に立つ

➢ それでも、そのままのMT訳では品質には限界がある？

に加えて今までの機械翻訳（ルールベース機械翻訳）のよりも質のレベルも向上し、その結果、「この程度の質でも翻訳として使えるんだな」という認識が広まりました。fit for purpose という考え方が広がり始めます。つまり、目的に応じて機械翻訳のSMTを使えば、これだけの質が担保できるのだという考え方が浸透し始めたのです。

（資料12）しかし、その一方で、「やはりこの品質では駄目だ」という意見もでてきて、翻訳の質を高める手法や実践への応用方法が模索されます。それが機械翻訳プラス「ポストエディット」と呼ばれるものです。これは、翻訳の質があまりよくない機械翻訳を人間が修正するという考え方です。それによって多くの場面で、事が足りてしまうという状況もでてきます。90年代のローカリゼーション業界では、翻訳メモリーが主流でしたが、2000年代以降では、蓄積されたデータベースを統計的機械翻訳に活用して、そこから生成された翻訳を人間が修正するというやり方にシフトしていきます。ここでは機械翻訳がメインとなり、翻訳者は機械翻訳を修正するポストエディターという存在に変わります。

資料12

### 5. MT-assisted TM, MT+PE

- TMとMTの併用
  - Fuzzy matchにTM, no matchesにMTを使用
  - LSP: preprocess, postprocess
  - 翻訳者: TM/MTハイブリッド型ツール
- MT+PE (MT+ポストエディット)
  - MT-assisted TM
    - MT+PEが主 (TMマッチは副次的に)
  - Web-baseツール
    - Google翻訳者ツールキット, Bing Translator Hub
    - データベース蓄積→SMTの糧としてリサイクル

➢ MTが主になる  
➢ 翻訳者は、MTのポストエディターになる

（資料13）これがテクノロジーが直接的に翻訳に関わる変革ですが、一方でIT技術の面での変化も見られます。先ほどのイ

ンターネットやMTなどの技術が、SaaS型とかCloud型であることによって、さまざまな人が自分でソフトを買わなくても使えるような現象が起きてくる。さらに激しいスピード化の要求に応えるために、今までのローカリゼーションでは翻訳会社に翻訳をお願いするわけですが、その時間でさえもったいないということで、Utility型やAPIというサービスが出てきます。使ったことのある実務者の方はご存知だと思いますが、ProZ.comやトランススマートというものがあります。これはユーザーが翻訳会社に翻訳の仕事を見積もりから依頼するのではなく、常にウェブ上に翻訳者が待っていて、ウェブ上で翻訳依頼のファイルなどをアップロードすると、「やります」という翻訳者とマッチングをしてくれるサービスです。LSP、Language Service Providers、つまり翻訳会社に仕事を依頼するのではなく、翻訳会社をバイパスするような現象も起きてくる。その結果、翻訳サービスの受発注の工程を短縮するようなUtility modeが発展したのです。

資料13

### 6. Translation as a 'utility'

- MT-assisted TMの活用とSaaSの活用がコスト・スピードをさらに激化
  - L10nのSim-shipが一般要求に波及
- TMS(翻訳管理システム)の導入
- APIサービス

➢「Bypassing LSP」現象  
➢ProZ.com、トランススマート、Livetranslation.comなどのオンライン翻訳サービスの出現

（資料14）また一方では、速度だけではなくコストに対する圧力もかかってきます。限りなく安く、限りなく早くという追求がどんどん高まっていく中で、クラウドソーシング翻訳が出現します。これは、ネット

に誕生した新しいコミュニティで、その中の人たちが自主的に、翻訳を行うものです。具体的には、Facebook のローカライゼーションが有名です。Facebook の英語版を日本語版に翻訳したのは、Facebook を使っているユーザーたちの中にある翻訳のコミュニティで、そのユーザーたちがインターフェースを日本語にローカライズしました。だから Facebook 側は全く費用を払う必要がない。そしてユーザーが自主的に翻訳するという現象が起きました。このようなクラウドソーシングのボランティア翻訳やコミュニティ翻訳では、そのユーザーたちが、「この翻訳の品質はどう？」というようなことを掲示板で語ったり、Facebook においては一番良い翻訳にユーザーが投票をして、それが実際のインターフェースに採用されるような仕組みになっています。これはクラウド上でコラボラティブ（協力的）に作業できるコミュニティの翻訳ということで Community、Collaborative、Crowdsourcing の Translation をまとめて CT3 と呼ばれることもあります。

#### 資料14

### 7. CT3、コミュニティ翻訳

限りなく安く、限りなく早く

- Crowdsourcing の出現
  - “hive” members または CT3
    - Community translation
    - Collaborative (Cloud) technology
    - Crowdsourcing (cf. O’Hagan, 2011)
  - SNS と新たなサイバーコミュニティ
    - Facebook の crowdsourcing 翻訳
    - Google 翻訳の「suggestion」機能 (SMT への貢献)

(資料15) まとめますと、今どういう手法で、翻訳者ないし翻訳が行われているのかというのを一覧すると、もちろん今の時代でも、従来の TEP model、すなわち

#### 資料15

### 8. 2010年代以降の翻訳者形態

- TEP model
  - 従来型の翻訳手法
- MT-assisted TM model
  - Translator → Post-editor
  - 原文の前編集 (Pre-edit) も併用し、machine translatability を向上
    - 原文に制限言語の使用 (O’Brien, 2004)
- Utility model
  - プロのクラウドソーシング翻訳: Gengo, Yaqs, コニヤック, GMO スピード翻訳
- Hive model
  - ボランティア翻訳 (みんなの翻訳、Facebook 翻訳等)
    - ゲーミフィケーションの導入
  - バイリンガル話者が「Friends」を支援する

Translation、Editing、Proofreading などの工程を踏む TEP model 型も引き続き行われているものの、他方では、機械翻訳を使った post-editing、MT-assisted TM model も広範に使われるようになってきました。

それによって、繰り返しになりますが、翻訳者は機械翻訳のポストエディターに変わってきているということ。また、さらにその使われ方に関してはさまざまな研究がされています。翻訳機械にとって分かりやすいような原文を、機械翻訳にかける前に準備しておく、すなわち前編集 (pre-edit) を併用して機械翻訳の translatability (翻訳しやすさ) を向上させる手法。さらには、原文そのものに文法や語彙の制限をかけて、機械にもっと分かりやすくさせるような「制限言語」の使用も行われてきています。

先ほど言った Utility model というのも実際にビジネスモデルとして成り立っています。クラウドソーシングなどでは、翻訳会社が翻訳者を探すのではなく、Gengo ですか、Yasq、コニヤック、スピード翻訳という商用サービスが日本で存在しています。実際にそのサービスに何千といった翻訳者が登録していて、ユーザーがそこに書類をアップロードするだけで、すぐに誰かが訳してくれる。例えば、「英文250

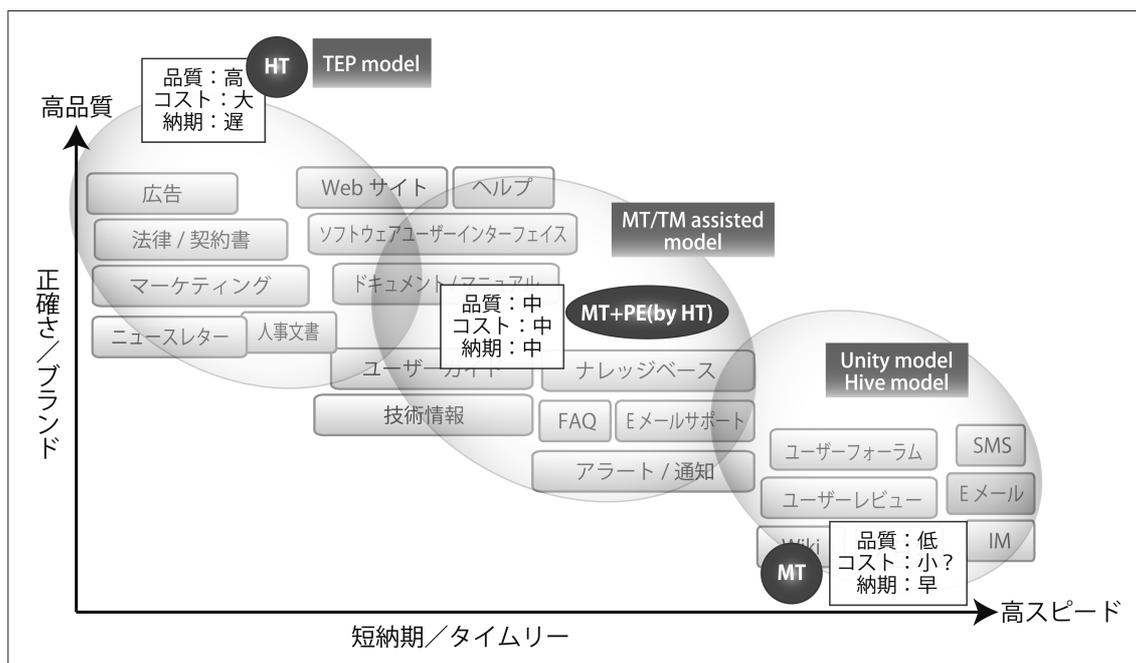
ワードであれば15分ぐらいで翻訳します」というような、そういったビジネスモデルも成り立っています。これが、Utility modelが産業翻訳として具現化されたものです。

その一方で、全くコストのかからないHive modelもあります。クラウドソーシングと似ていますが、翻訳コストが発生しないので、「ボランティア翻訳」という言い方をすることもあります。先ほどのFacebookの翻訳や「みんなの翻訳」も、コミュニティの人たちが自主的に翻訳をしていくという形です。あとは、ちょっと古いですが、Second Lifeや今のFacebookの中でも部分的に行われていると思いますが、バイリンガル話者が、Facebook上の友達の掲示板を読むのを助けてあげるとか、Facebook上やSecond Life上で、バーチャルの人たちを通訳者・翻訳者が助けてあげるといったボランティア翻訳、通訳のような現象も起きています。

(資料16) このような状況を踏まえて、では誰が何を翻訳するのかをまとめてみよ

うと思います。産業翻訳にはどのような分野があるのかを一覧してみましょう。例えば、左上は広告、契約書、マーケティングです。中央がユーザーガイドやナレッジベースなどで、右のほうにはEメールやブログなどのさまざまなテキストが存在するわけです。これらを、先ほど言ったさまざまなモードと照らし合わせて考えていきます。やや短絡的に言うのであれば、縦軸の左上は、高品質が求められるテキストタイプということも言えます。横軸は速度ですね。例えば広告ですとか契約書というのは、やはり高品質な翻訳、正確性などが要求される。また広告ですと会社のブランドイメージなどと密接に関係してくるので、そういう意味でも高品質の翻訳が求められ、したがって納期や速度よりも品質が重視されるようになる。当然、それにかかるコストは惜しまないということが言えるわけです。それに対して、社内のちょっとしたメールや伝言板のようなものであれば、社内の人に分かれば良い。メールを訳してくださいと依頼して、1カ月半かかりますと

資料16



言われても困るわけで、納期は早く、品質はある程度ならば低くてもいい、となります。この図では、概して、左上から右下にいくほど、だんだんと品質がさがり、逆に低コストとスピードが求められるように変化します。中央部分のテキストは、例えばマニュアルなどは、中間くらいの品質とコスト、スピード要求というように区分することができると思います。

では、このように区分されたテキストを、現状ではどのような翻訳者やモードで翻訳しているのかを考えてみます。ある程度品質の高いものは、HTつまり human translation、やはり人間の翻訳者がやるべきじゃないかという考えになっていると思います。それに対して右下のものは、先ほど言ったように、機械でいいのではないのかという考えも流布しています。中間のものは、機械翻訳プラスポストエディットでほとんど事が済むのではないか、というように分けることができます。

先ほどのモードに照らし合わせると、右下のテキストであれば、機械翻訳でなくてもボランティア翻訳やクラウドソーシング翻訳で事が足りてしまう。Utility model や Hive model でできてしまう。真ん中は相変わらず MT とポストエディットを行う。そして高品質が求められるものは、人間が翻訳をしてエディットして proofread をするという従来型の手法が取られるべきであろうというわけです。このように、テキストタイプに対して、どういうモードが使えるのかというのを、三つに分けて考えることができる、という一つの提案です。

ただこれは、あまりにも短絡的過ぎる分類の仕方、オハイガン先生からフィードバックをいただいているのですが、翻訳研究の中では、例えば人間が翻訳したものは、本当に機械翻訳とポストエディットしたものよりも品質がいいのか、といったような

実験や研究が行われているわけですね。実際はそうではないという結果も出ています。なぜかと言うと、人間がやると訳抜けがかなりあるというのが分かっている、下訳を機械翻訳にさせて post-edit したほうが、訳抜けが少なかったりするわけです。また、さっきの Facebook の話をすると、素人が翻訳しているのですから、品質は悪いに違いない、という事もよく言われます。ですが、それも実際に観察してみると、実はそこにはプロの翻訳者が参加していて、先ほどの掲示板のコミュニケーションで素人とプロが交わって、翻訳について、さまざまな議論を行っていることもある。そうするとプロの人が見直しているような状況も発生しているのです。また、高品質が求められる翻訳でも、クラウドソーシングで適切にマッチングが行われた翻訳者が翻訳を行えば、たとえ素人であっても、そのほうがむしろ高品質の翻訳ができることもあります。高いお金をかけたからといって必ずしもいい品質になるとは限らないので、このコストと納期の関係が必ずしも図の通りに成り立っているとは言えません。ただ、こういう方式と、こういう要求があるということ認識しておくことは大事ではないかと思ひ、このようにまとめてみました。

(資料17) ということで、改めてまとめますと、今起きているこの「革命」の背景

#### 資料17

### まとめ

Translators will still be needed, but their working conditions into the next decade will be quite dissimilar to those of the nineties.

- 翻訳需要の多様化
  - Shimhipの一般化(納期短縮)
  - Fitness for useの一般化(翻訳用途による質やコストの多様化)
- Technological literacy
  - 翻訳者→ポストエディター(ポストエディットのスキル)
  - プリエディットの知識(制限言語)
  - MTのカスタマイズ、DIVスキル(Doherty, Kenny, & Way, 2012)
- Translation Prusumption
  - 翻訳者自身が、翻訳のユーザになる
- Post-print translation literacy
  - 印刷文書とWeb文書では、文章の読まれ方が違う
  - Webでは、19~27秒で次ページへ移動(Clicktale, 2008)
  - 異なる翻訳規範

には、翻訳需要の多様化があると言うことができます。Shimhip と書きましたが、ローカリゼーションの時代から始まった多言語で早く同時にリリースしなければならないという要求が、ローカリゼーションの分野だけでなく一般的な分野にも広まってきている。それに応えるために、今説明したような翻訳の方式ができてきた。MT ができたことによって「このレベルの品質が、この速さでできるんだ」という、fit for use, fit for purpose という考え方がさらに一般化したわけです。今までも翻訳理論のスコプス理論ではそういう考え方を提唱してきたとは思いますが、機械翻訳の品質がある一定レベルに達したことによって、このような認識が一般の中でもかなり高まってきた。実務翻訳ではこうした様々なニーズに応えていかなければいけないということです。

あとは、技術的な変化によって、翻訳者にはポストエディターのスキルも要求され、場合によっては pre-edit などもしなければいけない。翻訳メモリーだけを使っていればよかった時代と違い、機械翻訳を自分でつくる、DIY、これはダブリンシティ大学の講義ではすでに行われているのですが、機械翻訳を自分で作るスキルも要求されてきています。それから、Translation Pro-

sumption といっていますが、今まで翻訳者はお客さまとは異なる立場にいたのですが、実際に Facebook を翻訳している人たちはユーザーであり翻訳者でもある。つまり翻訳のプロデューサーであり消費者であるという二つの役割を担っていると考えると、今まで翻訳者がやってきた「お客さまのために」という考え方だけでは、不十分なのです。それがクラウドソーシングの現象に関して言えると思います。

あとは、インターネットをベースにした文書を扱うことが多くなってきているので、それについての考え方も変えなければいけないのではないかと、とも言われます。Post-printing translation literacy と言われるように、今までは印刷された文書を読むことを前提に翻訳がされてきましたけれども、今は多くの文書がウェブ上に存在しています。ある調査によると、インターネットのユーザーは平均で1ページに19秒から27秒ぐらい費やすだけで次のページへ移動してしまう。そうすると、そこに書かれているテキストは従来の印刷物を読んでいるのとは違う読まれ方をしていることになり、そのような状況に合わせた翻訳をしなければならないかもしれません。したがって、今までとは、異なる翻訳規範が存在することも換言できるのです。

## ディスカッション

### 翻訳者を取りまく環境の現状と今後

**武田**：皆さん山田さんの発表をお聞きになりながら、「これはおかしい」とか、「もうちょっと説明してほしい」とか、「まさにその通り」とか思われることがあったのではないのでしょうか。ぜひ質問やコメントを質問票に書いていただきたいと思います。学生が回収に行きますので、どうぞ何でもご自由にお書きになってください。それでは、今の山田さんの発表に関してパネルのメンバーで、ディスカッションをしていきたいと思っています。

改めましてご紹介します。こちらから山田さん、影浦さん、ラッセルさん、井口さん、関根さんです。バイオはお配りしていますのでそちらのほうをご参照ください(pp. 81-82)。今日は翻訳者の方が多く参加していらっしゃると思うのですが、山田さんの発表には「聞きたくない情報」も結構あったかと思っています。でも今起こっている状況というのは、好むと好まざるを問わず押し寄せている波であって、その波を止めることはできないと私は認識しています。それでは、まず、翻訳者として第一線でご活躍の中、立教異文化コミュニケーション研究科では翻訳演習を担当していただいている井口さんからコメントをいただけますでしょうか。

**井口**：トップバッターとは大変なところを仰せつかってしまいましたね。

山田さんのお話、業界の中の動きとしては確かにその通りなのだろうなと思います。でもそれがいいことなのかという諸説あると思います。こういう話を聞くといつも思うのですが、変化が基本的に技術の主導

で進んでいるわけです。技術的にこういうことができるようになったからやっているという、それが経済的にプラスになる人たちがいて、どちらかというとお金を払う側の人たちにとってプラスだということで、どんどん変化が進んでいるというのが大きいと思うんです。現場で実際に翻訳をしている人間からすると、決して歓迎するような動きではない。翻訳の質に関していろいろ問題が出てくることが多いように思います。

また、そういう環境が仮に業界の中で主流になってしまうとどうなるのでしょうか。特に、新しく入ってきた人たちが、まずそういう環境で仕事をするようになるかと考えると、今日のテーマでもある翻訳の教育と関連してきますが、新人が学んで伸びていくパス、先ほどの山田さんの図の左上のところには上がれるパスが、なくなっていくのではないのでしょうか。翻訳の post-edit をいくらやっても翻訳ができるようにはなりません。全く違う作業ですから。翻訳というのは、原文と訳文との間を行ったり来たりしながらいろいろと身に付けていくものなので、ワンパスで済む話ではありません。ですから環境が違くと学ぶものや身に付くものが変わってきます。今、このあたりをやっている人はいますが、20年後、30年後、今いる人たちが引退していった後、誰かやれる人が育つのかということかなり心配な気がします。

**影浦**：井口さんへのフォローあるいはちゃちゃとして、私のような異業種の観点から、議論のために明確にしておかなくてはいいけ

ないと思う点について少しお話しします。まず、今、井口さんは「業界」と「入ってくる」という言葉を使われたわけですが、山田さんが紹介した翻訳革命期で翻訳対象となっているもの、それによって言語間の変換が可能である、あるいは変換するべきであると思われるようになった文書クラスの幾つかは、少なくともこれまでプロの翻訳者と呼ばれる方々がカバーしていたものではなかったと言うことができます。その意味では、ある種のすみ分けが一部にあったと思います。現在は、それがしだいに接点を持つかたちで姿を見せ始めたという状況だと思うんです。

ですから、いわゆるこれまでのプロの翻訳者、その世界に「入ってくる」というイメージとは少し違うところで、文書クラスの側から言うと、これまでカバーされていなかった文書が翻訳されている。新しい文書クラスを特徴づける一つの視点は、これまでは、確かに翻訳という行為自体は手段であったとしても、翻訳されたものはそれ自体が目的だと翻訳者の方々をはじめ多くの方が考えていたと思います。クライアントの側から言うと、翻訳されたものは、削減すべきコストではなくて付加価値だったと捉えられていたものが、今、多分、翻訳だけでなく産物も手段だ、翻訳という行為も手段だし、翻訳されたテキスト自体実はコミュニケーションが成立してしまえば捨ててよい、という感じになってきている面があるかと思います。

このような点も少し頭に置きながら考えないと、多分議論が錯綜してしまうのではないかというのが一点です。

もう一点は、山田さんのお話の中で基調となっているのは、いいか悪いかは別としてやはりテクノロジーの展開です。自然言語処理（NLP）業界の方は、本日、どのくらい来ているのでしょうか。私、アジア太

平洋機械翻訳協会（AAMT）など、技術系のところ何ヶ所かに、このシンポジウムの情報を流したのですが、言語処理業界の方はこういう会にほとんど来ないんです。

この状況は、少し不健全ではないかと思っています。私自身はNLP業界にも顔を出していて、言語処理も一応やっていて、一方、翻訳も一応…実は翻訳はそれなりに内緒でやっていてむしろたくさんそのほうが専門に近かったりするわけですが、いずれにせよ交流が少なすぎるという感じがあります。今、NLP業界と翻訳者との交流があまりない中で、どんどん技術のほうは進みながら、でもその技術のほうでは、翻訳者のニーズとか翻訳文書としてあり得るものの範囲に対する社会的なニーズが十分反映されないまま進められてしまうのは問題ではないかと思っています。

**関根：**今のお話で私もちょっと思うところがあって。私はエンジニアで、技術に関しては翻訳支援ツールの開発をやっていて、情報処理学会や言語処理学会にも出ているのですが、そういうところで発表される新しい技術というのは、「こんな素晴らしいものをつくったので皆さんどうぞ使ってください。ただしLinuxでしか動きません」というようなものが多いです。そうすると、WindowsやMacを使っている一般の人はほとんど使うことができないんですね。ですから、そういう新しい技術を開発する、情報処理や自然言語処理を専門にしている人も翻訳者に歩み寄って、相手の理解に合わせて説明したり、紹介したりすることも必要なんじゃないかなと思っています。

**武田：**取りあえず、お一人ずつコメントをいただきたいので、ラッセルさん、お願いします。

**ラッセル：**今のお話とはちょっとずれるんですが、先ほどの資料11（p. 14）に fit for use という表現があって非常に面白いなど

思いました。翻訳というのはやはり目的によって異なるというところが往々にしてあると思います。例えばあまり英語ができない人、あるいはイタリア語でもなんでもいいですが、外国語ができない人が海外のホテルの情報を知りたいというときには、Google 翻訳を使って、それでも満足できるわけです。それは、ここで言う fit for use の一つの形だと思うんですが、その一方で、高品質の翻訳が必要だというケースもたくさんあるわけです。

それから資料16 (p. 17) ですが、もちろん全てのケースは収められないと山田先生もおっしゃっていましたが、例えば、映像翻訳や出版翻訳などは、左上の品質が高いところに入ると思います。納期は、映像はかなり早いのでは、と思うんですが、コストについては、翻訳コストという意味でおっしゃっているのならば、両者とも低いです。そういった、いろいろなケースが存在しているということをお知らせしておきたいと思いました。

**武田：**ありがとうございます。今、幾つかポイントがあったと思うのですが、一つは、関根さん、影浦さん、井口さんがおっしゃったことにも関連すると思うのですが、日本は世界的に見ても機械翻訳の研究は非常に進んでいる。でも、実際に翻訳をしている人とか、(文系の) 翻訳研究をしている人との交流とか連関があまりないというのが実情だったと思います。これからそういう対話のようなものができればいいなと考えます。このシンポジウムがそのきっかけの一つになればと願っています。私が、今、聞いていて少し気になったというか、皆さんに問題を投げかけたいのですが、どなたかが、「正しく」っていうようなことをおっしゃった。じゃ、「正しい翻訳」って何ですかってことです。翻訳が求められる状況が多様化してきたという話を山田さ

んがしていましたけれど、fit for use で各目的に合わせた翻訳のやり方があるという考え方があります。必ずしも、唯一正しい翻訳というのがあるわけではないということです。それから、post-editing をしている人が高品質の翻訳ができるようになるパスには進まないというのはまさにそうで、これはまた別の分野、職種になるのではないかと考えます。それと、これを全部取り扱って、必ずしも翻訳はしていないけれども、翻訳という作業とか翻訳行為について理解していて、プロジェクトとしての翻訳を管理していける能力のある人、プロジェクト管理ができる人もまた別に必要なんじゃないかって、そういう人たちの養成も必要じゃないかと感じます。山田さん、今までのコメントに対して何かありますか。**山田：**そう考えたときに、今、実務者の方もいると思うんですが、翻訳を教えている方々もこの場にいると思うんです。私も今翻訳を教えています。学部、大学院、あるいは翻訳学校とでは違ってくると思うんです。それは午後の議題になると思いますが。どうなんだろうというようなことは常に思うところではあります。

**武田：**ここで会場から質問・コメントが来ています。翻訳者の方で、特にどのパネリストに対する質問という指定はないのですが、お読みしますと、「変化内容について何が出てきたという方向ではなく何があまり顧みられなくなっているか、何に集中できなくなっているのか」というか翻訳本体についてが議論として大事なのではないかと書いてあります。それからもう一つ、「使っている人が訳すというのは新しい状況ではない。翻訳の発生現場というものは、常にそうだったし、そうであり続ける。今、できているのは使わない人が発注するという現状で、そこが問題なのではないか」とおっしゃっています。じゃあ、井口さん、

お願いします。

**井口**：前半についてですが、さっき触れようかなと思いつつ、あまり一人で長くしゃべってもと思って途中で切ったんですが、結局、テクノロジー主導で変化が進んでいて、そこで置き去られているのは、翻訳するとき翻訳者が何を考えているのかという部分だと思うんです。最終的に何を考えているのかというと、こう書いてあるからこう訳すという言葉の変換を考えているわけでは基本的にはないはずですよ。書き手は何を考え、何を伝えようとしているのかを考え、そして自分が書いた訳文を読み手が読んだときに、その読み手は何を捉え、どういうふうに考え、どう行動するのかと、そういったことを考えてそのマッチングをうまく図っていくのが翻訳の基本的な作業だと思うんですよ。

ところが、テクノロジー主導で変化が進んでいて、テクノロジーが人間の心理を考えることはまだできてませんから、基本的に言葉の変換になってしまっているわけです。テクノロジーを基に、いかに早く言葉を変換するかという形になっているのが、この図の真ん中の部分が進みつつある方向性かなと思います。

fit for use でいろんなものがあるんだということですが、それはそれで事実です。昔からあります。別に新しい話ではなく、昔から、そこそこでというものから、これはしっかりやってもらわないと困るというものまであったわけです。では今まで、それをプロの世界ではどうしていたかというところ、そこそこでいいよという仕事は駆け出しの人たちがやっていたんです。まだ力が足りなくて、そこそこしかできない人たちがやっていた。いろいろと考えながら悪戦苦闘して作ってもそれほどいいものにはならないが、その人たちでもいい仕事があった。それをしている間に力がつけば、この

図の真ん中のところの仕事をしていた人たちが、左上のほうへ上がっていきけるパスがあった。

それが、なくなりつつあるのかなというのが今の状況です。テクノロジー主導で言語の変換を素早くやろうと。極端に言うと、MT の出力のまま渡せば一番早いんです。それではあまりにひどいから、最低限、人間が直す。この最低限が実は曲者で、「このくらいでいいじゃないか。分かるだろ」という話だと、基本レベルがどんどん落ちていくと思います。手間がかかるわけですね、書き直せば直すほど。

このあたりでいつも思い出すが、ミートホープ事件です。食肉偽装でずいぶん前に話題になりました。最終的には牛肉の入っていない牛肉が出来上がり、それが非常に問題になったんです。牛肉を1グラムも入れずに、いろんな肉を混ぜて牛肉として売った。ところが、味の文句は来てなかったというんです。言ってみればその fit for use は非常に当たっていたんですよ。安くするために牛肉を使わず牛肉の味を出した。ある意味、これ以上のことはない。皆、安くてうまいと満足して食べたけど牛肉はまったく入っていない。でも偽装牛肉ということで、問題になって会社は潰れてしまう。

翻訳の真ん中辺のところも、きちんとやりましょうとやってやっているうちはいいんですが、先へ進むと本来考えなければいけないところを忘れて、変換のみに終始することになり、どんどん品質が落ちていって、いつか、「何これ」というような話になるのではないかと懸念しているところです。

**影浦**：翻訳本体に関して井口さんが、左上に向かうパスとおっしゃいましたが、翻訳者を社会的な集団として捉えたとき、プロであっても全員が左上に行けていたのかと

いうと、そうではないのではないのでしょうか。

**井口**：全員が行けたわけでは当然ありません。一部です。

**影浦**：やはり、かなり一部なんですね。

**井口**：はい。

**影浦**：そうすると、逆に、今、問題として表面化していることの一つに、プロの翻訳者は実はどれぐらいのレベルだったかという点があるかと思います。ここにいらっしゃる方はレベルが高いと思いますが、そうした個々の翻訳者の実力ではなくて、社会的な集合として見たときに、どのようなレベルの人がどのくらいいるかという観点からの話です。

例えば、私のチームに翻訳に関する相談が持ち込まれることがあります。一例として、日弁連のとある文書の英訳を、プロであるはずの翻訳企業に出したら翻訳に大きな問題があったため、急遽対応を依頼されてほぼ全面的にやり直したり、あるいは、某大学の学科案内を英語にしたらむちゃくちゃだったため、その調整やアドバイスを翻訳会社相手にやったということがありました。これらの例で最初に翻訳にあたったのは、いずれもプロなんです。では、改めて翻訳のプロとは何だろうと考えると、その姿がすごく見えにくい。プロの中には当然、本当にプロでうまい人もいますが、全員がそうであるわけではない。

このような状況で、さらに、翻訳されたものは付加価値ではなく道具であるという文書クラスが翻訳対象として広がるならば、逆に発注者側からは翻訳について、プロでもそのくらいなら、ボランティアや、Crowdに出したり、MTでやってしまうのでいいじゃないかという雰囲気になることも一方ではあるのではないかと思います。少し挑発を含んでいる感じもありますが。

**井口**：痛い。

**武田**：挑発大歓迎。だからこのチームをつくりました。

**井口**：いや、痛いところを突きますね。現実問題としてそういう例はいっぱいあります。プロはピンキリです。まともな人も少なくないんですが、正直言ってこれで金をもらうのはどうかという人もいます。またそういう仕事がたくさんあるのも事実です。それが悪いというのは簡単なのですが、では、ひっくり返して考えると、そういう人たちもいないと、お金が発生するような翻訳の仕事全部こなせるだけの翻訳者がいないということでもあると思うんです。

また、最初のうち下手なのは当たり前で、草野球のレベルから練習して、だんだんうまくなった人がプロになる。プロになったからといってテレビに出られるわけではなく、二軍から入っていろいろと揉まれる。二軍の下手な選手だったら、もしかしたら草野球や、実業団チームのトップクラスのほうがうまいかもしれない。けれども、そこから練習していかないと上に行けないというのも事実だと思うんです。それでお金をもらっていいのかという問題はありませんが、それが現状としてはある。

そういう下手な人の翻訳に比べたら、MTを使うほうがいいというのは、そうかもしれない。また、熱心に何人もで検討しながら、ああでもない、こうでもない、とやっていく人たちのほうがいい結果が出るというのは恐らく間違いなと思います。「情熱のある素人は、情熱のないプロを必ず超える」と誰かが言ったように。ただ情熱のあるプロは情熱のある素人を必ず超えるんです。ですから、そういうプロを増やしていかなきゃいけないというのが、後半の教育の話になってくる。私はそういう方向性だと思っているのですが、現状はそういう人を増やせる道が細くなりつつあるという気がしています。

**影浦**：私自身は翻訳者の専門性、専門知識、翻訳、人間の翻訳者のプロとしてのレベルをすごく信じていて、かつ擁護しているの、井口さんと、そんなに視点は変わらない。ただ、そのような専門性をすくって業界としても産業としても新しい環境の中で改めて確立していくために、個々のプロ翻訳者を見るととても優れた人がたくさんいるという点と、でも実際に翻訳企業にお金を出して発注したときに十分満足のいく翻訳が得られないことが少なからずあるという社会的な側面の区別を踏まえ、後者をめぐる問題提起はやっておかななくてはならないと思います。

**武田**：質問が来ています。山田さんへの質問で翻訳会社の方からです。「英日の MT 訳が使いものにならないので、翻訳者は MT の訳を見ずに翻訳しているという状況があるので、あまり post-editing のスキルは必要ないように思うのですが、いかがでしょうか」と。

**山田**：(笑) そうです、そうです。だからもうそれは技術的な話になってしまうような。

**影浦**：世界でトップを走る英日の MT をつくってる NICT（情報通信研究機構）のグループリーダーの方が会場にいらしているので、ひとこと言っていただくというのはどうでしょう。

**武田**：ありがとうございます。

**隅田**：NICT の隅田と申します。今、過分なご紹介いただいたんですが、MT が使えないというのは、確かかなと。例えば…。

(会場：笑)

日英、英日の翻訳を Google にやらせると、むちゃくちゃになる。みんなはそれを見て、「こんなんじゃ使えない。捨ててしまえ」とかおっしゃっていると。あるいは、「MT が駄目だから安心していただける」と。こういうミーティングに来るとアンチ MT

の気分がまだ残ってると感じます。それは事実だと思いますが、技術は進歩しています。Google は駄目ですがここ数年、とても翻訳は良くなっている。このまま進歩したらどうしようという問題だと思うんです。例えば、一般の翻訳はうまくできないんですが、特許に限定したり、e コマースに限定したりすると、非常に高品質です。post-edit に十分耐えると思っていますし、性能も格段に上がっている。何年かたったら全部がかなりのレベルになるかもしれない。日英、英日はとても難しいですが、ご存知のように、日韓、韓日は非常にハイレベルですし、英語とフランス語、あるいは英語とイタリア語というのもハイレベルです。テクノロジーがある程度進歩して、これから先も進歩すると考えたときに、どのようにそれを使ってやろうかと考えていただくといいかなと思います。post-editor に乗せられると思うと敵対心が起これると思いますが、便利な道具として使ってやると考えていただければ可能性はあるのではないかなと。まだまだレベルは低いですが、ものすごい勢いで伸びていますので、ぜひ、MT に優しくしていただけるとありがたいと思います。以上です。

**武田**：午後にオヘイガンさんのコメントを紹介しようと思っていたのですが、彼女は「敵対心」ではなくて、「アレルギー」という言葉を使っているらしいです。「(一部の) 実務者が機械翻訳に対するアレルギーを持っている」ということです。また、それについては午後お話ししますけれども、山田さん、コメントをお願いします。

**山田**：扱えないという技術的な話になってきましたが、まず、さっき今の翻訳機がなぜ良いかという話をしました。なぜ良いと言われるようになったのか、それはデータベースをベースにしているからです。データベースというのはその分野の言葉遣いが

きっちりしているんです。だからそのドメインごとに分けることが重要です。

翻訳の質は、普通は、正確性、読みやすさ、スタイルの3つの側面で測られます。これを、「人間」の評価に例えると、「人の意見」を評価するときには何をもって判断するかといえば、その分野の言われ方をしているかということが一番、人の意識に上ってきます。例えばパーティーに行ったら、ネクタイをしてこない時点でアウトなんです。たとえその人がいいことを言っているにしても、服装がダメならば、アウト。また医療の専門会議に参加しているのであれば、発言するときには専門用語を使って話さなければならぬ。これと、同じように、言葉の社会性みたいなものを再現できる点ではSMTが一番優れている。だからSMTは質が良いという評価を受けるわけです。文法的に正しくても、その場に合った言い方（翻訳）ができない今までのルールベース機械翻訳との違いです。

ですから、まったく機械翻訳が使えないというのは、それをまったく違う分野に使用しようとしたんじゃないかと予測されるわけです。post-editをしようとするなら、まず、分野を分けなければなりません。

逆に言うと、人間の翻訳者は分野や場のようなものを一番意識しているために質が良いと言われるのですが、実はそれらに集中しすぎるがゆえに、単純な訳抜けなどが増えることがあります。その場その場に一番フィットした言い方に意識が囚われ過ぎて、例えば、訳し忘れや、数字の間違いなどを起こしてしまうことも研究などでも分かっている。だから、機械翻訳が全く使えないという評価は、人間の評価が正しく行われていない可能性もあります。

統計的機械翻訳の場合は文法解析が甘いので、否定文と肯定文の判断も確率で出している。否定文が肯定文として訳されてし

まうと、それは大間違いであり、だから人間はそれを「機械翻訳は使えない」と判断するかもしれない。でも本当は、機械翻訳の訳文も、それ以外のほとんどの部分は正しい訳出ができている可能性もあるんです。そういう見極めも大事だと思います。

**井口**：ちょっとよろしいですか。先ほどの言葉からいくと、私はMTに対するアンチなんですよ。使うべきではないという側の急先鋒です。

それはともかく、先ほど出ていたように分野を限定してそれなりの手をかければ、それなりのものが出てくる状況になっている、どんどん改良されているのは事実です。その通りだと思います。先ほど会場からお話があったように、とても高品質な訳が出てきます。post-editに耐えるものが出るんです。でも逆にいうとpost-editに耐える程度のものしか出ないんです。高品質になっていても。少なくとも現状ではそうです。これが10年後、50年後、100年後はどうなっているか分かりませんが、現状ではそのレベルです。

ツールとして使うことを考えてほしいというお話もありましたね。それはそれでありなのですが、翻訳者の立場で考えるとpost-editに耐える程度の文章を毎日読み、それを直していく、1日8時間、年間2000時間もそれをやるわけです。5年、10年たったときに、その人の言語感覚がまともなままでいられるのでしょうか。10年以上前からこういう方法で仕事をして他人にも導入を薦めている人がいまして、彼がしばらく前に自分のセミナーの案内文を書いていたのを読みました。「日本語について紹介します」というようなお話でしたが、この人に日本語を習いたくないと思う日本語になっていました。彼は、最終的には文芸系のものの創作を目標にしていると聞いているので、それなりの勉強をしているは

ずなんです。それでも、普段の仕事でそういったものをずっと読み続けた結果こうなったのではないのかなと。これは推測ですけどね。人間は毎日入ってくるものにどうしても引きずられるところがありますので、翻訳者が使うべきものでは基本的になんかと思いません。翻訳者になろうと考える人のメンタリティからいっても、多分 MT をツールとして使って楽しい人はいない。ですから、MT の post-edit で、仕事がある程度できるという状況が増えていくのは動かせないと思いますが、そこをやる人たちは、多分、プロの翻訳者になろうとして入ってくる人たちとは別系統から受け入れたほうが、post-edit をする人にとっても幸せなのかなと思っています。別の種類の人がやるべきではないかなと。

**武田**：多分、翻訳にかかわる仕事の中でいろいろなドメインが出てきて、井口さんのようなお仕事をやる人もいれば、post-editing を専門にする人も出てくるし、それを全体的に管理する人も必要だし、ということではないかと思いますが、影浦さん、何かありましたか。

**影浦**：そうすると、ほとんど言葉の定義をめぐる問題みたいになってしまいますが、井口さんがおっしゃった翻訳者というのは、私もその通りだと思うのですが、逆にいうと、そのような翻訳者ではカバーできない翻訳と称する領域が社会的にはたくさんあって、それはいずれにせよカバーされなくてはいけないというお話が一つ。もう一つはそれに関わって、それを少し斜め、あるいは縦にしてみるならば、翻訳本体と呼ばれていたものをめぐる議論として、そもそも多様な多言語コミュニケーションの中で、翻訳本体などというものをプラトニックに抽出することが可能で、かつそのクオリティというものを独立して議論することができる領域というのは、社会的にどこに

存在し、どこまであるのかということ、改めて定義し直さないとなかなか難しい問題かなという感じがしました。

**武田**：そうですね。午後の話にも通じるのですが、例えば、翻訳にかかわる仕事の中で、井口さんがおっしゃるいわゆる翻訳本体をする人、それから post-editing をする人、あるいは管理をする人っていうふうに見たときに、翻訳本体をする人、いわゆる高品質の翻訳をする人の収入が一番高いかということそうでもないと思います。これは私がモンレーにいたときに経験したことです。日本語の場合は翻訳そのものをしていて、例えば特許翻訳などをやっているレートが高いですから、十二分に生活していけますが、ほかの言語に限っていると、プロジェクト管理をやる人の収入が一番高いんですね、モンレーの卒業生では。そういうことも含めて午後考えていけたらと思います。

院生の方から質問が来ています。非常に面白い質問です。「山田先生、皆さまに対する質問です。山田先生のお話では、技術革新が革命を引き起こしているということだと思いますが、これは技術が進んだために英語力（翻訳力）の低い人が翻訳に関わるようになったと考えるべきでしょうか。それとも英語力が高い人が増えたため、特に翻訳経験がなくても技術の助けを借りて翻訳ができるようになった側面もあるのでしょうか。ボランティア翻訳は後者と関係があると思います。いかがでしょうか。」

**ラッセル**：「英語力が高い人が技術の助けを借りて翻訳ができるようになった」とは思いません。前者のほうがだと私は考えます。自分の経験や、学生の人たちの実験を通して思うのですが、英語力、ひいては翻訳力が高い人はおそらく、特に MT のような技術を使うと、先ほどのお話のように、かえって混乱してしまう傾向にあります。

MTで翻訳してそれを自分で post-edit すると、変な日本語に引きずられてしまう。それなら最初からやったほうがいいと考える人が多いと思います。また、前者のような、英語力や母語の能力が非常に低い人が商品として通用する翻訳ができるとは思えません。ただ、昔よりも恐らく、TM ツール、あるいはまだ使っている人はそんなにいないと思いますが MT などによって助けられている、それできっかけをつかめている人いるのは、翻訳会社の方々も実感していると思いますし、私の知り合いの翻訳者で、市場に入ったばかりの人についても、そういった形で門戸が広がっているという実感はあります。

**影浦**：昨日、You Tube で夜中まで GTO 2012 を見ているのですが、英語のサブタイトルが付いているんですが、その中で、「ジャーマン・スープレックスを決める」を省略して使われている「ジャーマンを決める」という言葉が全部、「German philosophy」になっているんです。

でも、ちゃんとおそらくはプロの翻訳者であろうクレジットが書いてあるということがあります。で、それでいいのだろうかというお話。技術の革新で、まず、その前にそもそもどういうコミュニケーションが多言語に変換されるのかというのがずいぶん違って来たという前提があって、その中で手段としてそれでいいのか、というのが一つ目。それから、これは最終産物ではなくて暫定的な変換だという意識で、みんな気軽にやるようになったというところがもう一つのポイントかなと思っています。

それから、ちょっと大きなポイントは、井口さんがおっしゃったのかな。翻訳は言語の変換ではない。これは人間にも言えることで、英語力が高いから英日の翻訳、日英の翻訳ができるわけではない。では、技術でどのぐらいカバーできるかというと、

多分、調査能力やまねする能力というのは、たくさん Google で翻訳していくとなんとなくこのストリングはこうだなといった推測として、テーマが好きな人であればあるほどうまく発揮できる可能性がある。逆にいうと、言語力ではない形で求められていた翻訳の技術が、非公式に断片的な形で使い回されるようなかたちで、多少すくわれている面があるかなという気はしなくはないです。

**井口**：それは、翻訳力が低い人が技術の助けを借りて、翻訳にかかわれるようになったということですよね。ある意味、現実問題に起きていることとしては、多分そのとおり、イエスなのでしょう。以前なら、プロの入り口に立っても実際にはなかなか仕事にならなかった人が、そういった形で仕事を得るケースが出ているという意味で、イエスなんだと思います。

ただ、翻訳力の低い人が技術の助けを借りて関われるようになったのはプラスの変化ですよ。ということは、つまりこのツールを使うとプラスになるイメージがあると思うんですが、必ずしもそうではない。山田さんが博士論文の発表のときに出されていたのですが、MT の post-edit をしたときに、スピードがどうなるのか。無しで翻訳をしたときのスピードと、MT の post-edit という形でやったときのスピードと、同じ人で両方のデータを取って比べていたのですが、元のスピードが遅い人は、速度が上がる。だからプラスになっているわけです。でも速い人は遅くなるんです。傾向として。大体、全体のスピードがそれなりに揃う。何もなしでやると、速い人から遅い人までものすごく差が出るのですが、post-edit という形でやるとスピードの差がぐっと縮まる。速い人は遅くなり、遅い人は速くなる。あまり力のない人にとってプラスになるからといって、力のある人に

とってもプラスかというとは必ずしもそうではない。

品質についても、私はデータを持っていないのであくまで推測ですが、恐らく同じことが言えるのではないかと。下手な人がやった場合には、多少良くなる傾向があるが、無しで非常に高い質のものが出せる人がやると、逆に下がる傾向がある。恐らくそういうことになるだろうなと思っています。スピードも、多分、そうなるだろうなと思ったらデータがあるということで山田さんに紹介していただきました。なかなか面白い結果なのですが、質についても同じような研究があれば面白いと思います。

**武田**：質問がどんどん来ていますので、申し訳ありませんが、先に進ませていただきます。「影浦先生、また、どなたでも」という質問ですが、「機械翻訳の研究に携わるとともに実務翻訳者でもある立場からテクノロジーの開発と利用者の距離が大き過ぎると感じます。AMTAではATAと年次大会を同時開催するなど、両者のコミュニケーションを図る試みが始まっています。日本国内では具体的に何をすべきでしょうか。」ご存知ない方のために付け加えますと、ATAはアメリカの翻訳者団体です。ですから、日本でいうとJATとか日本翻訳連盟のようなものですが、機械翻訳の団体と年次大会のスケジュールを調整して参加者が両方に出席できるようにしています。私も参加したことあるのですが、そのことをおっしゃっていますね。

**影浦**：言語処理学会で大会の運営委員をしたときに、日本翻訳連盟（JTF）の田中千鶴香さんをお呼びしてお話していただいたことがあります。言語処理学会は十数年、年次大会を開催していたのですが、実務の翻訳者の招待講演というのは、それが初めてだった。ものすごく好評でした。ですから、お互いに潜在的にとっても関心がある。

批判も含めて、ポジティブにいろいろ交流することを潜在的にどちらも求めているとは思いますが、そういう場をどんどん作ればいいと思うのですが、文科系、あるいは翻訳者を中心とした会議は何故か週末で、工学系の会議は平日です。私も週末は絶対働かないことにしているので、やっぱりいやかなとか。（会場：笑）そういうお話が一つ。

もう一つは、工学系で若い優秀な人たちが、制度化されたアカデミアの中で業績を上げないといけない。その業績は、技術的には非常に優れたものがたくさんあるのですが、それをアプリケーションの側と調整することに対して制度的なゲインがあまりにも少ないかなというのは、この場で何か解決できる話ではないのですが、一つ大きなネックになっていると感じています。ただニーズは本当にあるので、今この場で知り合った中で、対立やお互いの批判も含めて、率直にこれからどうするかという議論を、一步一步進めていくといいのではないかと考えています。

**武田**：継続的な対応が必要だということで、ありがとうございます。また、質問が来ていまして、「例えば、post-editingは、社内文書訳の場合、社内で有効か、必要か」ということ。「MTを導入することにより、今まで外注翻訳していたものを内部処理に移行できるか。その場合、どのようなMTツールがあるのか教えてください」ということなんです。

**山田**：非常に技術的な話になってしまうのですが、先ほど言ったようにドメインというか、その分野に限定してデータベースを蓄積することが非常に有効ですので、社内文書というのは、実は一番MTに向いています。今、MTはフリーで出ているものがありますので、それを活用して、社内翻訳のコストダウンを目指すことが可能かと

思います。

**武田**：これに関して午後に少し話をしようと思っていたのですが、例えば、私は以前、大学院のみで翻訳通訳を教えていたのですが、立教に来て学部の授業も担当することがあって、学部の学生に何を教えようかというようなことをずっと考えています。で、昨夜、山田さんと話をしていたのですが、一つのやり方として post-editing を教えても悪くないんじゃないか、と。というのは、その人たちをプロの翻訳者にすべく訓練するためではなくて、例えばいろんな企業に就職していきますよね。そのとき、営業なり何なりする中で、例えば社内文書を翻訳する必要があったときに MT を使えて、その post-editing ができるとか、あるいは、先ほど Do it yourself の話がありましたけれども、自炊で社内文書用の MT を構築していけるような能力があるっていうのは、一つの能力として、翻訳能力ではないんだけど、考えてもいいのではないかと思います。

**山田**：あまり狭まった話になってしまうのは、紹介しません。先ほどの質問とも幾つか関係してくるのですが、井口さんも言われているようにこの図で言うと、真ん中から上の人を、今までの機械翻訳や post-edit などの翻訳支援ツールが助けるというよりは、右下にあるようなものを真ん中まで引き上げる、高めるのを支援することが一番強いのかなと思います。ですから、今言われたように、学生や翻訳をやったことがない人を早くこの真ん中のレベルに到達させるため、そして、必ずしも翻訳者になりたいわけではないけれども、今、就職すればそういうことをやらないといけない状況がある。そういう人たちが一つの翻訳の手段として post-edit を知っておくのは決して悪いことではない。事実、そういう研究データもあって、遅い翻訳者ほどツール

を使えば速くなっていく。ただ、もう真ん中にいる人がそれ以上に速くなるかというと、そうならないのも分かっています。機械翻訳をやらせて感想を聞くと、「楽しい」と答えるのは圧倒的に学生で、プロの翻訳者は「つまらない」と。結果を見ても、ラーニング、つまり参照してそれをまねる吸収力が学生は高いので、実際に post-edit の訳から影響を受けるのも、学生のほうが高い。プロは、むしろ機械訳をまねないようにするので、その意味からも右下のものを真ん中に上げるような教育は、それはそれでいいのではないかと思います。プロの翻訳者の問題としては一時期、TM デイバインドという言葉があったように、「TM なんか使っているか」という人、積極的に受け入れた人とで二分されました。今は MT デイバインドが起きているとも換言できます。「機械翻訳なんか使っているか」という現象が起きています。でも、一つ言えるのは、例えば井口さんの良い訳だけを集めたデータベースで作った翻訳メモリーや機械翻訳を、学生に使わせれば、良い訳をまねしながら学んでいくラーニングの機能も果たすので、それはマイナスではないと考えています。

**武田**：そろそろ終わりの時間ですが、絶対これだけは聞いておきたい質問とかコメントとかある方いらっしゃいますか。これを聞いておかないとお昼ごはんに行けないという方。

**質問者**：全体的に、翻訳を生産する場面の議論が多かったと思いますが、実際に使う場面であるとか、例えば、そこで三つに分けてありますけれども、それをどこに振り分けるのかというユーザー側の場面なわけですよね。今の圧倒的混乱があって翻訳者が本当に怒っているのは、基本的に上であるべきものを下に持っていくからで、その部分の振り分け、評価の部分をどうするか

という議論が一番大事で、直近の問題だと思えます。例えば、post-editのことを学生さんに教えるよりは、いろいろ出てきたものをどう評価したらいいかという全体像を教えることが大切だと思うわけです。その評価の部分の議論をちょっと組み込んでいただければなと思いました。

**武田**：はい。十分に組み込んでいまして、午後にその話をします。要するに翻訳はいろんな目的のために行われるわけで、その目的を達成するためにどういう翻訳の仕方をしたらいいのか、それに適切なツールがあるかもしれないが、どれが適切なツールでどれが不適切なツールかということの評価できる、そして、適切なツールを活用できる能力を養成していくべきではないかというふうな話を午後にしようと思っていました。

**影浦**：今のはとても大切なポイントで、実はクライアント教育がすごく必要だと思います。先ほど例に出した日弁連のむちゃくちゃな翻訳というのも、翻訳ハウスだけの問題ではなくて、実は、クライアントとしての日弁連が、「とにかく発注すればいいや」という形で発注した感じがあります。でも、その文書の中には本来、国際条約の文章で、原文書があり日本政府の公式訳があるようなものが含まれており、そうした点については、クライアント側が、これを使ってください、こういうクオリティで納品してください、という requirement を翻訳ハウスに出すべきだった。ちょっと言いましたが、付加価値としての翻訳、産物そのものが目的で意味がある、価値がある翻訳というのがある。これはハイエンドで安全にやらなくてはならない、そういうものがあって、多言語に展開するというのは単に削減すべきコストではなく付加価値なんだという理解のもとでクライアントもきちんと発注する意識が必要でしょう。

そもそもコミュニケーションを多言語でやるのは、一般に付加価値ではありますが、それだけだととにかくコミュニケーションが成立すればよいということになる。それに対して、翻訳自体が、独立した産物としての付加価値だという領域はやはり確実にあるでしょう。そのことを抜きに技術の話をし過ぎると、井口さんが言っておられたような牛肉なしの牛肉になってしまう。それで誰もがハッピーではないかという社会は欲しくないと思います。

ですから、クライアントも含めて翻訳業界全体の中で、多分、山田さんの言ってるのはすみ分け論だと思うんです。実際にすみ分け論は必然です。これまでカバーされていなかった翻訳領域というのはあって、それは絶対に必要だけれども、安かろう、悪かろうでできる領域があるからといって、全てが安かろう悪かろうでできるわけではない。それにも関わらず、ないよりはあるほうがいいというものと、いいものでないと駄目というような、評価基準が違うものが混乱し過ぎている。クライアントがあまりにそのところを経費削減、経費削減でやり過ぎているということを、翻訳業界としてどのようにきちんとアピールしていくかというのは、社会的にとっても大切な問題だと思います。

**ラッセル**：先ほどの「ミートホープ事件」のたとえに関連してですが、先日の東北博のホームページが機械翻訳で英訳されて大変なことになったというのが新聞にも載りましたし、ネットのニュースにもなっていましたので、翻訳関係者以外にも広く知られることになり、ある意味、いいきっかけになったのではないかと思います。今、影浦先生がおっしゃったように、これは翻訳者一人一人もそうですけれども、やはり社会全体の問題であり、翻訳会社もそうですが、井口さんがいらっしゃる翻訳団体やほ

かの翻訳関連団体などが、社会に啓蒙活動、教育活動をしていくことが非常にこれから重要になっていくのではないかと思います。

**武田**：それでは、そろそろ時間になりましたので、午前中の議論を午後につなげるコメントをひとことずつお願いします。

**関根**：午後は翻訳者の育成の話になってくると思うのですが、テクノロジーをどういうふうに教えていくかということで、私も業界にいますので、そういうところを考えていかなきゃいけないなと思っています。これから研究も続けていくので、そういうことにも焦点を当てて考えていきたいなと思っています。

**井口**：最初からちょっと繰り返しになりますが、この真ん中辺にあるようなやり方をしていると、初めのころにぐっと引き上げてもらえるというのは確かなんでしょう。山田さんが言われるように、若い人ほどまねる力が強くてどんどん活用していく。それも多分、事実でしょう。つまり、初級者が割と早くに中級者になれる。

でも、中級者で終わるんです。中級者から上級者には上がらない、上がれない。それはなぜかという、まねる力が強くて、まねる対象がMT訳だから。これが、われわれの世界だと、勉強するときに、例えばとても上手な人の訳を原文、訳文対照で、場合によっては書き写しながら勉強していくとか、いろんなやり方があるわけですよ、とにかくいい文章をまねる。訳文のいい文章、またはその元々の対象言語で書かれた文書のいい文章をまねる。まねることで学んでいく。

そのまねる対象がMT訳なのは、中級まではいくかもしれませんが、そこで止まるのはもう当然です。そこから先の、上級のものをまねていないのですから。その辺りが、将来的にどう影響するのかということ、そうってしまったときに「こんな

はずじゃなかった」とMT訳をまねていた若い人が思わなければいいけどなど。その辺りが非常に気になって、午後につながるところでございます。

**ラッセル**：また先ほどのお話のつながりになるのですが、業界全体で啓蒙活動が続いていくということですね。午後のお話は教育、養成のお話ですので、私たち教育に関わっている者にできることは、一人一人の翻訳者をまず地道に教育して行って、翻訳者の意識を全体的に高める、それが翻訳業界全体の意識を高めることにつながるのではないかと思います。そういったお話になればと思います。

**影浦**：井口さんが午後話につなげると言ったところで、翻訳だけでなく大学院で研究者を養成するときの困難を思い起こしました。全員がトップレベルに行けるのか。そうでないときに、トップレベルに行けない人は早々とあきらめて、このぐらいでなんとか生き延びて行く道を探しましょうねというのが適切なのか、それが優しい態度なのか。そういう問題と重なって、切実で胸が痛い話ではあります。ただ、翻訳についてもこの部分は避けて通れないのではないのでしょうか。実際に、井口さんがおっしゃるところのイメージの中で、トップレベルを目指して本当に全員がトップレベルになれるのか。研究だと残念ながらそうではない。私は教え方が下手なのかもしれないけど、残念ながら少なくとも現在の社会環境ではそうじゃない。そういうことについてどう考えるかということも少し関係してくるかな、胸が痛いです。

**井口**：そうですね。

**影浦**：ただ、少なくとも芽を摘んではいけないですよ。

**井口**：そうですね。そのように一つの社会の現象として捉え、また大学レベルで何を教えていくべきか、考えていくか、その辺

が議論できればと思います。

**武田**：それは午後にやりますけども、実はたまたま昨日、ある映像翻訳制作ソフトの会社の方とお話する機会がありまして、立教にはファンサブの研究をしている学生が何人かいて私自身もとても興味があるので、「ファンサブの現象をどう思いますか」って聞いたんです。そしたら、「いやあ、あんな素人がやってるものは間違いばかりで、

ルールを知らないし」というようなことをおっしゃるんです。もう完全否定ですね。それで「(ファンサブを) ご覧になったことありますか」って言ったら「ない」っておっしゃるんですよ。だから、やはりこうしてせっかくいろんな分野の方が集まってらっしゃるので、固定観念を捨て、心を開いて対話をしていきたいと望んでおりますので、よろしくお願いします。

## 第2部 翻訳者コンピタンスと翻訳者養成

### 基調発言

### 「革命」期に求められる翻訳者コンピタンスと翻訳者養成

武田珂代子

午後は、まず私のほうから発言をさせていただきます。その後、ラッセルさん、影浦さんのほうから事例報告があります。その後、オヘイガンさんのコメントをご紹介します。オヘイガンさんのコメントは、一つ一つのスライドについてもいただいていますので、発表の中で随時ご紹介するとともに、最後にもまとめてご紹介したいと思います。それでは、早速始めさせていただきます。

午前中のディスカッションを踏まえて、それではこういう時代にあって新たに求められる翻訳コンピタンスがあるとすればそれは何なのか、また、そのコンピタンスを涵養するために何ができるのかということをお話ししていきたいと思えます。質問・コメントなどがありましたら質問票に記入していただき、手を挙げていただきますと、学生が回収にまいますので、よろしくお願ひします。(資料1)

最初に簡単な定義を述べます。この発表の中でいう「翻訳者」というのは、職業として翻訳に従事するプロの翻訳者です。「翻訳者養成」という話をするとき、もちろん翻訳者になるためにはいろんな径路があつて、例えば独習で試行錯誤を繰り返すとか、有名な先生に弟子入りして徒弟制度的に学んでいくというやり方もありますし、

#### 資料1

#### 翻訳「革命」期に求められる 翻訳者コンピタンスと翻訳者養成

立教大学大学院  
異文化コミュニケーション研究科  
武田珂代子

最近では、オンライン上のボランティア翻訳が偶発的な訓練の場になっているという考え方もありますが、本発表の中ではいわゆる体系的な訓練で、高等教育機関、民間の翻訳学校、社内組織内訓練などで行われているカリキュラムに基づく翻訳者養成を指しています。(資料2-3)

また、「コンピタンス」「コンピタンス」ってずっと言っていますが、じゃあコンピタンスって何なのかといいますと、「能力」と訳してもいいと思えますし、「スキルセット」とほとんど同じだと考えていいと思えます。翻訳者養成の議論が翻訳学の中で行われるときに、現在最も主流の考え方として、コンピタンスは何かをまず同定するというアプローチがあります。そのコンピタンスというときに translation

## 資料 2

### 本発表における「翻訳者」とは

- プロ翻訳者(職業としての翻訳)
- ボランティア翻訳者は本発表の対象外

## 資料 4

### 本発表における「コンピタンス」とは

コンピタンス(能力)≡スキルセット

- 翻訳者コンピタンス (translator competence)

翻訳コンピタンス (translation competence)

+

翻訳者として機能するために必要な他のコンピタンス  
(コミュニケーション能力、ツール活用能力、  
文書修正管理能力など)

## 資料 3

### 本発表における「翻訳者養成」とは

- カリキュラムに基づく体系的訓練  
高等教育機関、民間の翻訳学校、社内・組織内訓練
- 独習で試行錯誤
- 「徒弟制度」(弟子入り)
- 偶発的訓練の場(ボランティア翻訳)(O'Hagan 2008)
- “Deschooling”(Cronin 2005)
- 「翻訳道場」(トランススマート)

## 資料 5

### 翻訳者養成： コンピタンスベースのアプローチ

- 求められる翻訳者コンピタンスを同定し、その涵養・達成を目標とする。(プロセスや方法は各プログラムによる。)
- 現場で新人翻訳者に不足しているコンピタンスを同定し、その涵養・達成を目標とする。(<'negative' approach> (Pym 2012b))

competence と translator competence を分けています。つまり訳出をする能力、午前中の議論であった「翻訳本体」とかいう訳出のスキルが translation competence で、翻訳者として機能するためには translation competence だけでなく、コミュニケーション能力、ツール活用能力とか文章修正・管理能力なども必要で、そうしたものを含めたものを translator competence と言っています。先ほども言いましたように、翻訳者養成の研究の中で、今一番主流のアプローチは、まず望まれる翻訳者コンピタンスは何なのかを同定して、そのコンピタンスを涵養する、あるいは達成するためにはどういうやり方があるのかというアプローチだと考えます。(資料 4-5)

そのプロセスとか方法は各プログラムに

よるのですが、例えば欧州委員会の翻訳総局がヨーロッパにおける翻訳修士号のプログラムにおいて、このようなカリキュラムを作るべきというガイドラインを出して、その European Master's in Translation (EMT) の専門家グループはこのスライド(資料 6)にあるような翻訳者コンピタンスリストを出しています。オヘイガンさんから「コンピタンスのリストはほかのグループや研究者も提案している」というコメントをいただいています。その代表的なものは参考文献の資料の中に入れておきましたので、ご興味があればご覧になっていただきたいと思います。

これが、今日の議案、皆さんに対する問題提起というか、こういうコンピタンスが望まれるのではないかとというリストです。まず、最初の山田さんのお話に出た翻訳者

## 例: EMT (2009)

- EMT (European Master's in Translation) 専門家グループによる翻訳者コンピタンスのリスト
- 翻訳サービス提供能力
- 言語能力
- 異文化間能力
- データマイニング能力
- 特定分野調査能力
- 技術的(ツール活用)能力

分布図のようなもので皆さんから見て左上にある部分。Human translation、つまり、機械翻訳とか翻訳メモリーだけではなかなかうまく対応できない部分、そこで人による translation がやる部分の専門性を高めていくというのが一つあるのではないかと。それから、TM/MT など翻訳支援ツールを評価して、自分がやる翻訳でこれは適切なツールである、これは不適切であるというようなことを見極める能力。そして見極めたのちにそれを活用していく能力というのが求められるのではないかとということです。オハイガンさんなどは DIY、Do it yourself ということをおっしゃっていて、これは、自らのドメイン分野に合わせたコーパスを利用して、自分でツールをつくっていくということも一つの能力として求められていくのかもしれないということです。それから、テキストの修正・編集能力。これは既存の翻訳を編集するとか、機械翻訳の pre-editing、post-editing などの能力というのがあると思います。それからこれは「革命期」であろうとなかろうと必要なことだと思いますけれども、メタ認知能力。翻訳者が、翻訳している自分を見つめて分析する能力。つまり、今、特に翻訳環境が激変していますので、自分が翻訳をしていく上で置かれたコンテキスト、状況を認識、評価分析して、自分がやっている

作業、自分がやっている翻訳というものを振り返る能力。新しいツールのようなものが出てきたときに、それが自分にとって必要かどうかを見極め自律的に学習していける能力が必要かと思います。あとはクラウドソーシングの問題で、これはオハイガンさんからの提案ですが、クラウドソーシングが出てきたことで、ノンプロ、セミプロの翻訳者の無料の翻訳が普及すると、それが職業としての翻訳にどういう影響を与えるのかということ、倫理的な問題も考える必要があるのではないかと、そういうことを考えられる能力が必要ではないかと考えています。(資料 7)

## 資料 7

## 「革命」期の翻訳者コンピタンス(議案)

- HTでの専門性
- TM/MTなど翻訳支援ツールの評価・活用能力('DIY'?)
- テキスト修正・編集能力(pre-editing, post-editing, revising)
- メタ認知能力(翻訳環境の認識、自己評価(振り返り)能力、自律的学習能力)
- 倫理的対応能力(クラウドソーシングの問題など)

このスライドは、アンソニー・ピムという翻訳研究者が、特に TM/MT 時代の翻訳スキルということで提案している内容ですが、この TM/MT データの評価能力のところ、Learn to trust and mistrust data. とありますが、これに関してオハイガンさんは「ツールの提供するデータの有効利用を行うとともに何でも鵜呑みにしないこと。その判断ができるためには高度な技術的知識が必要ではないか」とおっしゃっています。(資料 8)

こうしたコンピタンス要件がある中で、それに対応するコースがいろいろな学校で提供されてまして、例えば、アメリカにあ

## 資料 8

### TM/MT時代の翻訳スキル (Pym 2012b)

- 高速学習、ツール評価能力など (Learn to learn)
- TM/MTデータの評価能力 (Learn to trust and mistrust data)
- テキスト修正能力 (Learn to revise translations as texts)

るケント州立大学。ここは日本語も対象言語としていますが、翻訳実習、翻訳理論のクラスのほかに、例えば文書編集・管理能力を養うクラスですとか、プロジェクト管理のコースもありますし、オヘイガンさんがいますダブリンシティ大学では、やはり翻訳テクノロジー、翻訳のためのコーパス言語学、その他、プログラミングまで教えています。モンレーでどういうことをやっているかについては、後ほどラッセルさんの発表で詳しく見ていきます。また、教室内クラスだけではなく、いろんなデリバリーの方法があって、オンラインの講座とか短期講習とかワークショップなどもあると思います。(資料9-13)

私たちが研究会を何回か重ねていく中で、実は、私自身が全く予想していなかった結論に達しました。これは今の段階での結論

## 資料 9

### 例: ケント州立大 (MA in Translation)

翻訳実習、翻訳理論のクラスの他に

- Documents in multilingual contexts
- Localization
- Professional editing for translators
- Translation and computer applications
- Language project management

## 資料10

### 例: ダブリンシティ大 (MA in TS\*)

翻訳実習、翻訳理論のクラスの他に

- Translation technology (core)
- Computerised terminology (core)
- Translation as a profession (core)
- Localisation (optional)
- Corpus linguistics for translators (optional)
- Audiovisual translation (optional)

\* Programme part of the EMT network

## 資料11

### 例: ダブリンシティ大 (MSc in Trans Tech)

翻訳実習、翻訳理論のクラスの他に

- Translation technology (core)
- Computerised terminology (core)
- Localisation (core)
- Corpus linguistics for translators (core)
- Audiovisual translation (core)
- Object-oriented programming (core)
- Translation as a profession (optional)

## 資料12

### 例: MIIS (MA in T, T&I, and TLM)

- ラッセルの発表を参照

です。私たちはこのメンバーでいろんなコンピタンスの話はずっと議論してきました。それを涵養するためには何をしたらいいかというような話をしていたのですが、ふと考えたのは、その前に日本においては、例えば大学院レベルの翻訳プログラムというのがまだ確立していないじゃないかという

## 資料13

### 多様なデリバリー方法

- 教室内
- オンライン講座
- 短期講習
- ワークショップ
- Webinar
- MOOC
- インターンシップ

ことです。それで、まずは大学院レベルでの翻訳プログラムの拡充というか、体系的な翻訳者養成の基盤をつくるというのが、まず先じゃないかという暫定的な結論に達しました。これについては皆さんいろいろご意見がおありだと思いますので、のちほど、聞かせていただきたいと思います。(資料14)

## 資料14

### 日本での対応(議案)

- 個別コンピタンス涵養の議論の前に、大学院レベルの翻訳プログラムの拡充が必要？
- 体系的な翻訳者養成の基盤づくり
- 翻訳環境の変化を意識したカリキュラム

その中で、やはり、今、翻訳環境に急激な変化が起きていますから、そうしたことを意識したカリキュラムづくりが求められるのではないかと思います。翻訳者になるためには皆が皆大学院に行かなきゃならないと言っているわけではありません。ただ、大学院で翻訳者を養成するといろんな利点があると思います。まず、1年とか2年に渡るプログラムですから、カリキュラムが

あって体系的に訓練をしていろんな分野を網羅してテクノロジーも教えるし、職務倫理も教えるし、インターンシップも含めたようなカリキュラムができる可能性があります。(資料15)

## 資料15

### 大学院翻訳プログラムの利点

- 1-2年のカリキュラムに基づく体系的訓練(インターンシップ含む)
- 「世界標準」の枠組みで国際的情報交換、協力関係(欧州:200+校、中国:150+、英国:15+、米国:10+、韓国:10+、台湾:6、豪州:5+など)
- 国際機関、グローバル企業の求職に対応
- 「専門職としての翻訳」の認知
- 研究と実務の相互作用
- ボランティア活動への参加

それから、日本ではあまり知られてないかもしれませんが、諸外国、諸外国という言葉が適切かどうか分かりませんが、例えばヨーロッパ、あるいは中国、台湾、韓国などもそうですが、翻訳者を大学院で養成するという仕組みが普及しているわけですね。ヨーロッパでは200校以上、中国では150校以上の大学が翻訳修士プログラムを有するという状況があります。世界標準と言ってもいいと思いますが、その世界標準の枠の中に入るとそうした大学院と情報交換をしたり、協力関係が結べていけるのではないかと、そういう利点もあると思います。それと、これもあまり日本では知られてないかもしれませんが、国連などの国際機関とか一部のグローバル企業においては、翻訳者は大学院で養成するという考え方が深く認知されているわけですね。そうしたところは、やはりリクルートには大学院に来ます。私が前勤めていたモントレールも、もう毎年のようにどんどんそういうリクルートがあるわけですよ。私は1年半前に日本に戻ってきたのですが、アメリカ時代

のコンタクトがまだありますので連絡がきます。学生、卒業生を紹介してください。国連の機関とかグローバル企業とかのインハウスの翻訳者・通訳者を探していらっしゃるのですが、やっぱり紹介できにくい状況があります。そういう方がいないです、日本には。というのは、そうした仕事はビザが必要になるケースが多く、やはり専門職のビザですから翻訳通訳に関係する修士号を最低持っていないとそういうところではやはりリクルートされないという状況があります。

また大学院で翻訳を教えることによって、専門職としての翻訳という社会的認知の向上につながると思います。さらに、大学は研究機関でもありますから、翻訳に関する研究と実務との間の相互作用も生まれてくる可能性があると思います。最後に、影浦さんが後でお話しになりますが、プロの翻訳者がやってくれない、でも大事な翻訳の仕事っていうのがありますよね。そうしたものを先生の指導のもと学生がグループでプロジェクトとして取り組んでいくことが可能だと思います、大学院では。

ということで、課題ですが、翻訳大学院のようなものを仮につくるとして、やはり、新たに出てきた翻訳者コンピタンスの要件にどう対応していくかっていうのも大事ですし、そうした専門知識を持っている人が大学院で教えることができるかということ、そういう指導者が不足しているのではないかとも思います。専門知識をお持ちでも、教え方を知らないとか、教える場へのアクセスがないという問題があるのではないかと思います。(資料16)

その中で幾つか、まだ少しずつですけど取り組みが進んでいます。のちほど影浦さんの発表の中で、「みんなの翻訳」という影浦さんのグループが開発した翻訳ポータル、オンライン上のボランティア翻訳の

#### 資料16

### 課題

- 「革命」期に求められる新たな翻訳者コンピタンスへの対応
- 人的リソース(専門知識を持つ指導者の不足)
- 指導者の養成 ('Train the Trainer')

ポータルがあるのですが、そうしたものを利用した神戸女学院大学院の例とかもあります。私の所属する立教では、例えば、市場と密接につながった現役の翻訳者である井口さんが翻訳演習科目を担当するとか、あるいは2013年度からですが、翻訳テクノロジーのクラス、翻訳教育方法論に関する科目を提供します。ちなみに、翻訳テクノロジーはオハイガンさんがダブリンからいらっちゃって短期集中講座をやることになっています。(資料17)

#### 資料17

### 取り組み事例

- 「みんなの翻訳」の利用(神戸女学院など)  
→影浦の発表を参照
- 立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科
  - 市場と密接につながった現役翻訳者が担当する翻訳演習科目
  - 2013年度より翻訳テクノロジー、翻訳教育方法論に関する科目を提供

最後ですが、今後の取り組みとしてこれも皆さんに問題提起というか投げかけたい、これはどうでしょうかというご提案なのですが、午前中から出ていることで、やはり翻訳者、翻訳事業者、ツール開発者、研究者、教育者の間でこのような場を持って

いく、つまり継続的な対話をしていくというのがとても重要だと思います。翻訳者に使ってもらえないツールを開発してもしようがないし、翻訳の現場で実際に起こっていることとかけ離れたような研究や教育をしてもしょうがない。また翻訳研究の中には実証データで翻訳実務者に対してとても有益な情報を提供できるものもあるわけです。ですからそうしたいろいろな人たちが対話を続けていくことが重要だと思います。  
(資料18)

#### 資料18

### 今後の取り組み(議案)

- 翻訳者、翻訳事業者、ツール開発者、研究者、教育者間の継続的な対話が必要
- 大学院レベルの翻訳プログラムにおける人的リソース問題の解決法を検討
  - 大学コンソーシアム
  - 翻訳者団体との協力関係
  - 海外の大学院との提携
  - オンライン上「偶発的学習の場」の利用など

それから大学院レベルでの翻訳プログラム、なかなか立ち上げるのは難しいかもしれませんが、解決法を検討する中で幾つか可能性があると思います。一つは、大学が幾つか集まってコンソーシアム的にやるとか、JAT や日本翻訳連盟のような翻

訳者団体から協力を仰ぐとか、あるいは海外の大学院、モンレーとかダブリンとかケントなどと連携していく、あるいは影浦さんがやっているようなオンライン上のポータルなどを利用して学習を進めていくということも可能だと思います。

以上が私の発表ですが、オヘイガンさんからのコメントが幾つかありまして、一つご紹介しておきますと、「翻訳者養成は翻訳学研究ではよく取り上げられていますが、日本を文脈としてのものはまだまだ少ない。しかも昨今のテクノロジー環境を反映した研究はまだ発表されていないようである」とのことです。これは午前中も出てきたことですが、「日本では機械翻訳など自然言語処理に関する研究が古くから行われ、進んでいるにも関わらず、最近に至るまで翻訳者教育との接点がなかった。翻訳者ならびに指導者養成の点から今後は分野間、理工系、文系の融合が一層必要とされる」ということです。オヘイガンさんには、「大学院のプログラムを作るとしたらどんなカリキュラムが必要か」という質問に対するコメントもいただいています。それは事例報告の後にご紹介したいと思いますので、引き続きラッセルさんのほうからモンレー国際大学大学院での実践例について報告してもらいます。

## 事例報告

# モントレール国際大学大学院翻訳課程

## ラッセル秀子

それでは、MIISの翻訳教育について簡単にですが、ご説明したいと思います。午前中もお話がありましたように、「革命期」だからこそ新しい幅広いニーズに対応できるコンピタンスを備えた本物のプロの翻訳者を育てることが、とりわけ強く求められるのではないかと考えています。当校では、市場に実務家としていいポジションに入っていける、その土台づくりをすることを教育目的としています。(資料1)

### 資料1



では、まずMIISの概要についてご説明します。MIIS、モントレール国際大学大学院は、1955年、米国カリフォルニア州モントレールで創設された専門職大学院です。国際政治学などの学科もありますが、ここでは通訳翻訳科についてお話しいたします。このプログラムは2年間の修士課程で、1年次は翻訳、通訳の基礎訓練を行い、2年次は翻訳、翻訳通訳、翻訳・ローカリゼーション管理、会議通訳の4つの専攻コース

に分かれています。1985年に設立された日本語科のほか、ご覧のような各言語学科があります。教授陣は実務家が大半で、雇用市場に即した実践的な訓練が行われています。(資料2)

### 資料2



MIISの翻訳教育の特徴については、このスライドをざっと見ていただければと思いますが、ここで特にご紹介したいのは最後の2点です。当校には就職課がありまして、夏休みと冬休みのインターンシップが就職課を通して紹介されます。日米、それからヨーロッパなどの国際機関や企業などで、通訳翻訳のインターンシップが経験できます。就職も同じように就職課が支援しています。就職率はほぼ100%です。(資料3)

次に、過去10年ほどの就職、インターンシップ先の例を挙げました。職務内容は翻訳だけではなく、通訳や翻訳・通訳両方、あるいはプロジェクトマネージャーも入っ

### 資料3

## MIIS翻訳教育の特徴

<ul style="list-style-type: none"><li>● 少人数制(1クラス定員12名)</li><li>● 英語・日本語ネイティブの学生</li><li>● 英語環境</li><li>● 全言語共通の講義もあり</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>● 翻訳通訳理論など「学問」としてのアプローチ</li><li>● 国際政策、ビジネス、教育言語学の講義を受講可能</li><li>● インターンシップ</li><li>● 就職支援</li></ul>
---	---

ています。先ほどのお話にもありましたように、いずれも大学院で翻訳・通訳を勉強したことを条件にしているところがほとんどです。今日も卒業生の方が何人かいらっしゃっていますが、こういった国際機関や企業などに翻訳者として入り、安定したキャリアを積んでいる卒業生が少なくありません。その後、フリーになった場合は、とりあえずある程度、専門分野もキャリアも出来ているわけですから、スムーズにフリーランスに移行できるケースが多いです。例えば、元の勤め先からフリーランスとして直接受注を続けている人もいます。国連機関である世界知的所有権機構(WIPO)の場合、インターンシップをした後、実力が認められてフリーランスとしてそのまま WIPO の仕事を引き受けている卒業生も多いです。(資料4)

### 資料4

## 就職・インターンシップ先の例

<ul style="list-style-type: none"><li>大塚製薬</li><li>世界知的所有権機構(WIPO)</li><li>米国務省</li><li>ザイリンクス</li><li>大和総研</li><li>ナショナルインスツルメンツ</li><li>ニコソ</li><li>野村證券</li><li>ブルームバーグ</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>ホンダ</li><li>マイクロソフト</li><li>ライオンブリッジ</li><li>DeNA</li><li>SMBC日興証券</li><li>スタンフォード大学病院</li><li>その他翻訳・通訳エージェンシーなど</li></ul>
--	--

次に、カリキュラムについてご説明します。ここに書いたものは必修科目と、履修が推奨されている科目のみで、このほかにも選択科目を何単位か各学期取らなければいけません。それから A は母語、B は外国語という意味で、SEMESTER 1、SEMESTER 2 が1年目で、SEMESTER 3 と SEMESTER 4 が2年目になります。どの専攻でも、1年目つまり2学期目の終わりと、2年目の終わりに、それぞれ進級試験と卒業試験があります。(資料5)

### 資料5

## 翻訳課程 (MAT)

<b>SEMESTER 1</b>
Introduction to Translation Written/Sight B-A Introduction to Translation Written/Sight A-B Introduction to Interpretation B-A Introduction to Interpretation A-B Introduction to Computer Assisted Translation (CAT)
<b>SEMESTER 2</b>
Intermediate Translation Written/Sight B-A Intermediate Translation Written/Sight A-B Advanced CAT

まず、翻訳課程ですが、最初の二つは翻訳とサイト・トランスレーションのクラスです。母語が日本語の場合は、A to B (日英) と B to A (英日) がありますから、計4コマになります。次の二つのクラスは通訳のクラスで、翻訳課程の場合、必修ではなく、履修が推奨されている科目です。翻訳専攻でも通訳を取ることを勧めているのは、希望者は卒業後に通訳もやれるように、通訳の基本を学ぶという目的もあります。それから次の CAT のクラス (「Introduction to Computer Assisted Translation」) と、2学期目の CAT のクラスは、ご覧になって分かるように、翻訳支援ツール、主に翻訳メモリーツールについて学ぶ授業で、全言語共通で行っています。

(資料6) それから3学期目の最初の二

## 資料 6

翻訳課程 (MAT)	
<b>SEMESTER 3</b>	
Overview of Translation and Interpretation Studies	
Contemporary Research on Translation	
Advanced Translation I B-A	
Advanced Translation I A-B	
Translation Practicum	
Directed Study: Thesis Option (optional)	
<b>SEMESTER 4</b>	
Translation and Interpretation as a Profession	
Advanced Translation II B-A	
Advanced Translation II A-B	
Translation Practicum	
Directed Study: Thesis Option (optional)	

つのクラスは理論や研究について学ぶ授業です。1年目の翻訳通訳の経験に基づいて、小論文を書かせたり、そのほかさまざまなペーパーなどを読んでディスカッションを行ったり、リサーチメソッドについても教えています。これも全言語共通の授業です。その後の二つは、翻訳の授業です。それからこの「Translation Practicum」という授業は、長い翻訳をやってほかの人にフィードバックをしてもらって、ポートフォリオ的なものをつくります。4学期目になりますと、最初の「Translation & Interpretation as a Profession」というのは、全言語共通のクラスで、市場で直面する課題や現象などについてカバーします。全言語共通ですので、各言語市場の様子も分かります。次の二つは翻訳のクラスですね。それから先ほどの「Practicum」のクラスがあります。次の授業、「Thesis Option」というオプションのクラスにつきましては、(資料7)このスライドと、お手元の資料にも詳しく書いた論文のリンクがありますので、よろしければご参照ください。翻訳者のコンピタンス養成に優れた方法だと考えています。

(資料8) 次の翻訳通訳課程は、翻訳課程と大体似ているのですが、2学期目に同時通訳のクラスが推奨科目として入るということと、(資料9) 2年目からこのよう

## 資料 7

修士論文としての翻訳 (Thesis Option)	
● 希望者のみが履修する選択科目 (2012年現在)	
● 修士論文の種類	
1. 翻訳通訳研究分野の研究プロジェクト (20,000語以上)	
2. 既訳のない長いテキストの翻訳 (20,000語以上)。コメントリーを伴うこと (2,000語以上)	
3. 既訳のあるテキストの翻訳 (約15,000語)。再翻訳が必要な理由を論じたコメントリーを伴うこと (5,000語以上)	
4. 既訳の批評・分析 (20,000語以上)	
5. コメントリー、参考文献、索引を伴う用語集論文	

## 資料 8

翻訳通訳課程 (MATI)	
<b>SEMESTER 1</b>	
Introduction to Translation Written/Sight B-A	
Introduction to Translation Written/Sight B-A	
Introduction to Interpretation B-A	
Introduction to Interpretation A-B	
Introduction to Computer-Assisted Translation (CAT) (recommended)	
<b>SEMESTER 2</b>	
Intermediate Translation Written/Sight B-A	
Intermediate Translation Written/Sight A-B	
Intermediate Interpretation Consecutive B-A	
Intermediate Interpretation Consecutive A-B	
Intermediate Interpretation Simultaneous B-A (recommended)	
Advanced CAT (recommended)	

## 資料 9

翻訳通訳課程 (MATI)	
<b>SEMESTER 3</b>	
Overview of Translation and Interpretation Studies	
Contemporary Research on Translation OR Contemporary Research on Interpretation	
Advanced Translation I	
Advanced Interpretation I - Consecutive B-A	
Advanced Interpretation I - Consecutive A-B	
Advanced Interpretation Simultaneous B-A (recommended)	
<b>SEMESTER 4</b>	
Translation and Interpretation as a Profession	
Advanced Translation II	
Advanced Interpretation II - Consecutive B-A	
Advanced Interpretation II - Consecutive A-B	
Advanced Interpretation II Simultaneous B-A (recommended)	

に通訳の授業も取るというところなどが違ってきます。なお、今回は詳しく触れませんが、先ほどもご紹介したように、ほかにも会議通訳の専攻課程があります。

(資料10) 次の翻訳・ローカリゼーション管理課程は、市場の新しい動きに対応して2004年に新設されました。この課程の授

## 資料10

翻訳・ローカリゼーション管理課程 (MATLM)	
<b>SEMESTER 1</b>	Introduction to Translation Written/Sight B-A Introduction to Translation Written/Sight A-B Introduction to CAT Survey of Accounting Introduction to Localization Project Management
<b>SEMESTER 2</b>	Intermediate Translation Written/Sight B-A Intermediate Translation Written/Sight A-B Advanced CAT Marketing Management (for non-MBA)

業は、翻訳や通訳専攻の学生ももちろん選択科目として取れますし、実際そうしている人も多いです。最初の二つのクラスは、やはり翻訳とサイト・トランスレーションのクラスですが、この専攻の場合、A言語方向のみ、つまり母語方向のみが必修になっています。それからCATのクラスがありまして、それから「Accounting（会計学）」のクラスがあります。それから、「Introduction to Localization Project Management」という授業は、プロジェクト管理についてカバーする授業です。例えば、各社のプロジェクトマネージャーの給料を比較したり、オンラインプレゼンスの大切さについて検討したり、プロジェクト管理用のソフトの紹介や演習をしたり、あるいは、翻訳者についても社内翻訳者とフリーランス翻訳者の違い、そのメリットとデメリットといった実務的な面を学びます。2学期目は引き続き、翻訳とサイト・トランスレーションのクラスや、MBA専攻以外の学生を対象にしたマーケティングの授業があります。（資料11）3学期目は、先ほどご紹介した理論のクラスがあり、引き続き翻訳のクラスが母語方向のみあります。それから、「Localization as a Profession」という授業は、プロジェクトマネージャーの視点からローカリゼーション管理の問題についてカバーします。モントレールは、西

## 資料11

翻訳・ローカリゼーション管理課程 (MATLM)	
<b>SEMESTER 3</b>	Overview of Translation and Interpretation Studies Contemporary Research on Translation Advanced Translation I B-A Localization as a Profession Software Localization Terminology Management
<b>SEMESTER 4</b>	Advanced Translation II B-A Website Localization Localization Project Portfolio Translation Management Systems

海岸のサンフランシスコから南に2時間ぐらい行ったところにあり、GoogleやAppleなどがあるシリコンバレーに近いです。その地の利を利用して、実際にそういった企業でローカリゼーションに関わっている人をゲストスピーカーに呼ぶということもしています。それから「Software Localization」は、iPhoneアプリですとか、いろいろなソフトウェアなどのローカリゼーションなどについて演習などを使って比較検討をしています。

「Terminology Management」は、今はTradosのMultiTermなどを使ってやはり演習を行っています。それから4学期目には、引き続き翻訳のクラスがあります。あとの三つはご覧の通り、HTMLなどの翻訳も含めてウェブサイトのローカリゼーションを行う「Website Localization」、ポートフォリオをつくる「Localization Project Portfolio」、プロジェクト管理の関連ソフトなどについて学び演習を行う「Translation Management System」があります。以上のように、この課程は極めて実務色の強いものになっています。

それからそのほかにNon-degreeのプログラムですが、ショートプログラムというのがあります。これは学生だけではなく教員や外部の方たちを対象にして、週末や冬休み、夏休みに開催される短期プログラム

です。現役の翻訳者あるいは通訳者が、新しいスキルを身に付けるために活用しています。(資料12)

資料12

**ショート・プログラム**

<p><b>Website Translation and Localization</b></p> <p><i>Online/On-Site</i> Understand the more technical aspects of the "science" of translation, including web content creation, HTML design and website authoring.</p> <p><b>Editing and Revision for Translators</b></p> <p><i>Online</i> Develop professional and revision skills along with an awareness of the norms of clear and concise technical writing.</p> <p><b>Training of Trainers for the Healthcare Interpreting Profession</b></p> <p><i>On-Site</i> Teaching skills and strategies for the training of medical interpreters.</p>	<p><b>Advanced Techniques for Court Interpreters</b></p> <p><i>On-Site</i> Advanced, experienced court interpreters can further hone their consecutive and simultaneous interpretation skills.</p> <p><b>Computer-Assisted Translation</b></p> <p><i>On-Site</i> Learn to use of translation memory (TM), translation technology terms and terminology management tools.</p> <p><b>Conference Terminology and Procedures</b></p> <p><i>On-Site</i> Learn relevant terminology and procedures for planning, chairing and speaking at conferences.</p>
--	--

では、最後に、実際に翻訳の授業では何をやっているのか、手短かに説明いたします。まず、教材のテーマですが、どの言語も大体この四つに沿ってやっています。教材はいろいろな種類のもので、例えば雑誌・新聞記事や論文、ウェブサイト、パンフレット、マニュアル、カタログ、字幕、特許などを使っています。(資料13)

資料13

**教材のテーマ**

修士課程1年目	修士課程2年目
一般 経済	科学技術 政治・法律

次に、翻訳の授業でやるアクティビティは、各教員や各言語によってかなり異なりますが、ここでは英日翻訳の授業の例を出してみました。(資料14) 具体的には、英語力、日本語力、リサーチ力、分析力、こ

資料14

**アクティビティ**

- 翻訳課題・ディスカッション
- 翻訳プロセスの記録
- プレゼンテーション
- 各種ツールなどの紹介
- 実務演習
- チェック演習
- サイト・トランスレーション

の四つの基本スキルを強化していくことに特に注意を払っています。そのほかにも、IT リテラシーや実務スキルなどを伸ばすアクティビティも随時取り入れています。

まず、「翻訳の課題とディスカッション」です。毎週、一定のワード数の翻訳を宿題として出し、それに対してフィードバックを行います。数をこなして安定した品質のものを限られた納期で出せる練習を積んでいきます。学生には、英語ネイティブと日本語ネイティブがいますので、より細やかなディスカッションが可能になっています。去年は、フランス語ネイティブで3か国語で翻訳を専攻している学生の方もいました。

それから2番目の「翻訳プロセスの記録」は、特に1年目に行います。まず推敲方法やその回数について、例えば訳文だけの推敲は何回しているか、原文と照合しているのか、印刷して見直しているか見直していないか、といった点を見ます。印刷しないとやはり見落とすところが多いという話も、実務関係の方々からよく出ますので、そういった点を記録して比較します。それから、使用したリソースと、インターネットリサーチの軌跡などについても、各自記録して提出してもらいます。例えば、細かい間違いが多い人は、訳文と原文の照らし合わせを十分にしていないかもしれない。または、ちゃんとした辞書を使ってい

ない、あるいは使いこなしていないんじゃないとか、調べものが足りないとか、問題があればそれを1学期目の時点で軌道修正できます。2年目には、各自の翻訳作業を動画キャプチャーして、その録画を見せることも最近は始めています。これも各自のプロセスの改善につながります。

「プレゼンテーション」では、翻訳関連や技術関連などのテーマについて学生の人たちにプレゼンをしてもらっています。最初は基本的な検索テクニックや高度な検索テクニックなどから始めて、各種辞書やツール、業界の事情などについて調べ、発表してもらいます。

それから「各種ツールなどの紹介」もしています。用語管理ツールや各種マクロ、辞書、翻訳メモリーツール、コーパスなどについて演習も取り入れながら学びます。

次の「実務演習」では、クライアントとのメール演習や交渉などの演習、請求書や見積書の作成、グループ作業、日本とアメリカの商慣習の違いなどについてカバーします。具体的には、例えばメールのレスポンスや形式などや、契約についての認識の違いなどについて演習を通して学びます。

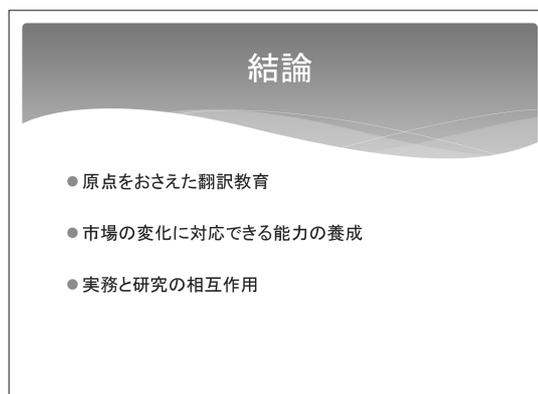
それから「チェック演習」というのは、post-editingにもつながるかと思うんですけども、ピアレビューや editing を行います。MTの post-editing も実験的に何回かやったことはあります。

最後に「サイト・トランスレーション」も2年目では取り入れています。通訳にも大切ですが、翻訳のスピードアップにも役立ちますし、音声認識ソフトやアプリなどを使えば翻訳作業にも使えますので、重要

なスキルだと考えています。

以上、MIISの翻訳教育についてまとめますと、まず、原点をおさえた翻訳教育であるということです。こういったカリキュラムでこういう教育をすれば、いい翻訳者を育成できると実践で示してきたと思いますし、ある程度の評価もいただいています。こういう時代だからこそ、差別化を図るために翻訳者としてのコンピタンスと基礎をしっかりと身に付けて、市場に入った時点できちんと仕事を任せられる翻訳者の養成が望まれると思います。それから市場の変化に対応できる能力を養成しているということです。市場の新しい動きを常に意識して、それについて自律的に対応できる能力を養うということです。それから最後に、実務と研究の相互作用を図っています。実務者は研究を参考に、研究者は実務からデータを得た授業も行うことによって、両者の相互作用が実現しています。(資料15)

#### 資料15



私の事例報告は以上です。ありがとうございました。

## 事例報告

### 「みんなの翻訳」

#### 影浦 峡

影浦です。これまでの他の方々の発表が全部、とても体系的にきちんと世界を見てお話ししていたのに対して、私はプライベートなニーズを出発点として、ミッションオリエンティッドなある種の翻訳を対象とする流れを縦に追った上でできたシステムというのが、テスト的に翻訳教育にどのような形で使われているかをお話しします。

まず、翻訳についてですけれども、午前中にも話がありましたが、そもそも翻訳とは何かというところで、人によってイメージが違ったりする。プロの人と素人がやっている翻訳、あるいは文学翻訳となんとか翻訳が、全然違うものだったりします。とにかく翻訳は言語的な行為ではないのだけれど、では何かというとよく分からない中で、取りあえず、私が考えてこんなものをつくりました、というシステムの背景にあるものは何かについてまずお話しします。それから、「みんなの翻訳」というものを作ったのですが、これは午前中からの「翻訳革命期」というトピックとどうつながるか。そして神戸女学院大学をはじめ幾つかの大学で試験的に使っているの、それは翻訳教育の中でどういう感じなのということ、あまり全体の中できれいにまとめようとはせずにお話ししたいと思います。

まず「みんなの翻訳」が想定する翻訳についてお話しします。私は、生まれてから2回だけ何かを真面目にやったことがあります。一つは1999年の東ティモールの解放、

主権回復のとき、このときは国際東ティモール連盟の投票監視団の日本事務局長をやっていました。これはスアイというところのアヴェ・マリア教会です（資料1）。これは99年の9月6日より前の写真です。9月6日の後、完全に焼き払われてぼろぼろになっています（資料2）。この間に何が合ったかという、9月6日にインドネシア軍とその手先の民兵がスアイの教会を取り囲んで中に避難していた東ティモール

#### 資料1

「みんなの翻訳」が想定する「翻訳」



影浦峡

2013年1月12日 於 立教大学

#### 資料2

「みんなの翻訳」が想定する「翻訳」



影浦峡

2013年1月12日 於 立教大学

人を虐殺したんですね。分かっているだけで160人ぐらい殺されました。もちろん投票監視団を出した国際東ティモール連盟ではスアイのプロジェクトリーダーとして、ノルウェーのロニー・ハンソンという人が行っていました。投票が8月30日でしたから、9月6日には彼はもうノルウェーに戻っていたのですが、その虐殺のただ中にスアイの神父さんと衛星電話で話をして、その衛星電話で話した内容が英語で東ティモール連盟の事務局の世界にいる人たちにぱっと送られる。ほぼその瞬間、リアルタイムに近い形で回ります。日本側の事務局長として私は何をしなきゃいけないかという、これを日本語に直して外務省や国会議員に持って行って、「日本政府なんとかせい」と言いに行くわけです。時差の関係はありますが、とにかくまとめてリリース文章を出してという作業を1時間くらいでやらなくてはならない。スアイで何が起こったか。ロニーが、ひどい状況だということでアヴェ・マリア教会の神父に電話をした。民兵が教会を取り囲んで誰も逃げられない、教会が襲撃されて100人もの難民が殺害された、という情報をぼんと受け取ったときに、誰が何をしないといけないか。プロと自称する人たちはこのような状況の翻訳はやってくれません。そう言うと言い過ぎで、プロでこういうことにたまたま逢ってしまったらやるという人がほとんどだと思います。けれども、これはやる気の問題ではなくて、たまたまそのような状況に出会うかどうか、確率と必然性の問題です。プロでこうした翻訳もやる人と、現実にこのような翻訳をやらなくてはならない状況とは、確率的にはほとんどマッチングしない。逆にいうと、こういうトピックに関わっている人たちがなんとかしなくてはならないという状況があるわけです。実際、頼む時間もない。

これは確かに特別極端な例ではありますがけれども、でもあまりないとも言えません。もちろんここまでシリアスな例は少ないかもしれませんが。私も今まででこういうのは2~3回しかありません。けれども、これに類する話はいっぱいある。こうした市民活動的な領域について言うと、一方で、対象やテーマに関心を持つ人たちで翻訳のお手伝いしたいという人が大勢います。例えば、私は90年代からずっと東ティモール関係の小さな記事などを翻訳していて、いろいろリリースを出したりすると、大学生をはじめ、色々な人が手伝いたいと言って来るのですが、残念ながら、実際に継続的にやってくれる人はほとんどいません。それなりに安定してやってくれる人もほとんどいない。その結果、NGOなどのボランティア翻訳では、一部の人に翻訳作業が集中して、その人たちは忙しいので、やりたいとって新しく来た人の翻訳の面倒を見ることができず、歩留まりはますます下がって、結局また同じ人に集中する。これは私の例だけでなく、アムネスティ・インターナショナルさんをはじめ、色々なところを見ても、大体そういう形でボランティア翻訳は悩んでいます。

悩んでいる中で、ではこのクラスの翻訳をこれからどうしていこう。こうした翻訳を扱う環境を少し整備ができればいいなと思いついたのが出発点です。よく考えてみたら、私、自然言語処理をやっていたんです。論文は書いていたんですが、でもこのような実践と全然結び付いていなかった。それで、仕方がないから自分で使いたいものをつくらうじゃないか、ということで作くり始めたのが「みんなの翻訳」です。いわゆるハコではなく、ハコはもうすでにプラットフォームがありましたから、むしろちゃんとレファレンス情報を組み込みたい、それを提供したいという形でつくりました。

また、翻訳支援環境だけではなく、公開プラットフォームも共有していこうじゃないか、それによって、逆にこのクラスのコミュニケーションをもう少し広げられないか。あまりうまくいってないんですが、そんなことを考えました。

誰が使うのかですけれども、ここが多分、工学と翻訳者との関係でクリティカルなポイントだと思います。これは文科省の科研費でつくったので、あまり大きな声では言えませんが、でも、とにかく自分が使うためにつくりました。だからほかの人にどんなに文句を言われても、僕が使いやすいのでそれでいいやと。逆説的ですが、「皆さん使えるでしょう」という形で、翻訳の実務を知らない技術者が一般化してつくと誰も使ってくれないものができたりするという経験は工学の側からあるので、とにかく自分だけは使おうという形で作ったものです。今でも幾つかの名前で「みんなの翻訳」を使っていますが、他には NGO、NPO、あと誰でも使えるようにしようということで、幸い NPO ではアムネスティさんとか、あとデモクラシーナウ！の中野真紀子さんとか、JCAFE さんとか、そういう方々が使ってくださっていて、それなりにないよりは便利だねという程度におっしゃっています。どんなものかというところ、<http://trans-aid.jp/>で、誰もがアクセスできますのでいじって見てください。ただし、Windows のインターネットエクスプローラーでは使えません。私がマイクロソフト嫌いだから。Chrome と Safari と Firefox は使えます。マイクロソフトはきれいなものと、あとわれわれが開発していたころは、インターネットエクスプローラーの仕様がちゃんとしていなかった。HTML 関係の国際仕様にきちんと従っていなかったので使えません。現在、大体2400ユーザーです。ただ、登録ユーザーは2400人ですが、アク

ティブユーザーは、分布を見ると本当にアクティブな人は50人、たまに使う人を含めて200人ぐらいですね。2009年に公開してから3年間で1万2千文書ぐらいの翻訳に使われていて、公開されているのはそのうち3分の1ぐらい。ほかはそれぞれの人が翻訳して、自分のところで公開するか、あるいは自分向けに勉強に公開してるという感じ。本も出ています、これを使って。作品社から『宇宙開発戦争』などのノンフィクション翻訳が出ています。質はどうかな。

言語対としては、今のところ英日・日英のほかには日中・中日、日独、カタロニア語英語などの辞書を組み込んで、それなりに展開しているところです。それから、オンラインの翻訳プラットフォームなので、実は、ブックマークレットというのがあって、これをブラウザのブックマークツールバーに組み込むと、例えば BBC のページを見ていて、このパラグラフを訳したいなと思ったときに、ブックマークレットをポンと押して、領域選択すると翻訳支援エディタが立つとか、そういうちょっとしたメカニズムはつくっています。

実物をデモでお見せしようと思ったのですが、あまり時間もない感じですから、一番最後に少しだけお見せすることにして、では、これと「翻訳革命期」がどうつながるのか。今となっては、割と当たり前の形ですが、これを考え始めたきっかけとなった翻訳に自分自身が直面しはじめたのは、90年代の半ばから末です。そのころはまだクラウドとかオンライン翻訳などは、ごく一部の NGO や限られた人の間でしか使われていませんでした。そもそもインターネットが一般に広まったのは90年代の後半です。ですから、その当時の話でいうと、これまで翻訳の対象となっていなかった文章の翻訳ニーズが顕在化したという形で捉

えられます。その中で、こうした文書をめぐって意識化された幾つかの新しい要件、条件というのを山田さんから武田さんのお話を踏まえて聞いてください。

まず、品質要件ですが、情報品質と言語品質があり、ある種の情報、例えばホテルの予約の情報と同じで、絶対に間違っはいけない、言語品質が高くて、例えば、その教会にいた人と殺されたことが確認されている人数を訳し落とししたりしてはいけないとか、そういう意味での情報品質というのが一つあります。それに対して言語品質はどうか。分かればいいのか、多分、出版翻訳の基準よりも少し緩くてよい、そのバランスが一つ。どういうバランスで落ち着かせるかを別にして、こういう状況の翻訳で、品質の問題が別の視点から前景化されるということはあるかと思えます。それから時間制約における最適化。先ほど言いましたが、その日のうちに、もしもそれで日本政府が初動を何かしてくれたら、多少は事態がよい方向に動くかもしれないというときだと、時間は非常にクリティカルです。

次に対照状態の問題があります。こうした文書の翻訳において想定される対照状態は、よい翻訳に対して悪い翻訳というのではなく、そもそも翻訳がない状態に対して、最低限、日本語であったほうがよいのか、というものです。これについても、どの文書についてどういう対照状態が標準かというのは、状況によっても見る人によっても違うと思いますが、少なくともそういう問題がこのような翻訳の中で、これまでの制度化され、確立した翻訳領域よりも、一歩、はっきりと可視化したと思えます。

また、終了条件についても、明確な納期や検収、クライアントのフィードバックが不在という状況があります。さらに、作業条件に目を向けると、オンラインで共同作

業ができたらいいいねというのが、90年代の末から2000年代の半ばぐらいにかけて変わってきたところです。

そうした中で、技術環境をどう考えるかという問題がありますが、ここはもう割り切って、ボランティアで翻訳をやりたいと言ってくれる人たちの多くが結局あまりできずにいなくなってしまう一方、プロの翻訳者が十分にカバーできる領域ではない状況で、翻訳結果についていろいろ議論があったとしても、でもとにかく翻訳がないよりもあったほうがいいのか、技術も使って行くのがよいだらう、というのが基本的な方針になると思うのです。そのような枠組みの中で、技術をどこまで使えるかが切実な課題として出てくる。それをどこまで反映させるかという形で、「みんなの翻訳」のあり方は定義されています。

もちろん、これまでのプロの翻訳、午前中に話題になりましたが、プロによるクオリティの高い翻訳されたものそのものが付加価値である翻訳というのは当然保たれるべきだと思います。けれども、翻訳ニーズとプロの翻訳者のマッチングが取れない状況で誰が何を翻訳するのかという問題に対応しなくてはならない状況は必然的にあるので、そこを環境として、技術としてどこまですくえるかという形で定義したのが「みんなの翻訳」のシステムということになります。幸い、いろいろなところで宣伝しているうちに、神戸女学院大学の田辺先生が授業で使ってみたいということになり、去年から実際に授業の一つに導入してくださっています。

では、翻訳の授業でこうしたシステムを使うとどんなところに違いが出るのか。夏に田辺先生と一緒にワークショップをやっている確認したんですけど、ここではそのうち良い面だけお話しします。もちろん悪い面もあります。良い面としては、

まず、in vitro から in vivo への移行があります。大学で翻訳の実習というときには、どうしても、先生を前にした実験室的な環境での翻訳でした。それが、「みんなの翻訳」の公開プラットフォームを通して公開されることを前提にすることで、例えば JCAFE という NGO と連携し、そこが翻訳を求めている進歩的コミュニケーション協会 (JCA) の女性のエンパワメント関係の文書など—第三世界の女性がどんなふうに IT 技術を使って自らをエンパワメントしているかといった文書—を素材に取り上げることで、in vitro から in vivo で、実際に必要とされている翻訳をしているんだという自覚が発生した。それによって学生さんが自分のできる範囲で、技術の範囲でどこで終わらせるということについて、意識的な責任感を持てるようになった。これは、配布資料の文献にある Kiraly の *A socialconstructivist approach to translator education* でも述べられている、有効なところだと思います。

もう一つは、技術の制約があるため慣れるまで使いにくいことの反面でもあるのですが、辞書引きと用語管理と対訳参照とウェブ参照を、私たちが提供しているエディタでは、シームレスに実行することができます。逆にいうと、そうした作業は翻訳において当たり前にするものだとすることを、一応システムの制約として提供する。その制約がポジティブに働くか、ネガティブに働くかは個人差もあるので一概には言えませんが、何もないよりも幾つか基本要素となるステップは可視化されて、自然な活用習慣が修得されることがメリットとして挙げられます。もう一つ、やはりもともとは NGO の場で共同作業ができるようにと組み込んだ機能ですが、教育の場で割と使われているのは、共同編集です。さらに、OJT を促す機能として、編集して直した

ところとの差分を表示することができる。これは、例えば、やる気のある学生が、田辺先生は、自分の文章のどの部分をどんなふう修正しているのかチェックできるので、自習を促進できる。さらに共同編集できると言いましたが、ここで共同編集環境のプロセスを環境化して明示化するので、そこで、クラウド翻訳における翻訳者間の倫理につながるような、ある種の共同編集環境の萌芽のような環境に馴染むことができます。

翻訳をめぐる技術的環境と言う点では産業翻訳で使われている技術環境の親和的な接続を、メリットとして挙げるができます。「みんなの翻訳」は、Trados 等の翻訳支援ツールとはシステム的にはだいぶ違うのですが、でも機能要素まで抽象化すると、割と共通しているところが多い。ですから、割と翻訳企業の翻訳者が産業翻訳で使うシステムともそれなりに親和性はあるだろうと考えられます。もう一つ、卒業後の翻訳活動の継続です。統計パッケージで SPSS や SAS など、それなりの値段がする有料のものを大学で使うことが多いのですが、それらを学んだ人は、卒業後、自分で高い値段でそうしたソフトを購入するのはかなり大変なので、結局、あまり使わなくなるんですね。だけど、R というフリーの統計・データ分析環境があって、非常に高度なシステムなのですが、それを使って大学で教えることのメリットの一つは何かと言うと、自分の環境でもフリーでダウンロードすれば使えるので、卒業後も普通に、日常的に統計分析をやり続けるということがあります。それと似たようなかたちで、「みんなの翻訳」を使って—もちろん翻訳で生計を立てることについて、卒業後のお金の問題とかビジネスモデルの問題は別にありますけれども—できれば私としては、大学で「みんなの翻訳」のようなものを経

験した方が、またボランティア翻訳を、片手間ででも、プロとしてやる人はプロとしての仕事の片手間ででも、やってくれる形になればいいかなと思っています。

こういう枠組みで「みんなの翻訳」を構想し、翻訳教育におけるこうしたシステムの位置づけをお話ししてきたのですが、この手のもののメリットやデメリットについてはのちほどディスカッションの場で議論できればと思います。とりあえずのところは、田辺先生のところで使っていただいて

いて—もちろん神戸女学院では、全体の翻訳カリキュラムが横にきちんと定義された上での一つの縦の筋ではあるわけですが—それなりに、楽しんでいただいております。メリットもそれなりにあるかなと思っています。「みんなの翻訳」とツール群のラインナップがありますが、時間が過ぎているので、システムの紹介は後で時間があればしたいと思います。

ありがとうございました。

## ディスカッション

### 「革命」期に求められる翻訳者コンピタンスと翻訳者養成

武田：それではディスカッションに移る前に、ここでオヘイガンさんからのコメントを紹介させていただきます。これまでも少しずつ紹介してきたのですが、最後にまとめとして、「日本で翻訳大学院を拡充すべきだと思いますか」と聞いたら、こういう答えが返ってきました。英語で 'Most definitely, Yes!' と書いてあって、続けて「いろいろな理由がある中でも個人的には、次のようなことが日本の文脈の中では重要な要因だと考えます。外国語の能力を求める企業は、これは翻訳会社に限らない、例えば Google のような会社ですが、そうした企業では、より高度な翻訳概念、つまり翻訳の文化面とか技術面を含む多角的な側面を理解する人材が求められるようになっていきます。例えば、ダブリンの卒業生の中で、Google の入社試験で、翻訳研究卒論でどういうことをやったのかということを詳細に聞かれたということ、何人かから聞きました」とのことです。これを私なりに解釈しますと、翻訳、訳出そのものというよりも、翻訳が行われている状況を俯瞰して、翻訳の訳出も語れるし、その技術面も語れるし、社会的な面、文化的な面も語れるような人材、それが個人の直観とか経験に基づくだけではなくて、きちんとしたデータ、実証データとか理論の枠組みの中で語れるような人材というのが必要とされているのではないかと想像します。

それから、オヘイガンさんの次のコメントは、「欧米、オーストラリアなどの翻訳修士プログラムのことを考えると、日本の新卒者の国際競争力の強化の点からも、こ

とに日本語の需要に特化した翻訳者養成教育が必要ではないか」ということでした。では「オヘイガンさんが全く新しく翻訳者養成プログラムをつくとしたらどんなカリキュラムにしますか」と質問しました。彼女の答えは、「以下のようなことを加味したカリキュラム。まず言語習得手段としての翻訳というマインドセットから離脱すべき。それから翻訳テクノロジーの限界と可能性を理解すべき。固定観念に囚われず、ことに一部翻訳者の中には MT アレルギーがある、こうした固定観念に囚われずに、適材適所の CAT およびコミュニティー翻訳の利用ができるような翻訳者を養成できたらいい。それから起点言語、読解力の向上と目的言語生産の洗練化、例えば、ゲーム部門では翻訳者の creative writing の訓練が求められている」ということでした。creative writing、これは文芸翻訳とか出版翻訳にも通じると思うのですが、そのようなことをおっしゃっていました。

それからもう一つ MOOCs が最近流行っていますよね。ハーバードと MIT が始めた edX が代表的で、要するにオンライン上で大規模な学習者が参加した授業をやっていくわけですが、そこでは、テストの評価を学習者同士で、peer review をやる。翻訳でもそうした評価をやったらどうか、また、学生に theorization の機会を与えることもオヘイガンさんは提案しています。つまり翻訳というのは、幾つかある訳の候補の中から何かを選んでいくという意味決定の連続なわけですが、その意思決定

を自分で説明できる、理論化するとか、自分がやっていることを批判的に思考する、振り返ることが必要じゃないかとおっしゃっているのだと私は解釈しています。

それと、「できれば翻訳授業を国際化して、起点言語と目標言語をそれぞれ母語とする学習者を含むクラス編成」、例えばモントレーなどでは、英語のネイティブの人、日本語のネイティブの人、フランス語のネイティブの人などが一緒に授業をやっている、そうしたクラスがいいのではないかとオヘイガンさんはおっしゃっています。

それともう一つオヘイガンさんに聞いたのは、「今、まだ文献として発表されていないけれども、これから注目すべき新しい傾向って何かありますか」という質問で、「今後予測される MOOCs の普及が今一番面白いチャレンジ要因かもしれない」というお答えでした。ハーバードとか MIT がタダでコースを解放しているわけですよ、世界中の人に。そういう時代、つまり「大学淘汰時代には翻訳者教育を超える大きな問題かもしれない」けれども、「デリバリーの方式が変ればコンテンツも変わらざるを得ないので、その辺から翻訳者教育は大きく変わっていく」のではないかということでした。特に「学習者間でテスト評価、自分たちで翻訳の評価を peer review でやっていく」ということは、先ほど影浦さんの発表でも出ました Kiraly が提唱している「社会的構成主義の教育理論の流れに合うものであって、今後翻訳教育分野でも真剣に開拓すべきではないか」という提案もオヘイガンさんから受けました。

ということで、これで発表は全部終わりですが、これからまた、パネルディスカッションをしていきたいと思います。今のところ、まだ質問票は来てないのですが、どしどし質問・コメントを送っていただきたいと思いますので、よろしくお願いします。

影浦：ラッセル秀子さんへの質問なんですけれども、学部でどんな専攻を受けた人が MIIS に来て、その中で、学部時代の教育で大学院での翻訳教育に親和性の高い、あるいは非常に有効だとか有効じゃないとかいうことはあるのでしょうか。そういう面についての requirement が学部で専攻するサブジェクトとして、あるいは学部教育レベルでの一般的なコンピタンスとしてあるかについて、もし経験からお分かりでしたらお聞きしたいのですが。

ラッセル：ありがとうございます。今までの卒業生について、私が知っている限りでお話ししますと、武田先生もご存知かと思えますし、もちろん皆さまもお分かりだと思いますけれども、いわゆる昔ながらの英語屋、例えば英文科出身とか、英語を専攻したとか、そういった人ばかりではないですね。逆に、もちろん理系の人も、少ないんですけどもいらっしゃいます。理系の人というのは非常に強いです。もちろん文系の人には文系の強さがあって、理系の人には理系の強さがあり、どちらもメリット、デメリット、あるいは強さと弱さがあると思います。

学部教育とは関係ないんですが、私が見てきてこれが特に役立っていると思われる点があります。この人はすごい翻訳者だな、この人にはかなわないなと思うような卒業生が今日も何人か来ていらっしゃるんですが、そういう人たちは、いろいろ聞いてみますと、まず、非常に一般的なことなんですが、小さいときから読書を重ねている、本好きだということです。逆に、翻訳者になりたいとおっしゃるけれども、どうも翻訳者に向いてないのではないかと、ちゃんとしたお仕事をするためには、ちょっと弱いのではないかという印象を受けるような人は「私、本は全く読みません」という人が多いです。読書というのはやはり非常に大

事だなどと思います。あとはもちろん、理論的な分析力というのが大切ですね。英語力、日本語力はもちろん言うまでもないのですが。それから、先ほどの話ともつながりま  
すけれども、英語力あるいは日本語力など、いわゆる翻訳力が高くても、例えば機械に非常に弱いという人が今までも一人ぐら  
いたんですが、やはりそういう方は苦勞しますね。機械いじりがどうも苦手だ、例えば Trados をいじれないという人だと、なかなか翻訳業界にうまく入っていけない、そういうことがあります。

何か学部教育との関連性や相関性について、お気づきになったことありますか、武田先生。

**武田**：今、全部網羅されたのですが、ここにもかなりモンレーの卒業生がいらっ  
しゃっていて、彼らがもう本当に生きる見本なのですが、例えば、そこにいる彼は UC バークレーのコンピューターサイエンスを主席で卒業した人です。で、彼は本当に理系バリバリなのですが、素晴らしい翻訳者になって、今、特許翻訳を主にやっています。あと、医学部卒業の人が来たこともあります。歯学部出身者もいたし、いろんなバックグラウンドの方がいらっ  
しゃって、その方々はやっぱり専門知識というかドメインの知識があるのでとても有利だと思  
います。

**影浦**：もう一つお聞きしていいですか。

**武田**：どうぞ。

**影浦**：WIPO にインターンに行って、そのままフリーランスで WIPO の仕事をもらって翻訳者になるというキャリアパスをちょっとご紹介いただきましたが、翻訳のマネージメントコースを出た後、ある種フリーランスのマネージャーとかエージェントみたいな形で仕事をする人というのは存在可能なんでしょうか。例えば翻訳ではなくて文芸出版だと、アメリカなどでは著者

に対してエージェントが付いたりしますよね。そういう形でのフリーランスエージェントとか、翻訳も含めたマネージメントのキャリアパスみたいなのはあるんでしょうか。

**ラッセル**：私が知っている限り、フリーランスのプロジェクトマネージャーというお仕事は存在していないと思うんですが、どうでしょう。ただ、フリーランスの翻訳者になると、フリーランスの方は皆さんご存知のように、自らプロジェクトマネージャーにならなければいけないわけですから、やはりプロジェクト管理の知識やノウハウなどは翻訳者にも不可欠だと思います。

**井口**：現実に関あるかないかという話ではなく、われわれフリーの翻訳者の中のイメージとして、先ほどちょっと言われたエージェント的な人、自分たちの代理として売り込みなどをうまくやってくれる人、そういったものがあつたらいいよねっていう話は出ます。それが職業として成り立つほどにみんなお金を払えるのかとか、いろいろあるんですが、やはり自分自身を売り込むというのは難しいんですよ。客観的な話になりにくいですし、聞くほうも客観的な話として聞いてくれないので。そこを第三者がエージェントとして、たくさんの人を担当していて、その中でこの人はここはみたいな話になれば、また、話は変わってきますのでね。そういった立場の人がいてくれたらいいねという話は結構出ます。

**武田**：それに関して言うと、この前、JAT の例会に出させていただいたときに、そういうことをしようと考えている方が発表なさいました。電子出版関係です。電子出版された本を翻訳したいというとき、その翻訳者のエージェントとして作者や出版社とのアレンジをしようとなさっていると理解しました。でも、実際に職業として今成り立っているかどうか情報は持っていま

せん。

質問が来ています。皆さんにということ、院生の方からです。「仮に、大学で翻訳大学院プログラムができたとして、既存の翻訳学校とどういふふうに共存していくのでしょうか。共存していけるのでしょうか」という、民間の翻訳会社の翻訳学校の話なんです、何かコメントのある方はいらっしゃいますか。

**ラッセル**：国内の民間の翻訳学校という理解でお話しますが、どうやって共存していくかは、難しいですね。民間のほうは、翻訳者養成も目的の一つではあると思いますが、やはり営利も一つの目的である、という点があります。一方で、そういった学校で実際に教えていらっしゃる方は、素晴らしい方が揃っている。この会場にもいらっしゃると思っています。ですから共存といった意味では例えば、教育者の共存というのはじゅうぶん可能ですし、相互作用を図っていけるのではないかと思います。民間の学校で今まで教えていらした方が、その教育・養成のノウハウ、それからもちろん実務者としてのノウハウを生かして、大学、学部、あるいは大学院の教育者として、これからどんどん活躍していただきたいと思っています。お答えになっているかわかりませんが。

**武田**：2年間フルタイムの学生になるというのは大きなコミットメントです。それができない人たちはたくさんいらっしゃると思います。その中で、翻訳者になれる素質とか才能があり、また努力も惜しまない人たちはたくさんいらっしゃると思うので、そういう方々に、訓練の場を提供するという意義はとても大きいと思います。それから、今、ラッセルさんがおっしゃったことなのですが、やはり実務者の方に教えていただきたいという気持ちがあつて、先ほどの私の発表の中でも言いましたが、中国で、

今、翻訳修士号のプログラムって150校以上あるんですよ。もういきなり出来たんですよ、翻訳修士号のプログラムが。何が一番問題かということ、先生の問題らしいです。なぜかということ、作ったのはいいけれども、教えている先生が言語の先生なんです。英語の先生とか語学の先生で、翻訳を実務としてやったことがないような方が教えているという問題があると聞いています。やはり、こういう世の中ってどうか、今、午前中も話が出ましたけれども、いろんなことが市場で起こっていて、そうしたことに触れている方、実際に仕事をしている方に、大学、大学院でも教えていただけるような状況ができたなら私はいいなと思っています。**井口**：翻訳学校と大学院との共存みたいな話でしょうか。

私が知っている範囲ということ、どちらかということ翻訳学校のほうが詳しいんですが、共存うんぬんという話を翻訳学校側は、多分、気にしないと思うんです。逆にいうと、翻訳学校側が大学院教育が充実したからといって翻訳学校がなくなるという、または彼らのところの生徒さんががっかり減るといようなことは恐らくないだろうと思うんです。

さっき武田さんも言われましたが、2年間フルタイムの学生になる、または大学院だとある程度仕事をしながらということもできると思うんですが、それでもほぼ毎日いろんな授業があつて、演習があつてと、そこまで時間を取れる人はそれほど多くないわけです。翻訳学校だともう少し短い時間で、その代り2年ということではないかもしれない。短ければ半年ということもありますし、長ければ3年、4年という形である程度の方が学べるということで、そういう意味での自由度はむしろ民間の翻訳学校のほうがあると言え、ある。悪く言えば、まとまった教育じゃないということ

にもなると思うんですが。

結局、かなり性格が違いますので、多分、民間の翻訳学校の生徒がごっそりいなくなって、皆さん大学院に来るという形にはならないだろうと思います。

**武田**：ありがとうございます。翻訳者の方から質問が来ています。ラッセル先生に。「MIIS の卒業生は正当に評価されていますか。日本では特にクライアントが翻訳費用を節約する傾向があり、通じればいい、高い人はいらわないと言われがちです。オーバースペックで敬遠されたり、現場で煙たがられることはありませんか。高いギャラでも雇う価値があるとどうやって説得していますか。クライアントの啓蒙はとても難しいと感じています。」とてもいい質問だと思います。

**ラッセル**：ご質問ありがとうございます。まず先ほど申し上げたように、MIIS を卒業してすぐにフリーになる人はあまりいないですね。20年ぐらい前でしたら、新人のフリーランス翻訳者として市場に入っても、立ち上げ期間こそありましたが、十分食べていけたと思います。ですが今、新人翻訳者が大学院を卒業したとき、翻訳者としての実績がすでにある場合は別ですけれども、翻訳の経験は大学院で学んだだけ、という場合は、市場に入るのは簡単だけれども、レートは非常に低いところからしか始まらないことが多いので、食べていくのは難しいのではないかと思います。

そういったこともあって、先ほどお見せしましたように、MIIS の場合は就職課にグローバル企業や国際機関から引き合いがありますので、そういうところにまず就職する卒業生が多いです。日本人の方の場合、アメリカやヨーロッパに残りたいと希望される方も多いので、そういう企業などにまず入って、経験を積んで専門知識も積んでというふうに始める人が少なくないわけで

す。ただ、そういう方たちがその後、市場にフリーランス翻訳者として入ってどうなのかというデータは取ってはいないので、卒業生の人たちと話してどんな感じかという、世間話程度の話しか分からないんですが、直接、元の勤め先から受注している場合はもちろん直接のお客さんですし、その翻訳の品質も分かってるわけですから、ある程度のレートは維持できているようです。エージェンシーなどを通す場合は、それまでの経験がある場合は評価してくれると思うのですが、先ほど言ったように、例えば翻訳の仕事を半年で辞めてしまったとか、あまり実績のない人たちの場合は、幾ら大学院を出ていても、日本に戻ってきて、これからどうするのかといったときに、難しいものは確かにあると思います。これでお答えになっていますでしょうか。

**武田**：私も1年半前までモンレーにいましたので、ちょっと付け加えさせていただきますと、学生の意識として、フリーの翻訳者として出版翻訳をすることが翻訳者としての頂点、最高の仕事という意識はないです、今。この傾向はほかの言語に特に強いのですが、プロジェクト管理をする勉強に来た、もう最初からそういう感じで来る人たちがいます。そうすると、彼らは、ローカリゼーションとかのプロジェクト管理の技術、知識を身に付けて、Apple とかマイクロソフトとか Google とか Facebook のようなところに就職して、高給取りになります。ですから、そういう意味で、必ずしもフリーになることが最終的な目的だと思う人は少なくなっているかもしれない。むしろ安定した企業とか大きな組織、国連とかで翻訳だけではなくて、そのプロジェクト管理をしていくとか、言語スペシャリストになるとか、コンサルティング的な仕事をしていきたいという人が増えていると思います。

影浦：今の、マネージメント的な側面とフリーランス、あるいは出版翻訳といった分割をキャリアの類型として想定する分類ではなくて、キャリアパスとして世界的な環境と一なんでもかんでも世界というのはあまりよくないのですが一日本の環境というのを考えたときに、今の企業内の多言語化とかローカリゼーションの管轄部門についての企業内での認知度というのは、日本企業とWIPOや国際企業で大きな差はあるのでしょうか。

ラッセル：武田先生にもコメントしていただきたいのですが、WIPOにおける翻訳業務の認知度は高いです。今日いらっしゃる卒業生の方にも、お二人、WIPOでやっている方がいらっしゃるの、後で紹介したらどうかなと思うんですが、WIPOの翻訳者に対するリスペクトというか、これはプロがやる仕事だ、という認識はとても高いと思いますし、確立されたステップを踏んで品質管理を行っていると思われています。

武田：日本の企業でもグローバル展開しているところは、翻訳通訳部ってありますよね。ただ、日本にはそういう就職パスがまだ確立されてなかったから来てなかっただけじゃないかなと思います。これから時間をかけて取り組めば少しずつそういうことが認識されていくと思います。

ラッセル：日本企業だとホンダさんが翻訳通訳部を確立してきちんとやってらっしゃいます。92年ぐらいからでしょうか。

影浦：クライアント企業、クライアント教育について、今のお話は、企業をイメージしていると思いますが、もう一歩手前に戻ったときに、翻訳ではありませんが、例えば法廷通訳についての認知度と真剣度は、東アジアの日中韓三国で比べても、日本はかなり低いところがありますよね。いろいろところで社会的に必要とされている多

言語コミュニケーションについての認知度が、相対的に韓国や中国と比べても低いと思うんですが、そのような社会的な状況はキャリアや何かに影響しているのですか。日本語を中心とした何かというときに。

武田：ニワトリが先か、卵が先かの議論にも少しなると思うのですが、中国、韓国は特にそうなのですが、台湾もそうですけど、大学院がちゃんとありますよね。大学院で翻訳者、通訳者を育てていますよね。で、認定試験がちゃんとありますよね。そういう制度的なものが日本にはないということも少しは関係していると思います。

ラッセル：もし、質問がなければ井口さんに質問してもよろしいですか。今、立教で教えていらっしゃるんですね。実際にどういった学生の方がいらっしゃって、どんなことを教えていらっしゃるのか、教えていただけたらと思ったんですが。

井口：どういう学生さんというのと。

ラッセル：翻訳者を目指していらしてるのか、あるいは、研究か…

井口：そういう意味ですね。

ラッセル：研究者ですか。研究者を目指している方にどういう授業や実務演習を行っているのでしょうか。

井口：翻訳者を目指している方というのは少ないですね。私のクラスを取った方は10人ちょっとだったのですが、翻訳者や翻訳関係を仕事にしたいと考えておられるのは2～3人という感じです。

それはそれとして、翻訳の演習ということなので、私自身としては課題を出して訳してもらおうという形でやっています。ただ、こういう場合はこう訳すとか、そういうことをあまり言ってもしょうがないだろうということもあって、翻訳をするときにどういうことを考えなきゃいけないのか、考えた結果で出てきた訳文なのか、なんとなく文字や単語がこう並んでいるからこう訳し

たのか、その辺りを考えて訳すようにというあたりを取りあげています。翻訳というのはそうやって考えるものなんだよということが感じてもらえたらいいなと思うわけです。具体的には、半期15回ぐらいあるのですが、課題は二つしか出していませんよ。一つ課題を出したら訳してもらい、解釈の違いなどを1回合わせた後に、こういう雰囲気です、こういう雰囲気を変えて訳す、というようにして同じものを何回も何回も違う形で訳していく。そのたびに考えるポイントは少しずつ変わって行って、その結果、出来上がってくる訳文も変わってくるはず、変えようと思えば考える視点が変わってくるはずだということを、なん通りかやって感じてもらおうと考えてやっています。

**武田：**山田さんは麗澤大学で学部の学生に翻訳関連の授業をしていますよね。どういう工夫をなさっていますか。恐らく翻訳者を目指しているわけではないかもしれませんが。

**山田：**そうですね。英語の授業の一環として演習のクラスを取らなければいけないから取っているみたいな人は多いですけども。あと1、2年生と3、4年生の違いがあって、3、4年生になってくると英語力が相当付いてくる。どういう授業をしているかと言うと、3、4年生に対してはpost-editingとか、実際のもっと現場で使われているようなものができます。1、2年生はいきなりそういうものをやると、語学的に理解できないものが多いので、そもそも翻訳という話ではなくなってしまう。ただ、最近思うのは、3、4年生であれば、相当できるような人たちがいたり、興味を示す人が多いので、そういう人たちに対しては翻訳理論なども含めて教えています。

**武田：**質問が来ていますので、読ませてください。翻訳者の方からのご質問で、

「新しいとして語られている試みですが、すでに翻訳者のオンラインコミュニティでは行われてきたことが多い（失敗も含めて）のではないのでしょうか。問題は内容だと思います。翻訳者にこれからだろうという人とすでに翻訳者になった人たちのそれぞれに適した内容は異なると思います。そのそれぞれ、特に後者の内容は手つかずではないのでしょうか。」つまり翻訳者になった人のことをおっしゃっていると思います。私、アメリカの、ATAの会員です。ATAって、全米翻訳者協会ですが、certificateの試験がありますが、その試験に通るだけじゃ駄目なんです。試験に通った後も自分はプロの翻訳者として常に新しい技術とか新しい知識を学んでいますということを示していかなければなりません。例えば、こういう催しに参加してポイントをもらう、何ポイント稼がないと認定の更新ができない。そういう仕組みがあって、その中でプロの翻訳者がどういう訓練を受けるかという話をしているんじゃないかと思っています。どなたか何かありますか。

**井口：**プロになったらそこで終わりではなくて、翻訳の仕事をしている間は基本的にはずっと勉強していかないといけないわけです。いろんな意味で。ここでいいやと思って立ち止まってしまったら、どんどん後退してしまいます。人間自体の能力は前へ進もうとしなければ後退するものでもありますし、扱っているのが言葉だということ、言葉はどんどん進んでいくものだからなおさらです。能力が落ちなかったとしても、立ち止まったらその時点で置いて行かれることになりますから、勉強していかなくちゃいけないわけですよ。

プロの中にもいろいろいます。うまくできているかできていないかは別問題として、いろんな意味で勉強をしなければいけないという意識で動いている人と、勉強しなきゃ

いけないんだよと言いながら何もしてない人と。「取りあえず仕事に来てお金になってるからいいや」といって、勉強しなきゃいけない、できたらいいな、ということも考えなくなってる人と、大まかに分けるとそうなっているのが、実際かなと思います。

**影浦**：この3年間ないし、5年間で、具体的に何を勉強なされた。

**井口**：私自身は日本語関係の勉強が多いです。私は英語から日本語への翻訳が中心なのですが、日本語側で実際に何か書くときに、私自身の翻訳の方針として、日本人の著者が日本語でもともと書き起こしたとしたらこういうふうになるはず、という形になるべく持っていったほうが良いと考えています。英語の構文などを引きずってしまうとどうしても不自然になるわけです。不自然なときに、日本語の自然な表現とは何かというのを、その不自然なところからスタートして考えても、どこにもたどり着かないケースが非常に多い。ということで、日本語の勉強をいろんな形でして、「そうか、こういうときはこういうふうに言うんだ、こういう形で話を持っていくんだ」といったことを心の片隅に置きながら、不自然なものを見るわけです。「このあいだのあれが使えるな」という形で実際の仕事に応用していくので、3年間とか、ここ5～6年のほとんどは日本語系のことを勉強しています。

**武田**：関根さんはJATLAWにちょっと関わってらっしゃいますよね。法令翻訳者の人たちが、自分たちの技術とか知識を高めるために、どういうことをやっているのかちょっと紹介してもらえますか。

**関根**：JAT（日本翻訳者協会）にはJATLAWという法律を専門にされている翻訳者の分科会がありまして、そこで各方面から専門家を招いたりして、定期的に勉強

会を行なっています。つい先日も内閣法制局の方を招いて、日本の法律がどのように作られるのかということについての勉強会が行われました。

**武田**：自分が作った翻訳支援ツールの紹介はしましたか。

**関根**：私は日本法令を英訳するための支援ツールをつくっているのですが、会議の後の懇親会の際に翻訳者にこのツールを紹介したところ、興味を持ってもらったので、今月か、もしくは4月にその会合に参加して、ツールの紹介をするということになりました。

**影浦**：プロになった後の翻訳の勉強というのは、何かある種の共通の要素みたいなものはあり得ると思いますか。

**井口**：共通というのは、分野や言語を超えて共通の、という意味ですか。

**影浦**：そうです。研究とのアナロジーでいうと、大学院修士ぐらいまでは、取りあえずこういう分野でやっていくのならこういうことを学ばなきゃいけないというのは当然ある。学部だとすごく楽で、線形代数と微積やってね、とかいうことがあるのですが、その分野で研究者になった後は、それぞれほとんど同じようなテーマで研究していても、実は裏で何の勉強をして何をやっているかは見えなくなってくるんですよ。研究室の読書会で、例えば、どの本を読みましょうとかいうことはあって、これはもう業界でスタンダードだからみんな読みますねというのはあるのですが、そうした状況とのアナロジーでの質問なんですけれども。

**井口**：そういう意味では、共通する部分は結構あると思いますね。実務系の翻訳の場合には分野が違っていたり、英語の翻訳だと、「私はこれとこれです」みたいなある程度狭い範囲のものをやっていたりするので、技術内容とかそういったことについて

は分野ごとに全然違うことになってしまうのですが、それは翻訳そのものではありませんから。翻訳そのものということで考えると、かなり共通する部分が多くて、その辺については、学んでいかなきゃいけないものは共通してたくさんあるはずだと思っています。

**ラッセル**：翻訳者の仕事というのは、一つ一つがOJTというか、何年やっても何十年やっても、常に勉強しなければならない仕事だと思うんです。それだけで足りない場合は、例えば、フェローさんなど民間の学校で、マスターコースみたいなものもやっていますし、そういったものを利用することもできるかと思います。あるいは、MIISで短期プログラムをやっていると話ししましたが、日本の大学院などでも短期プログラムのものなら取り入れやすいのではないのでしょうか。それから、翻訳を何年もやっていらっしゃる方や、第一線で活躍していらっしゃる方々は、例えばオンラインや実際に会って勉強会をなさったりしています。そういう集まりなども、インターネットのおかげで、どこにいても互いに切磋琢磨していく場は設けられていると思います。あとは、自分のことと言えば、一つ一つの仕事が勉強であるということと、自分が普段しないようなもの、例えば、私はローカリゼーションはやっていないのですが、それでもどういうツールが使われているのかなど、ツールについての勉強はしています。全部購入して学ばなくてもいいから、ざっと、どういうことができ、どういう動きが今業界であるのかということ把握する。翻訳者とももちろん通訳者にとっても、そういう俯瞰的な姿勢が常に必要だと思います。

**井口**：今のお話と少し違いますが、ひとついいですか。別のお話で申し訳ないんですが、先ほど出たオヘイガンさんのコメン

トに関連してひとつ、どうしても言っておきたいことがあります。

途中のところ、固定観念に囚われず、ことに一部翻訳者のMTアレルギーに関してというのがあって、適材適所のCATおよびコミュニティ翻訳の利用ができる翻訳者の養成というお話がありました。それは翻訳者じゃありません。翻訳者が適材適所でCATを使ったり、コミュニティ翻訳を使ったり、そういうことはないわけです。翻訳者というか人間はそんなに器用じゃないので、この人はこう、この人はこうと、いろんな人がいていいと思うんです。それをどううまく組み合わせてプロジェクトを進めるのか、またこの案件についてはどこにどういうふうに出すのか、ということを考えられる人がいないと困るのは事実ですが、それは翻訳者じゃなくてプロジェクト管理の人の仕事です。

それから、MTアレルギーうんぬんというお話についてですが、山田さんのお話の中でも、昔、TMディバイドという言葉があり、これからはMTディバイドが起きるんじゃないかというお話がありました。

TMディバイドというのは要するに「TMなんて使いにくくていやだよ」と言っていた人が、だんだんローカリ関係の仕事から消えていった。それがTMディバイドといわれる言葉の意味なんですけれども、実は最近、別な形でのTMディバイドが出ているんですよ。これはTMが出てきたころから、きっとこういうことがあるんじゃないのと、われわれの仲間内では言っていたことです。TMを使ってやるような案件を大量にやっている会社、ソフトウェア系の会社が多いのですが、そういったところでも、例えばマーケティングの資料や営業資料などの翻訳の必要が出てくるわけです。当然、TMを使っている翻訳者を大量に使っているのです、その中で上

手な人にやってもらう。ところが使いものにならない。結局、TMを使っていない人たち、極端な例としては、いっそのことということで、文芸系から引っ張ってきた例もあるそうです。当然、専門内容や技術内容が分からないから、そういう意味ではかなりぼろぼろなものが出てきます。でも、このほうがまだしも直しようがあるというんです。専門技術については、何回かやる中で少しずつ勉強してくださいということで、何回かやるうちに、やっといういい形になってきたという話があります。私はアンチTMで、MTもTMも使わないという立場なのですが、私自身の経験としても、TMでもすごい量の仕事を出しているところから、時々、特殊ルートで仕事が回ってくるんです。マーケティング資料をTM系で上手な人に出したけれども、どうにもならない。そういう仕事が、私のところへ手間暇かけて出てくる。

結局、TMを使って上手だという人でも、先ほどの図の左上のところのものをやってくれという話になると、実はできない、TM側の癖が出てしまうということが起きているわけです。そういう意味でのTMディバイド、TMをずっと使っている人が、ある意味、不利だというような形でのTMディバイドが発生している。MTディバイドについても恐らく、将来的には同じことが起きるだろうなというのが、私の予想です。

**影浦**：今のディバイドは、現実的なところから発生するものなのか、それとも本来的に二つのタスクスタイルが全く別であってつなぎようがないのか、どちらなのでしょう。つまり、色々問題があるにも関わらずTMを使って早くやらなくてはならないというニーズは一方であって、かつそのようなニーズを生む産業構造があって、それを扱うというグループと、それからマー

ケティング資料やリプロデュースのようなこれまでのハイクオリティ翻訳みたいなところでやらなくてはならないという部分も当然あって、そこは全く別のコンピタンスとして捉えざるを得ない話なのでしょう。山田さんのモデルだと、こっちからこっちへ、連続的に高くなるようなモデルですが、むしろ全く別のタスクとコンピタンスと再定義したほうがいいような話なのか、その辺はどうですか。

**山田**：翻訳の技術として考えると私は別物だと思っています。諸説あるので、これが業界的に唯一の意見でもなければ、正しいかどうかいろいろですが、私自身は別物と言っているのではないかと。両方を完璧にこなすのは、本当にごく限られた人にしかできない。大抵どちらかに引きずられて、片方に永住することになるのだと思います。**影浦**：相互に邪魔をするわけじゃないけれども、別タスクとして、二つの分野で活躍するようなイメージを持たないと、両方はやっていけないという感じですか。

**山田**：だろうと思います。

**武田**：井口さんは「これは翻訳者じゃない」というふうにおっしゃったのですが、もしかしたら、本当に狭い意味での翻訳だけをする人というのは、これから少なくなっていく可能性があると思います。例えば、昨日私が映像翻訳ソフトの会社の方と会っていたというのは、まさにその話で会っていたのですが、翻訳者にスポッティングという非常に技術的な作業を行うことを要件とするようになってきている。新人の翻訳者でそれができない人には、つまり、そのソフトを扱ってスポッティングという技術的なことができれば映像翻訳の仕事が来ないというふうな状況が生まれつつあるらしいのです。そのようなことも、私たちは考えていったほうがいいのではないかと思います。立見（みどり）さん、なに

かひとことこの点についてありませんか。今のディバイドとかMTのアレルギーの話、なんでもいいですよ。全体的な感想でも。

**立見**：技術と進歩について私が思うことなんです。私がTMを導入したのは96～97年ぐらいだったんです。そのころは、まだベンダー側でTMをほとんど使っていなかったんで、一翻訳者としてそれを取り入れることはとてもメリットがあったんですね。仕事のスピードが上がったことと、TMを使って解析できるので、流用できる部分についてはこちらからディスカウントオファーをすることもできて、翻訳者としての付加価値を上げることができたんです。技術をベンダーよりも先に導入することで。大体、翻訳の流れは、クライアントがあって、ベンダーがあって、翻訳者、という階層で行われますので、個人翻訳者は弱い立場なんですけれども、そういふうに自分から積極的に技術を取り入れることで、その流れを変えることができる、とそのときは思ったんですね。でも今のようにMTまで技術が進んでしまうと、一翻訳者として技術を先取りして、自分の付加価値を高めるところまで行けなくなってきたということを感じます。ちょっと前までのレベルの低い技術ならばできたけれども、今は大きな組織で取り入れないと活用できないようなレベルの技術が主流になってし

まって、その辺りが翻訳者としてやりにくいというか、自分から何かを積極的に取り入れることが難しい時代になってきているのは、ある意味、確かかなと思います。

**武田**：すみません、急にコメントを求めています。もう時間になってしまったのですが、これだけは聞いておきたいとかこれだけはコメントしておきたいというのがある方はどうぞ、お手を挙げてください。いらっしゃいませんか。それでは、これをまとめるという大変な仕事になってしまいましたが、基本的には、このような対話を続けて行くべきだと考えます。私はこのチームを結成したことをとても誇りに思っていて、ご覧のように、バックグラウンドも違いますし、みな自分の立ち位置に根ざした考えというのをしっかり持っている、そういう人たちと意見をずっと交わしてこられたというのは、私にとって非常に素晴らしい学びの場であったし、襟を正される思いもしましたし、とても良い経験だったと思っています。これからもこうした対話を続け、今、翻訳、翻訳者の環境で何が起きているかを見続け、その中で、翻訳者養成をどういうふうにやっていったらいいか、そのコンテンツとかデリバリー方法とかを見ていきたいと思います。皆さま、フィードバックや質問がありましたらどうぞご連絡ください。よろしくお願いします。



# これまでの研究の総括と今後の課題

—公開シンポジウム「翻訳『革命』期における翻訳者養成」を中心として—



立教 SFR プロジェクト研究「翻訳『革命』期における翻訳者養成の新たなコンテンツと方法に関する学際的研究」の一環として開催した公開シンポジウム「翻訳『革命』期における翻訳者養成」の終了後、同シンポジウム中に浮かび上がった課題を中心に、本プロジェクトにおけるこれまでの研究を振り返り、今後の研究の方向性を検討する作業を行った。以下は、主要課題に対する現時点での考察をまとめたものである。参考として、シンポジウム後の研究会における各メンバーの発言の要約を付した。

### 1. 「誰が何をするのか？」 翻訳に関わる仕事の多様性

シンポジウムにおける山田優（分担研究者）の基調発言で提示された翻訳者の分類（p. 17）が注目を集めたが、今後、文芸、字幕、実務出版などを含むさまざまな分野の翻訳者（プロ、アマを問わず）、編集者、プロジェクト管理者など、翻訳に関わる人々の役割を包括的に考察することが望まれる。また、特定の翻訳現場における状況とシンポジウムでの討議内容（翻訳環境の全体図）との距離があるとのフィードバックがシンポジウムに参加した翻訳者から寄せられた。翻訳プロセスのモデル化においては、今後、作業形態別（TM 使用の有無など）あるいは分野別の考察をする必要があるだろう。

ラッセル：翻訳者と編集者（チェッカー、機械翻訳の pre- and post-editing をする人など）の完全なすみ分けは難しいと思う。しばらくの間は、翻訳者が編集もすることになるだろうし、そのほうが好ましい。一方、プロジェクト管理は翻訳者でなくてもできる仕事だとは思いますが、やはり翻訳経験者がやるのが好ましいだろう。MIIS の卒業生や現場の人の話によれば、翻訳経験の

ない人がプロジェクト管理者をしていることもあり、そのときは仕事がスムーズに運びにくい場合があるようだ。その一方で、例えば日本語－英語のプロジェクトをしている場合、プロジェクト管理者が日本語を知らない人でも、翻訳経験者だと比較的やりやすいと聞いている。

翻訳を分類するとき、分野で区切るのは難しいと思う。特許や法務でも Trados を使っている人、いない人というように、いろいろな作業形態がある。TM/MT の使用が鍵となっていると思うので、分けるのであれば TM/MT を使っているかどうかのような形態で分けるのがいいだろう。

武田：Linguist と英語で言われるような、言語・翻訳スペシャリスト、言語・翻訳コンサルタントのような人たちの仕事も翻訳に関わる専門職の一つとして発展するかもしれない。彼らは翻訳業界や実際の翻訳作業を俯瞰し、人やツールの適材適所的使い方や助言ができる人たちで、その中には必ずしも翻訳をしない人もいるだろう。

直接翻訳に携わらないプロジェクト管理者でも、翻訳経験者であるのが望ましい。MIIS では翻訳プロジェクト管理を専攻する人も、翻訳実習の授業が必修となっているが、それは大事なことで、翻訳とはどういうものかを認知していないと管理も適切に行えない可能性がある。MIIS 卒業生で大手ソフトウェア企業に翻訳者として雇われた人たちも今ではほとんどがプロジェクト管理やテストエンジニアをしているが、翻訳経験が役立っていることだろう。

プロジェクト管理はボランティア翻訳の分野でも重要だ。震災後のボランティア翻訳でも、翻訳自体を行うボランティアは動員できたが、全体の作業やクオリティーの管理をするのがたいへんだったと聞いている。

翻訳の領域をどのように分けるかについては、文書の種類ではなく、TM/MT 使用の有無を基準に考えるのがいいかもしれない。

**山田**：ローカリゼーションの出現で、一時期は翻訳に付随する作業が増えたと言われた。ローカライズの技術的前処理をするようなエンジニア、翻訳者、チェッカー、用語集作成だけに専念するターミノロジスト、用語が合っているかなどチェックする QA の人などがいて。でも、ローカライズの作業が効率化して、ソフトそのものがローカライズしやすい形になっている。分野に適した人材を探すという、マッチングのコーディネーターも必要だが、登録翻訳者データベースが充実し、そうした作業も半自動化した。メモリーを渡すのも自動化した。でも、post-edit の仕事は増えている。結局、中心で全体をまとめるプロジェクト管理者が必要になる。そういう人には、その分野の仕事に合う人材はどこにいるのか、受注する内容に関して最適なローカライズの方法は何か、といったことを見極める力が求められる。その能力が十分でないために、必ずしも post-edit が適切でない分野までそれをやってしまうから、反感を買ったり mismatches が起きたりしている。

翻訳の領域に関して、翻訳会社は基本的に Trados (TM を使うもの) と Non-Trados (TM を使わないもの) という分け方をしている。

**影浦**：山田さんの話は翻訳企業の産業翻訳モデルの話。翻訳の分類を考える時には、翻訳のタイプとタイプごとの類型に応じた翻訳者および翻訳に関係する作業者モデルを、いくつか整理しておくべきだろう。そのインターセクションとしてあるのが、翻訳のコア、翻訳そのもの。そういう整理を

しないと、それぞれの人が持っている翻訳のイメージがあまりに異なることがあるため、議論に食い違いが生じる。このプロジェクトは、全体を俯瞰した上で、何をどのように配分して、何をどう当てはめようかと考えるものだから、翻訳者の個人的な経験に基づく議論と、レベルの食い違いがあったのではないか。

翻訳の領域の違いということ言えば、例えばマニュアルやソフトのグローバル展開をする場合は上流の方から翻訳を考えて制限言語とか pre-edit の話がでてくるが、出版翻訳では翻訳のためだからといって原作者に pre-edit してもらったり制限言語を使ってもらうわけにはいかない。領域による違いは確実にある。

**関根**：マニュアルの翻訳では、大きなプロジェクトになるとプロジェクト管理をやっている人が翻訳者であるということはほとんどない。企業が製品を作ったときには、マニュアル制作者として制作会社が入ってくるため、プロジェクト管理者は末端の翻訳者とはほとんどコミュニケーションがないような状態だ。

**井口**：仕事の進め方ということで考えると、ローカリ系の動きをするところはおそらくマジョリティーではなくて、マイノリティーではないか。

産業系の仕事の切り方にはさまざまな次元がある。一つは技術内容で分けるやり方で、例えば医療や原子力とかいう軸で切ることがある。特許や法律は、それとは別軸である。特許にも、医薬系、機械工学系などがあり、仕事の進め方についてもそれぞれ微妙に軸がずれる。

**オヘイガン**：翻訳者、編集者、プロジェクト管理者などの分類に加えて、翻訳技術に

特化したテクニシャンという役割も必要になるかもしれない。ただし一方でフリーの翻訳者の場合には逆にこれら別個の役割（翻訳、編集、プロジェクト管理）の境がますます不明瞭化し、一人三役、四役というシナリオも十分に考えられるだろう。

## 2. 機械翻訳・翻訳支援ツール開発者と翻訳者との連携

日本では機械翻訳の研究が非常に盛んで、翻訳支援ツールの開発も進展しているが、MT/TM 分野の研究開発者と、ユーザーであるはずの翻訳者や翻訳学分野の研究者との結びつきがこれまでほとんどなかったとの指摘がシンポジウムの中で議論された。「開発のための開発」や「研究のための研究」ではなく、実際に活用されるような機械翻訳・翻訳支援ツールの開発研究を促し、翻訳者の間に存在するかもしれない機械翻訳・翻訳支援ツールに対する先入観や誤解を解くためにも、また、新たな技術環境の中での翻訳コンピタンスを考えていくためにも、今後、両者間で情報や意見の交換ができる場を積極的に設定していく必要がある。

ラッセル：今回のようなシンポジウムなど対話の場を積極的に設けるべき。開発者は現場の翻訳者の声を取り入れ、翻訳者はより使いやすい TM/MT が開発されるように協力するべき。

影浦：社会の中で使われるためという位置づけの周辺アプリは、今、開発企業もあまりやりたがらないし、研究としてやっても研究にならない。「関心がある。話を聞きたい」という人は大勢いると思うが、実際に話を聞いて、どのようにしてニーズをすくい取るかという共同プロジェクトを立てるのは、若手の短中期的な今後という点で

はリスクではないか、と考える人が多いのではないか。

関根：新しい技術を使って現実の世界に役に立つようなものを作っても、これでは論文は書けないと言われる。

オヘイガン：理想的なのは翻訳者がツール開発チームのメンバーとしてかかわることだろうが、その際、できたものに追従的にコメントするという役割ではなく、中核のデザインメンバーとしてデザインの根本から関われる体制であれば、翻訳者にとってもっと使い勝手のよいツールができるかもしれない。一方そのような役割を果たすためには、翻訳者側にもある程度の技術的知識が必要とされるだろう。

## 3. 今後求められる「翻訳者コンピタンス」とは？

訳出するという翻訳の根源的な能力に加えて、リサーチ力、文書管理・編集能力、また翻訳支援ツールの活用能力なども必要と考えられるが、TM/MT の使用が人の訳出能力の低下あるいは停滞につながる可能性を危惧する声もある。その一方で、分野によっては TM/MT 対応能力が翻訳者の要件になっている現実がある。また、TM/MT 対応能力を、翻訳者に求められる IT リテラシーの一部と考え、個別の仕事で適切であれば TM/MT を積極的に活用できる能力が望ましいという見方もある。コアとなる訳出能力が最重要だが、TM/MT の利点と限界を知り、目的に合った使用方法を見極める能力も必要となるだろう。TM/MT が翻訳者の作業に与える影響について、認知的側面からも研究を進めることを検討すべきだ。

ラッセル：母語と目標言語の運用能力に秀

でており、リサーチ力、分析力、IT リテラシーにすぐれ (TM/MT 対応を含む)、さらに業界を俯瞰的に見る能力を備えていることが、翻訳者に必要なコンピタンスだと考える。

**影浦：**文芸系の翻訳者のコンピタンスとの関係で整理することと、TM/MT の適用領域といった観点から整理することとは少し異なると思う。翻訳者のコンピタンスと MT の関係は、コアコンピタンスの整理になるであろうし、適用領域のほうは付加的なコンピタンスになるので、その両方の違いを意識して話したほうがよいのではないか。

コアコンピタンスと付加的／周辺の／付加価値コンピタンスは実は独立しているわけではなく、コアコンピタンスに対して付加的／周辺の／付加価値コンピタンスがネガティブに働くのではないか、職業としての翻訳者の社会的な位置づけ、あるいは翻訳のコアコンピタンスも含めてネガティブに働くのではないか、という疑問が井口さんから提示された。これに対して翻訳者養成はどう応えるか。一つは、翻訳学校では個人の最終的なコンピタンスが各人で異なっているので、いずれにせよ社会的な作業形態に合わせたコンピタンスを持つ必要があるだろう、という形で割り切ってしまうというやり方がある。ただ、山田さんの図の左上の位置には上がれない。付加的／周辺の／付加価値コンピタンスをつけてそれを強調することが、かえって左上に上がるパスを阻害してしまうのであれば、それは教育上大きな問題だという点が、シンポジウムで一つの大きなテーマとして出て、解決がつかなかった。それが翻訳者養成の問題として残ったと思う。

最終的に翻訳をしない翻訳者、そのほうが儲かるからターミノロジストのほうがい

いという話もあるが、そうなる「翻訳者養成」における翻訳者とは何か、そこで付加価値をどう作るか、という社会的な問題ともリンクしてくる。

**武田：**「コア」のコンピタンス以外のスキルが付加価値ではなく、requirement (要件) になってきている部分もあると思う。例えば、もうすでに安定した仕事の受注があり地位が確立しているような翻訳者は、いまさら TM を勉強する必要はないだろうが、新人が市場に入っていくときには、TM その他翻訳支援ツールを活用できることが requirement になってしまっている。

**井口：**何をコアのコンピタンスかと考えるかによって、何が付加価値になるかが変わってくる。

翻訳は言語の変換ではない。だが TM や MT の概念は「翻訳というのは言語の変換である」というもので、コアのコンピタンスと対立するものである。だから「本当にそれは付加価値なのか」と。

**オヘイガン：**まずは原文の理解力と目標言語の能力、さらに起点言語、目標言語双方の文化的背景を理解できる能力を基本とし、クライアントが何を翻訳の目的としているのかを理解し (不明な際にはそれをはっきりさせる)、その目的にそった可能な限りの翻訳を提供できるためのコンピタンスが理想だろう。そのためには言語能力に加えてリサーチ能力やツールの原理、応用の理解が必要だろう。ただし基本的な言語能力がない場合には後者は砂上の楼閣。(ツールや機械翻訳の訓練だけをしてはそれでは翻訳者養成とはいえない。)

#### 4. 「翻訳大学院」でどのような専門家を育成するのか、何を誰が教えるのか？

翻訳大学院では基本的に、上記の「3.」で提示された翻訳者コンピタンスの涵養をめざすべきだ。つまり、コアのコンピタンスとなる翻訳そのものを教えることは大前提だが、リサーチ能力、文書管理・編集能力、翻訳支援ツール活用能力を有する翻訳の専門家を育成する必要がある。しかし、TM/MT に関する指導が訳出コンピタンスに悪影響を与えないよう注意をしなければならない。また、変化の多い翻訳環境に対応できる柔軟性と自律性を涵養することも重要だ。翻訳演習は翻訳実務者が中心となって教えるべきで、各分野の専門家によるワークショップや短期講習なども実施可能な仕組みの構築が必要だろう。みずからの翻訳行為を分析し、説明できる能力の涵養につながる翻訳理論のクラスは必須である。さらに、翻訳に関する実証研究の成果を反映するような授業が望まれる。今後、理論や実証データにもとづく翻訳教授法に関する研究を進め、翻訳教育に関わる人々と議論を進めていくべきである。

ラッセル：MIIS のカリキュラムが一つの雛形になると思う。だが MIIS にはマクロ、正規表現などを学べる授業や、ダブリンのようなプログラミングの授業が不足している。プログラミングや正規表現の授業があればよい。普通の翻訳者にも求められることのあるノウハウだが、誰でもが知っているわけではないので。

また、短期プログラムのような形で、例えば医学翻訳や法務翻訳など実務者の講師により、より細分化した授業を行うことが望ましい。

TM を使う場合は、言語の変換以上の文書作成能力なども必要になる。メモリーを使わなければならない箇所がある一方で、

一から翻訳しかなければならない箇所もあるからだ。また例えば、メモリーが正しくない場合にはそれを修正する能力も必要になる。言語の変換だけでは、仕事に十分に対応できないだろう。

一人の教員がすべての分野を網羅するのは難しい。実務者と理論家を組み合わせるのが好ましい。実務者の場合は、なるべく様々な分野の翻訳をやった経験があり、その中で何か一つの分野に特に長けている者。理論家は、現役の翻訳者あるいは元翻訳者であるなど、現場を知っている者であることが好ましい。

影浦：MIIS + テキスト処理の技術でしょうか。

現実に分けられるかどうかは別として、少なくとも教える側はいったんその点（言語変換と文書作成能力）を階層化して区別したほうがいいのではないかと。そうしないと、TM を使うにしても、翻訳者として絶対に必要なコンピタンスを得られないままに終わってしまう可能性があるのではないかと。

プログラミングをどの程度まで教えるかは微妙なところだ。ただ、日本語の下処理が使えて、用語抽出ができて、チェックと管理ができるのは便利ではある。とても便利ではあるが…。職業大学院としてなら、あってもいいのかもしれない。

井口：プログラミングができたなら便利かもしれないが、それを大学院で教える必要があるのだろうか。

武田：翻訳はいわゆる言語変換ではないということを身をもって感じさせるために、例えば MIIS では翻訳の最初の授業で日本語レシピを英訳させる授業がある。TM の使い方もちろん教える。

大学院で翻訳を教える以上、理論は入れるべきだと思う。実務者の中には理論を嫌う人がいるかもしれないが、翻訳研究の中には翻訳の実務者や教育者にとって役立つデータを提供する実証研究はたくさんある。そういう意味で研究機関でもある大学院で翻訳者を養成する意味がある。翻訳教育者の中には、翻訳修士課程では、プロの実務者を養成する専門職プログラムと、後に博士課程に進む研究中心のプログラムと分けるべきという考えを持つ人がいる。卒業時に「長い翻訳とその分析」やポートフォリオを提出するか、あるいは研究論文を提出するかの違いになると思うが、両タイプのプログラムで共通して履修すべき基礎科目は少なくないと思う。

オヘイガン：生涯教育の文脈で常に学ぶ姿勢をもつことを教えるのも変化の多い情勢では有効だろう。狭義の「翻訳」に限らず、intercultural、interlingual に関して広範化するさまざまな実践における広義の「翻訳」のシナリオに適宜対応できる柔軟な人材を育てるべき。教師としては、実務経験者、翻訳理論家、各分野（司法、医学、工学など）の専門家、翻訳技術の開発者などが考えられる。

##### 5. 日本における「翻訳大学院」の実行可能性は？短期的、中期的、長期的に何ができるか？

大学院での翻訳者（および通訳者）養成という概念がある程度発達している諸外国（韓国、台湾、中国、オーストラリア、米国、カナダ、EU 諸国など）の状況と比べると、日本の大学院における翻訳者養成はカリキュラム、雇用市場とのつながり、教員確保などの面で取り組むべき課題が大きい。今すぐに、「翻訳大学院」を立ち上げることは難しく、国内外の翻訳大学院プロ

グラムが協力しながら、ワークショップ、短期集中講座などから着手するのが現実的だろう。その時は翻訳実務者、ツール開発者などの協力も請うべきだ。同時に、国連機関やグローバル企業への就職につながる仕組みづくりを目指し、大学院関係者が雇用者と対話を始めることも必要だろう。さらに、個人的な翻訳経験や直感だけに頼らない、理論や実証データに基づく翻訳教授法の開発に向けた研究を進めるべきだと思う。

ラッセル：短期的にはショートプログラム、特別講義など、中期的には国内外の教育機関とのコンソーシアムなど、長期的には引き続きコンソーシアム。いずれの場合も通訳を含めて翻訳通訳大学院にしたほうが、よりダイナミックなプログラムになると思う。

日本で実務の翻訳大学院を作るのは難しいという印象がある。立教など、翻訳関連の講義をすでに設けている大学院に実務の講義や特別講義を加える形を取った方が、実行可能性が高いのではないかと。

武田：翻訳者養成において、日本で翻訳大学院のプログラムを今すぐ立ち上げるのは難しいと思うので、特別講義やショートプログラム、例えば来年度、立教でオヘイガンさんが担当する翻訳テクノロジーの短期集中クラスのようなものを提供していくことなどが、実績の蓄積につながるのではないかと。

日本語関係で翻訳通訳を教えている大学院は世界中にある。例えば韓国、中国、台湾、オーストラリアなど。そういう学校のネットワークができれば、相互の情報交換や合同授業などの協力関係が可能になる。

影浦：実務経験者が先生になるというパス

と、遅れている日本の翻訳状況下で、ここ(大学院)で資格を取ればWIPOをはじめいろいろなところで活躍できるというパスを、向こう5年から10年で示せるといい。

**オハイガン**：中、長期的には学部レベルで言語能力の習得に力をいれてもらうことが必要かもしれない。院のモデルとしては二年間のMIISのシステムはとてもよいと思う。DCU(ダブリンシティ大学)は基本的に一年のコースなのでモジュールの種類は比較的盛り沢山だが、翻訳実践を通じてコンピタンスをより深く追求することが難しいカリキュラム構成だ。最近のMOOCsによるオープンなコースを利用して、学習者が将来翻訳者として特化したい専門分野または自ら興味を持つ分野の科目を一つ選び履修してもらうという選択肢も専門知識の強化に有効かもしれない。また短期的には外国のコースとの正式提携を組み込んだモジュール構成も考えられるでしょう。

#### 結びにかえて

2012年6月に本研究プロジェクトを立ち上げてから、スカイプで東京、カリフォルニア、ダブリンをつなぐ研究会を数回重ね、2013年1月に公開シンポジウムを開催、そ

の後短期間で本書作成にたどり着くことができた。最終的な結論や提案を示せる段階ではないが、わずか半年あまりで何らかの研究報告ができたのは、生産性、効率性が非常に高い研究者が本プロジェクトにそろったことを物語っている。しかし、研究の大きな駆動力となったのは、本プロジェクトのテーマに対する各メンバーの情熱、コミットメントだろう。また、研究分野、立ち位置、視点の異なる面々が集まり、意見をぶつけ合うことを互いに楽しむような開放的な雰囲気の中で研究作業を進められたことは幸運だった。

半年を経て、本研究の第一段階は終了し、上記のように今後の研究課題と方向性が明らかになった。今後は、上記の課題に取り組みながら、翻訳者養成のための具体的なクラスのモジュールを提案し、試験的に実施していく計画である。そのためには、さまざまな翻訳実務者、教育者、研究者、ツール開発者に協力していただくことが必要となる。翻訳に関わるさまざまな人々との対話を大切にしながら、研究を進めていきたい。

立教SFR翻訳研究プロジェクト

代表 武田珂代子

## 参考文献 (本シンポジウムに関連するもののみ)

- ALPAC. (1966). *Languages and machines: Computers in translation and linguistics. A report by the automatic language processing advisory committee, division of behavioral sciences, national academy of sciences, national research council*. Washington, DC: National Academy of Sciences, National Research Council.  
[http://www.nap.edu/openbook.php?record\\_id=9547&page=R1](http://www.nap.edu/openbook.php?record_id=9547&page=R1) (October 1, 2010)
- Beeby Lonsdale, A. (2000). Evaluating the development of translation competence. In C. Schäffner and B. Adab (Eds.), *Developing translation competence* (pp. 185-198). Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Bernardini, S. (2004). The theory behind the practice: translator training or translator education? In K. Malmkjær (Ed.), *Translation in undergraduate degree programmes* (pp. 17-30). Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Bowker, L. and Ehgoetz, M. (2007). Exploring user acceptance of machine translation output: A recipient evaluation. In D. Kenny, and K. Ryou (Eds.), *Across boundaries: International perspectives on translation* (pp. 209-224). Newcastle-upon-Tyne: Cambridge Scholars Publishing.
- Clicktale. (2008). Puzzling web habits across the globe, Clicktale blog, July 31.  
<http://www.clicktale.com/2008/07/31/puzzling-web-habits-across-the-globe-part-1> (August 7, 2009).
- Cronin, M. (2005). Deschooling translation. In M. Tennent (Ed.), *Training for the new millennium: Pedagogies for translation and interpreting* (pp. 249-265). Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Cronin, M. (2010) The translation crowd. *Revista Tradumàtica*, N. 8. Online.  
<http://www.fti.uab.es/tradumatica/revista/num8/articles/04/04art.htm> (December 29, 2012)
- Doherty, S., Kenny, D. and Way, A. (2012). Taking statistical machine translation to the student translator. *AMTA 2012 conference papers*.  
<http://amta2012.amtaweb.org/AMTA2012Files/papers/DohertyKennyWay.pdf>
- Dragsted, B. (2004). *Segmentation in translation and translation memory systems: An empirical investigation of cognitive segmentation and effects of integrating a TM system into the translation process*. Unpublished doctoral dissertation. Copenhagen Business School, Samfundslitteratur.
- Drugan, J. (2011). Translation ethics Wikified: How far do professional codes of ethics and practice apply to non-professionally produced translation?. *Linguistica Antverpiensia*, 10, 111-127.
- Dublin City University. (n.d.). *SALIS Postgraduate Programmes*.  
[http://www.dcu.ie/prospective/degrees.php?school=61&prog\\_type=post](http://www.dcu.ie/prospective/degrees.php?school=61&prog_type=post) (January 6, 2013).
- Dunne, K. J. and Dunne, E. S. (Eds.). (2011). *Translation and localization project management: The art of possible*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- EMT Expert Group. (2009). *Competences for professional translators, experts in multilingual and multimedia communication*.  
[http://ec.europa.eu/dgs/translation/programmes/emt/key\\_documents/emt\\_competences\\_translators\\_en.pdf](http://ec.europa.eu/dgs/translation/programmes/emt/key_documents/emt_competences_translators_en.pdf) (January 6, 2013).
- Fenstermacher, H. (2012). TEP のもっと深い意味—グローバル規模のサプライチェーンを見据えて—『第22回 JTF 翻訳祭』での口答発表 (November 28, 2012)
- Garcia, I. (2009). Beyond translation memory: Computers and the professional translator. *The Journal of Specialised Translation*, 12, 199-214.  
[http://www.jostrans.org/issue12/art\\_garcia.pdf](http://www.jostrans.org/issue12/art_garcia.pdf) (November 1, 2012).
- Garcia, I. (2010). Is machine translation ready yet? *Target*, 22(1), 7-21.
- Gouadec, D. (2007). *Translation as a profession*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Hennessy, E. (2008). Navigating in a new era: What kind of education and training for translators? *Translation Journal*, 12(4).

- <http://www.translationdirectory.com/articles/article1913.php> (December 30, 2012).
- 翻訳研究分科会翻訳学会翻訳教育調査プロジェクトチーム（水野的・長沼美香子・茨田英智・山田優・河原清志）（2008）わが国の大学・大学院における翻訳教育の実態調査概要『通訳翻訳研究』第8号：279-283.
- Kageura, K., Abekawa, T., Utiyama, M. et al. (2011). Has translation gone online and collaborative? An experience from Minna no Hon'yaku. *Linguistica Antverpiensia*, 10, 47-72.
- Kelly, D. (2005). *A handbook for translator trainers*. Manchester: St. Jerome.
- Kent State University. (n.d.). *Institute for Applied Linguistics, M.A. Coursework*.  
<http://appling.kent.edu/graduate/macoursework.cfm> (January 6, 2013).
- Kiraly, D. (2000). *A socialconstructivist approach to translator education: empowerment from theory to practice*. Manchester: St. Jerome.
- McDonough Dolmaya, J. (2011). The ethics of crowdsourcing. *Linguistica Antverpiensia*, 10, 97-110.
- O'Brien, S. (2004). Machine translatability and post-editing effort: How do they relate? *Translating and the computer*, 26. November, 2004.  
<http://www.mt-archive.info/Aslib-2004-OBrien.pdf> (December 30, 2012).
- O'Hagan, M. (2008). Fan translation networks: An accidental translator training environment?. In J. Kearns (Ed.), *Translator and interpreter training: Methods and debates* (pp.158-183). London: Continuum.
- O'Hagan, M. (2011). Introduction: Community translation: Translation as a social activity and its possible consequences in the advent of Web 2.0 and beyond. *Linguistica Antverpiensia*, 10, 1-10.
- O'Hagan, M. (2012). The impact of new technologies on translation studies: a technological turn?. In C. Millán and F. Bartrina (Eds.), *The Routledge handbook of Translation Studies* (pp. 519-533). London and New York: Routledge.
- PACTE Group (2005). Investigating translation competence: Conceptual and methodological issues. *Meta*, 50(2), 609-619.
- Pym, A. (2003). Redefining translation competence in an electronic age: In defence of a minimalist approach. *Meta* 48(4), 481-497.
- Pym, A. (2009). Training translators. In K. Malmkjær and K. Windle (Eds.), *The Oxford handbook of Translation Studies* (pp. 475-489). Oxford: Oxford University Press.
- Pym, A. (2012a). Democratizing translation technologies—the role of humanistic research. In V. Cannavina and A. Fellet (Eds.), *Language and Translation Automation Conference* (pp.14-29). Rome: The Big Wave. [Online]  
[http://usuaris.tinet.cat/apym/on-line/research\\_methods/2011\\_rome\\_formatted.pdf](http://usuaris.tinet.cat/apym/on-line/research_methods/2011_rome_formatted.pdf) (January 6, 2013).
- Pym, A. (2012b). Translation skill-sets in a machine-translation age. *Meta*. (forthcoming)  
[http://usuaris.tinet.cat/apym/on-line/training/2012\\_competence\\_pym.pdf](http://usuaris.tinet.cat/apym/on-line/training/2012_competence_pym.pdf) (January 6, 2013).
- Sager, J. C. (1994). *Language engineering and translation*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Schäffner, C. and Adab, B. (2000). *Developing translation competence* (pp. 185-198). Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Takeda, K. (2010). What interpreting teachers can learn from students. *Translation and Interpreting* 2(1): 39-47.
- Takeda, K. (2012). The emergence of translation studies as a discipline in Japan. In N. Sato-Rosberg and J. Wakabayashi (Eds.), *Translation and translation studies in the Japanese context* (pp. 11-32). London: Continuum.
- 武田珂代子・ラッセル秀子（2012）修士論文としての翻訳：その意義と方法『翻訳研究への招待』第8号：23-38.  
[http://honyakukenkyu.sakura.ne.jp/shotai\\_vol8/02\\_vol8-Takeda\\_Russel.pdf](http://honyakukenkyu.sakura.ne.jp/shotai_vol8/02_vol8-Takeda_Russel.pdf) (January 6, 2013).
- Tatsumi, M., Aikawa, T., Yamamoto, K. and Isahara, H. (2012). How good is crowd post-editing? Its

- potential and limitations. *AMTA 2012 conference papers*.  
[http://amta2012.amtaweb.org/AMTA2012Files/html/8/8\\_paper.pdf](http://amta2012.amtaweb.org/AMTA2012Files/html/8/8_paper.pdf) (December 1, 2012).
- トランスマート (n.d.) 「翻訳道場とは」 <http://www.trans-mart.net/faq/cus/dojo.html> (January 6, 2013).
- Yamada, M. (2011). The effect of translation memory databases on productivity. In A. Pym (Ed.), *Translation research projects 3* (pp. 63-73). Tarragona: Intercultural Studies Group.
- Yamada, M. (2012). *Revising text: An empirical investigation of revision and the effects of integrating a TM and MT system into the translation process*. Unpublished doctoral dissertation. Rikkyo University, Tokyo.

## 各種情報リンク

### 翻訳関係の主な学会・団体

- AAMT (Asia-Pacific Association for Machine Translation)  
<http://www.aamt.info/japanese/index-j.htm>
- 言語処理学会 (ANLP)  
<http://www.anlp.jp/>
- ATA (American Translators Association)  
<http://www.atanet.org/>
- ATISA (American Translation and Interpreting Studies Association)  
<http://www.atisa.org/>
- AUSIT (Australian Institute of Interpreters and Translators)  
<http://www.ausit.org/>
- BCLT (British Centre for Literary Translation)  
<http://www.bclt.org.uk/>
- CATS (Canadian Association for Translation Studies)  
<http://www.act-cats.ca/>
- EAMT (European Association for Machine Translation)  
<http://www.eamt.org/>
- EST (European Society for Translation Studies)  
<http://www.est-translationstudies.org/>
- FIT (International Federation of Translators)  
<http://fit-ift.org>
- HKTS (Hong Kong Translation Society)  
<http://www.hkts.org.hk/>
- IATIS (International Association for Translation and Intercultural Communication)  
<http://www.iatis.org/>
- ITI (Institute of Translation and Interpreting, UK)  
<http://www.iti.org.uk/>
- 日本通訳翻訳学会 (JAITS)  
<http://jaits.jpn.org/home/>
- 日本翻訳者協会 (JAT)  
<http://jat.org/>
- 日本翻訳連盟 (JTF)  
<http://www.jtf.jp/>
- KATS (Korean Association of Translation Studies)  
<http://www.kats.or.kr/modules/doc/index.php?doc=intro>
- KST (Korean Society of Translators)  
<http://www.kstinc.or.kr/index.php>
- TAC (Translation Association of China)  
<http://www.tac-online.org.cn/en/>
- TATI (Taiwan Association of Translation and Interpretation)  
<http://www.taiwantati.org/>
- TAUS  
<http://www.translationautomation.com/>

## 翻訳関係の主な学術誌

*Across Languages and Cultures*

<http://www.akademai.com/content/119691>

*Babel*

<http://www.benjamins.com/#catalog/journals/babel>

*FORUM*

<https://www.stjerome.co.uk/tsa/journal/294/#summary>

*The Interpreter and Translator Trainer*

<https://www.stjerome.co.uk/tsa/journal/2/?bk=4>

『通訳翻訳研究』 (*Interpreting and Translation Studies*)

<http://jaits.jp.org/home/archive.html>

『翻訳研究への招待』 (*Invitation to Translation Studies*)

<http://honyakukenkyu.sakura.ne.jp/>

*The Journal of Specialised Translation*

<http://www.jostrans.org/>

*The Journal of Translation*

<http://www.sil.org/siljot/index.asp?series=932>

*Linguistica Antverpiensia New Series - Themes in Translation Studies*

<http://www.lans-tts.be/>

*Machine Translation*

<http://www.springer.com/computer/ai/journal/10590>

*Meta*

<http://www.erudit.org/revue/meta/2012/v57/n1/index.html> MonTI

*New Voices in Translation Studies*

<http://www.iatis.org/newvoices/>

*Perspectives: Studies in Translatology*

<http://www.tandfonline.com/toc/rmps20/current>

『自然言語処理』

<http://www.anlp.jp/guide/index.html>

*Target*

[http://www.benjamins.com/cgi-bin/t\\_seriesview.cgi?series=target](http://www.benjamins.com/cgi-bin/t_seriesview.cgi?series=target)

*Terminology*

<http://benjamins.com/#catalog/journals/term/main>

*Translation & Interpreting*

<http://trans-int.org/index.php/transint>

*Translation and Literature*

<http://www.euppublishing.com/journal/tal>

*Translation Quarterly*

<http://www.hkts.org.hk/cgi-bin/pub.pl>

*Translation Review*

<http://www.utdallas.edu/alta/publications/translation-review>

*Translation Studies*

<http://www.tandfonline.com/toc/rtrs20/current>

*The Translator*

<https://www.stjerome.co.uk/tsa/journal/1/>

*TTR*

<http://www.erudit.org/revue/ttr/2010/v23/n2/index.html>

## 翻訳研究のオンラインデータベース

BITRA (Bibliography of Interpreting and Translation)

[https://aplicacionesua.cpd.ua.es/tra\\_int/usu/buscar.asp?idioma=en](https://aplicacionesua.cpd.ua.es/tra_int/usu/buscar.asp?idioma=en)

Translation Studies Abstracts

<https://www.stjerome.co.uk/tsa/>

Translation Studies Bibliography

<http://www.benjamins.com/online/tsb/>

## 翻訳プログラムを有する大学・大学院一覧

CIUTI (Conférence Internationale permanente d'Instituts Universitaires de Traducteurs et Interprètes)

<http://www.ciuti.org/members/>

Translator Training Observatory

<http://isg.urv.es/tti/tti.htm>

## 日本語を対象言語に含む海外の主な翻訳大学院プログラム

### オーストラリア

Macquarie University

<http://www.ling.mq.edu.au/postgraduate/coursework/tip.htm>

Monash University

<http://artsonline.monash.edu.au/translation-interpreting/>

University of New South Wales

<http://intlstudies.arts.unsw.edu.au/areas-of-study/interpreting-and-translation-136.html>

University of Queensland

[http://www.uq.edu.au/study/program.html?acad\\_prog=520](http://www.uq.edu.au/study/program.html?acad_prog=520)

### 中国

北京第二外国語学院

<http://www.bisu.edu.cn/Item/19107.aspx>

北京外国語大学

<http://www.at0086.com/BFSU/College.aspx?c=1422>

大連外国語学院

<http://www.dlufl.edu.cn>

広東外語外貿大学

<http://www.gdufs.edu.cn>

### フランス

ESIT

<http://www.univ-paris3.fr/>

### アイルランド

Dublin City University

[http://www.dcu.ie/prospective/files/Brochure\\_DCU\\_MTS\\_MTT.pdf](http://www.dcu.ie/prospective/files/Brochure_DCU_MTS_MTT.pdf)

### 韓国

梨花女子大学

<http://www.ewha.ac.kr/english/>

韓国外国語大学

<http://www.hufs.ac.kr/user/hufsenglish/>

### 台湾

輔仁大学

<http://www.gitis.fju.edu.tw/index.php?newlang=japanese>

## 英国

Imperial College London

<http://www3.imperial.ac.uk/humanities/translationgroup/mscintranslation>

Leeds University

[http://www.leeds.ac.uk/arts/info/125053/centre\\_for\\_translation\\_studies](http://www.leeds.ac.uk/arts/info/125053/centre_for_translation_studies)

London Metropolitan University

<http://www.londonmet.ac.uk/pgprospectus/courses/applied-translation-studies.cfm>

## 米国

Kent State University

<http://appling.kent.edu/graduate/ma/index.cfm>

Monterey Institute of International Studies

<http://www.miis.edu/academics/programs/translation>

## 大学院プログラムで翻訳関係科目を含む日本の主な大学

神戸市外国語大学

<http://www.kobe-cufs.ac.jp/graduate/master/english.html>

神戸女学院大学

<http://www.kobe-c.ac.jp/master-l/inpre/inpre.htm>

神戸大学

<http://web.cla.kobe-u.ac.jp/aboutus/chairprofessor/post-24.html>

大阪大学

<http://www.glocol.osaka-u.ac.jp/education/legal.html>

立教大学

<http://www.rikkyo.ac.jp/grad/i-c/>

東京外国語大学

<http://tufts-interpreter.org/index.html>

東京大学

<http://gamp.c.u-tokyo.ac.jp/field/index.html>

## その他のリンク

European Master's in Translation

[http://ec.europa.eu/dgs/translation/programmes/emt/index\\_en.htm](http://ec.europa.eu/dgs/translation/programmes/emt/index_en.htm)

List of Conferences within Translation, Interpreting, LSP and Terminology

<http://transnordica.se/konfindx.html>

Routledge Translation Studies Portal

<http://cw.routledge.com/textbooks/translationstudies/>

Video Interviews of Translation Scholars

<http://www.est-translationstudies.org/resources/videos.html>

## 研究者紹介

### 研究代表者

#### 武田珂代子 (Kayoko Takeda)

立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科教授。元モントレー国際大学大学院日本語翻訳通訳プログラム主任。通訳・翻訳の実務と教育における長年の経験をもとに、通訳・翻訳の歴史、教育、社会文化的側面、テクノロジーなどの研究に取り組む。日本通訳翻訳学会理事。学術誌 *Interpreting* および *International Journal of Legal Translation and Court Interpreting* の諮問委員。著書に *Interpreting the Tokyo War Crimes Trial* (2010)、『東京裁判における通訳』(2008)、最近の論文に “The emergence of translation studies as a discipline in Japan” (2012)、「日本における通訳者養成に関する一考察」(2012)、“What interpreting teachers can learn from students” (2010)、訳書に『翻訳理論の探求』(A・ピム著) (2010) などがある。

### 研究分担者 (アルファベット順)

#### 井口耕二 (Koji Inokuchi)

立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科兼任講師、翻訳者。専門は実務翻訳・出版翻訳。日本翻訳連盟常務理事、「翻訳フォーラム」共同主宰。主な訳書に、『スティーブ・ジョブズ I・II』(W・アイザクソン著)、『スティーブ・ジョブズ 驚異のプレゼン—人々を惹きつける18の法則』(C・ガロ著)、『スティーブ・ジョブズ 驚異のイノベーション—人生・仕事・世界を変える7つの法則』(C・ガロ著)、『リーダーを目指す人の心得』(C・パウエル著)、『リーン・スタートアップ 誰も知らない起業プロセスでイノベーションを生み出す』(E・リース著)、『ワンクリック—ジェフ・ベゾス率いる Amazon の隆盛』(R・ブランド著)、『レスポンシブル・カンパニー』(Y・シュイナードら著)、『ウィキノミクス マスコラボレーションによる開発・生産の世紀へ』(D・タブスコットら著) など、著書に『実務翻訳を仕事にする』(2001) がある。

#### 影浦 峯 (Kyo Kageura)

東京大学大学院教育学研究科教授。専門は言語論と自然言語処理。学術誌 *Terminology* 編集長。ボランティア翻訳者向け翻訳支援・ホスティングプラットフォーム「みんなの翻訳」を開発し、NGO の翻訳支援を行ってきたほか、リーズ大学 (Leeds University) と神戸市外国語大学の共同プロジェクトや神戸女学院大学など、翻訳教育プロジェクトへの同プラットフォームの適用について調査を進めている。著書に *The quantitative analysis of the dynamics and structure of terminologies* (2012)、共著論文に “Has translation gone online and collaborative? An experience from Minna no Hon'yaku” (2011)、“Brains, not brawn: the use of “smart” comparable corpora in bilingual terminology mining” (2010)、“Helping volunteer translators, fostering language resources” (2010) などがある。

#### オヘイガン統子 (Minako O'Hagan)

国立ダブリンシティ大学 (Dublin City University) 応用言語異文化間研究科上級講師、翻訳研究修士課程前主任。専門は翻訳テクノロジー、マルチメディア翻訳、翻訳テクノロジー教育など。ニュージーランド政府翻訳者を経て、機械翻訳・通信ネットワークの研究で博士号取得。過去10年アイルランドで翻訳支援技術を主とした翻訳教育に携わってきた。テクノロジーが翻訳に及ぼす影響に関する著作多数。最近の論文に “Entertainment and translation” (2012)、“From fan translation to crowdsourcing: Consequences of Web 2.0 user empowerment in audiovisual translation” (2012)、“The impact of new technologies on translation studies: A technological turn?” (2012)、“Transcreating a Japanese video game” (2012)、編著に *Translation as a social: Community translation 2.0*. (2011) などがある。

### ラッセル秀子 (Hideko Russell)

モントレイ国際大学 (Monterey Institute of International Studies) 翻訳通訳言語教育大学院助教授、日本語翻訳通訳プログラム主任。翻訳者。専門は翻訳教育、実務・出版翻訳。米国で約10年間翻訳者養成に関わってきた。共著論文に「修士論文としての翻訳：その意義と方法」(2012)、訳書に『フード・ルール 人と地球にやさしいシンプルな食習慣』(M・ポーラン著)、『雑食動物のジレンマ 上・下』(M・ポーラン著)、『ツール・ド・フランス勝利の礎』(J・ブリュニール著)、『天使に会いました 体験者350人が語ってくれた奇跡と感動のストーリー』(E・ヒースコート・ジェームス) などがある。

### 関根康弘 (Yasuhiro Sekine)

立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士前期課程在籍、翻訳会社クレステックのシステムエンジニア・プロジェクト管理者。名古屋大学法情報センター研究員。専門はシステムエンジニアリング、翻訳メモリー、機械翻訳。法務省の法令翻訳データベース開発に参加。現在、法令用翻訳メモリー管理システムを構築中。論文(共・単著)に“Development of translation memory system”(2012)、「法令用翻訳メモリーデータベースシステムの開発」(2012)、「韓国における立法支援システムの調査報告」(2012)、「法令翻訳における翻訳メモリーの有効性」(2010) などがある。

### 山田 優 (Masaru Yamada)

麗沢大学、青山学院大学、神戸女学院大学兼任講師、翻訳会社・翻訳ラボ代表。専門は翻訳学、翻訳テクノロジー、ローカリゼーション。立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科で翻訳メモリー、機械翻訳に関する研究により博士号取得。モントレイ国際大学大学院で客員研究員として在籍中、ローカリゼーション、プロジェクト管理などのクラスを担当。主な論文に、「作動記憶と訳出プロセス」(2011)、「機械翻訳+ポストエディットの実証研究：先行研究レビュー」(2011)、「機械翻訳+ポストエディットの実証研究(その2)：英日翻訳での実験結果」(2011)、“Applying ‘machine translation plus post-editing’ to a case of English-to-Japanese translation”(2011)、“The effect of translation memory database for productivity”(2011)、“A study of the translation process through translators’ interim products”(2010) などがある。

## 謝辞

本報告書を含む私たちのさまざまな研究活動は立教 SFR（立教大学学術推進特別重点資金）の助成を受けたものです。立教リサーチ・イニシアティブセンターの皆さまによる日頃のご支援に感謝します。公開シンポジムの開催にあたっては、立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科の平賀正子委員長、また同独立研究科事務室、同後期課程院生の種市瑛さんをはじめとする院生の方々にたいへんお世話になりました。また、本報告書は、同後期課程院生の篠原有子さんによる迅速かつ適確な編集補助がなければ完成に至りませんでした。皆さまにあらためてお礼を申し上げます。

立教 SFR 翻訳研究プロジェクト

代表 武田珂代子

---

2013年3月7日発行

編集者 立教 SFR 翻訳研究プロジェクト  
編集代表：武田珂代子 担当：篠原有子

発行者 立教 SFR 翻訳研究プロジェクト  
代表：武田珂代子

発行所 立教 SFR 翻訳研究プロジェクト  
〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1  
立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科  
武田珂代子研究室内

印刷所 三鈴印刷株式会社  
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-32-1  
TEL：03-5276-0811（代表）

---

